

日本言語学会第 170 回大会 要旨集

会長 定延 利之
大会運営委員長 小町 将之
大会実行委員長 嶋田 珠巳

期日：2025 年 6 月 28 日（土）・29 日（日）

会場：明海大学浦和キャンパス

目次

*各題目をクリックするとその頁に移動し、要旨頁右下「▲」をクリックすると目次先頭に戻ります。発表時間他詳細はプログラムをご参照ください。

はしがき

公開シンポジウム（6月29日(日) 13:00-16:30)

「言語（学）にとっての「社会」」 ＜企画・司会＞ 嶋田 珠巳 ＜登壇者＞ 上野 善道「同居家族3世代間に見る言語変化」、田窪 行則「公的場面と親密場面における言語使用について」、林 徹「社会的な「壁」としての言語」、吉田 純「テキストデータにみる公共圏／親密圏の生成の様相」
--

口頭発表（6月28日(土) 13:00-16:30)

A 会場 司会：[4,26,27] 田川 拓海	B 会場 司会：[1,7,10,3,14] 吉田 健二
[4] 森 貞 「P と (は) {思わない/思っていない}」に後続・後起する「S もそう {思う/思っている}」について	[1] 宮崎 順大, 牧 秀樹 「が」・「の」主語嗜好性の調査法に係る検証: VAS 法及び穴埋め式テストを用いた検証
[26] 邢 立中 「じゃあ」との共起から見た日本語の勧誘文—談話構造に着目して—	[7] 大島 デイヴィッド 義和 格助詞ガの脱落に関わる情報構造・韻律的条件について
[27] 山口 洋輝 日本語願望構文の構造について	[10] 席 俊森, 江村 玲, 小泉 政利 日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者による「ガ・ノ」交替文におけるノ格名詞句の解釈について
---	[3] 小林 奏 上代語の従属節におけるガ格は活格か
---	[14] 原 基通, 藤井 友比呂 日本語における非主格・非対格の動詞共起要素の項性について：容認度判断による研究

C 会場 司会：[15,20,35] 久保園 愛, [13,30] 李 林静	D 会場 司会：[6,19,34] 小野 智香子, [8,16] 甲斐 ますみ
[15] 笠原 隆成 日琉諸方言における二項形容詞文の第二項の対格標示	[6] 菱山 湧人 タタール語の確定未来形：非規範的表記から見る語幹末母音の狭母音化
[20] 廣澤 尚之 宮崎県椎葉村尾前方言における複雑述語の段階性	[19] 森 一, 木下 蒼一郎 ジョンはいかにして存在しないものを購入するか: ロシア語の人称代名詞の不定解釈について
[35] 下地 理則 南琉球宮古語伊良部島方言における再帰代名詞を用いた「物語の1人称」用法	[34] 松山 芳瑛 チェコ語における他動性の度合いを決定する要因について
[13] Xiaoshi QIU, Yunwen CHEN The Inner Aspect Analysis of the Directional Prefix (DIR) in Qugu Qiang	[8] 箱崎 光毅 道具機能を兼務する能格の通言語的分布と類型論
[30] 野島 本泰 ブヌン語巒社方言の語彙的接頭辞 <i>mu-</i> の意味論—移動・脱落・逆使役—	[16] 水野 庄吾 長さと拘束性に関する通言語的普遍性: 場所表現に注目して

E 会場 司会：[2,9,11,25,28] 北田 伸一	F 会場 司会：[23,24,31] 甲斐 ますみ
[2] 松田 竜宙 日本語の右方転移文とコピュラ文の並行性	[23] 佐近 優太 インドネシア語における随意的な適用態接尾辞- <i>kan</i>
[9] 木村 宣美 多重後置文：後置要素を隣接させるための移動と削除に基づく分析	[24] 竹内 晶 古ジャワ語の有標 S-V 語順における対比的主題提示
[11] 藤巻 一真 日本語の動詞句分裂文の派生と動詞句前置との共通点について：項と付加詞の分布からの証拠	[31] 王 丹 ベトナム語における類別詞に関する考察
[25] 内堀 朝子, 上田 由紀子, 原 大介 日本手話における引用 RS の構造領域：文末指さしに注目して	---
[28] 菅野 悟, 廣川 貴朗 <i>Can't seem to</i> 構文に対する極小主義的アプローチ	---

G 会場 司会：[12,21,36] 平山 真奈美, [22,29] 矢野 雅貴	H 会場 司会：[5,32,33] 李 林静, [17,37] 浅尾 仁彦
[12] 呉 少晗 閉鎖音における「長短」と「硬軟」という対立パターンは如何に異なるか—日本語と朝鮮語をケースとするランダムフォレスト分析—	[5] 宮永 唯衣花 リトアニア語の移動動詞と共起する不定詞の格支配の通時的变化
[21] Hui-shan LIN Loanword Adaptation of Japanese Pitch Accent in Budai Rukai	[32] 伊藤 一輝, 山藤 顕 アフリカーンス語における比較級・最上級の形成—英語との比較を通じて—
[36] Amalesh GOPE, Tulika GOGOI, Sekholu TETSEO Intonational Avoidance in Chokri: How a Five-Tone Language Preserves Lexical Tone	[33] 藤本 千鶴 バローチー語の擬似等位接続構造の特色
[22] 熊谷 学而 重子音の頻度が音象徴的效果に与える影響：「かわいい」効果の減退	[17] 山口 真史, 伊藤 克将 統語的複合動詞の分類再考：2 種類か？ 3 種類か？
[29] 江村 玲, 鄭 嬌婷, 河地 庸介, 小室 竜也, 小泉 政利 音韻ループ下の文理解に関する fMRI 研究	[37] 田中 秀治 語彙的複合動詞と連濁の有無：分散形態論からのアプローチ

※ [18]は発表辞退。



ポスター発表（6月28日（土）16:15-17:30）

[P-1] 牧 秀樹, 池田 真由子, 井上 結愛 『枕草子』における非標準的係り結び	[P-13] 阪口 慧 形容詞の意味分類における操作的定義の整理と検討
[P-2] 鈴木 岳人, 水口 毅 組み合わせ範疇文法を用いた英文の平均長の解析	[P-14] 萬年 容 ビルマ語の助動詞 = <i>lai</i> ? の用法
[P-3] 岡本 進 フィジー語の二種の他動化した名詞抱合	[P-15] 金子 真 命令の意味を表すショウについての一考察：「代行的コミットメント」という観点から
[P-4] 杜 乃岩, 平田 歩 普遍的な音象徴パターンとしての「韻律の長さ」と「対象物の強さ」の相関関係	[P-16] 胡 春霞, 中野 陽子 日本語の文処理における促進性干渉効果について—遊離数量詞を含む文を用いて
[P-5] 邊 姫京 日本語諸方言におけるアクセント核の無声化生起率への影響	[P-17] 今西 一太 アミ語における書き言葉文体の成立
[P-6] Chihkai LIN Phonological Complexity of <i>Otsu-rui</i> i (-wi) in Old Japanese: From a Corpus-Based Approach	[P-18] 福田 真理子 モンゴル語ウジムチン方言における方向格—形式と使い分けについて—
[P-7] Yosuke SATO Free Exceptive Sluicing in Japanese	[P-19] 朝日 祥之, 高野 照司, 太田 一郎, 松田 謙次郎 現代日本語の音調句生成の変異とその制約条件: 東京語話者の自発音声データを用いた検証
[P-8] 黒崎 まひろ 準体句の派生と主名詞につく助詞「の」の分類について	[P-20] 梁 為棟 与那国方言の非自発的完了表現
[P-9] 内田 まりな 中国語における呼称の位置：ミステリードラマの用例から	[P-21] 佐藤 詠子 ベトナム語形容詞における重複表現と意味クラスの関係
[P-10] 小林 真緒 フィンランド語の話し言葉における「受動形」を使用した用法の再分析	[P-22] 鎌野 慈人 大阪方言における語頭・語末の境界音調の分析
[P-11] 角出 凱紀 日本語におけるメタファーに基づく合成語の分類：「方向音痴」「看板娘」の位置付けをめぐって	[P-23] 高橋 翼 口語インドネシア語における <i>apa</i> の使用：選言接続詞か、疑問標識か？
[P-12] 泉 大輔, 細谷 諒太 「文の包摂」の対照研究に向けた予備調査—日本語・英語・韓国語を比べよう！キャンペーン—	

ワークショップ（6月29日（日）9:30-11:30）

[W-1] 「チュルク諸語における多回接辞と複数行為性」 <企画者>日高 晋介, <司会>菱山 湧人, <コメンテーター>菅沼 健太郎, <発表者>菱山 湧人, 江畑 冬生, アクマタリエワ・ジャクシルク, 日高 晋介
[W-2] 「一致を導き出す統語メカニズムを探る」 <企画者・司会>宗像 孝, <発表者>森竹 希望, 大宗 純, 小町 将之, 宗像 孝, 林 慎将
[W-3] 「言語に現れる離散と連続：一般性と個別性の調和を目指して」 <企画者・司会>田中 太一, <コメンテーター>西村 義樹, <発表者>浅岡 健志朗, 石塚 政行, 鄭 宇鎮, 松田 俊介, 田中 太一

次回大会のお知らせ 奥付



はしがき

日本言語学会第 170 回大会を、2025 年 6 月 28 日（土）と 29 日（日）の両日、明海大学浦安キャンパスで開催します。この大会は、明海大学様との共同開催となっており、開催校の枠を越えて大会の開催にご尽力くださった明海大学関係者の皆様、共同開催の橋渡し役をお務めくださった嶋田珠巳委員長と大会実行委員会の方々に厚くお礼申し上げます。また、周到な準備を進めてくださった小町将之委員長をはじめ大会運営委員会の方々にも心よりお礼申し上げます。

今大会も、口頭発表とポスター発表は 1 日目に行われます。発表の応募は 90 件あり、その内訳は、第 1 希望を口頭発表とする応募が 71 件、第 1 志望をポスター発表とする応募が 19 件でした。採択されたのは 60 件、その内訳は口頭発表 37 件、ポスター発表 23 件で、口頭発表・ポスター発表を併せた採択率は 66.7%です。口頭発表の発表者の方は、多くの聴衆の興味を惹くよう、発表を工夫していただきますようお願いいたします。またポスター発表の方は、口頭発表では踏み込みにくい突っ込んだ議論が聴衆と存分にできるよう、お知恵を絞っていただければと思います。

なお、ポスター発表の終了後には「参加者交流会」を開催します。よろしければぜひこちらにもご参加ください。

大会 2 日目は午前にワークショップがあり、午後には会員総会、学会賞授賞式、会長挨拶、開催校挨拶、公開シンポジウムが予定されていますので、終日お楽しみいただければと思います。なお、ワークショップは応募が 3 件で、全て採択されています。

この大会は、学会ロゴマークの最終選考の場でもあります。会場には投票のための場所が設けられていますので、参加者の皆様は、最終候補の作品群をご覧の上、気に入ったものに投票してください。よろしくお願いいたします。

次回の第 171 回大会は、2025 年 11 月 22 日（土）と 23 日（日・祝）、岡山大学津島キャンパスで開催されます。こちらも奮ってご応募・ご参加ください。

2025 年 6 月

日本言語学会長 定延利之

公開シンポジウム

言語(学)にとっての「社会」

企画：嶋田 珠巳

言語のこまやかな現象を言語学的にまず分析し、その社会環境的背景をあわせて言語接触による言語体系変化を説明し、さらにマクロな文脈で社会学理論と接合していくようなやり方、あり方で、「社会における言語 (language in society)」を扱うことはできないだろうか。本シンポジウムの構想はそんなところから始まった。

人が社会的存在 (social being) であることを考えるとき、言語の研究は、そのやり方がわかっているならば、〈社会〉を含めるのがいい。言語使用という行為に目を向けるとそうするのが妥当のように思えるし、言語の変化や接触の問題を考えるとこのことはさらに強調される。文法調査において、真っ向からむきあうと然るべくしてあらわれてくる〈社会〉、言語変化や世代間継承といった諸問題を考えるところで登場する〈社会〉。〈社会〉と言語の接面はどのような形であられ、どのようにして分析されるのか。

さて、この〈社会〉。山括弧で括って概念的にくるんでいるが、理論的に扱う前に、基本的、具体的なところから考えていこう。そもそも言語の研究において、「社会」は、空間的にはどのようなものとして存在していて、関係的にはどのように言語ないし言語使用の分析に関わるか。本シンポジウムでは、4人——言語学者3名と社会学者1名——の登壇者リレーと全体ディスカッションを通して、「言語(学)にとっての「社会」」を考察する。

同居家族3世代間に見る言語変化

上野 善道

最初の登壇者として、まずは「家族」を「社会」の最小単位と想定して3世代同居家族の個人間に見られる言語変化を報告し、個人の言語と社会との関係を考える手掛かりとしたい。

材料は岩手県雫石町の我が家の例から取る。祖(父)母 (明治半ば生)、父母 (大正末期)、私 (戦後) の方言を対象に、音韻 (母音と子音)、アクセント、文法 (活用形態)、語彙の各変化とその間の相違を中心に扱う。

その変化を大きくまとめておく。音韻は、後の世代ほど拍の合流変化 (方言化) が進む中で、私は一部は標準語化して新たな対立を有するという、相反する動きが見られる。動詞・形容詞の活用形態は世代間の相違が最も大きい。祖母はほとんど標準語と同じなのに、私は動詞仮定形が終止形に合流し ([kagu·ba 書けば)、形容詞はすべて終止形に統一して無活用となり、全体的に分析的表現となって、祖母の mi[tagu [nagunatta (見たくなかった) は miru[tegu [negunatta (<見る・たい・く ない・く・なった) と言う。アクセントは個別的差異にとどまるが、特に母には新しい型を採用する個人的な特徴も見られる。語彙は世代とともに古いものが消える流れの中で、私には理解語である祖母の語彙を、間の世代の母は知らないことがあるのが目を引く。

公的場面と親密場面における言語使用について

田窪 行則

言語記号の意味の獲得にはいわゆる記号接地 (symbol grounding) が必要になる。通常それは外部の事物に関わるが、ある成長段階で他人、また他人からなる社会と関わらざるを得ない。ヒトがケア・テイカー (典型的には家



族) 以外と接するとき社会が言語の記号体系に入ってくる。(前者は意味論, 後者は語用論として扱われることが多いが, 記号の接地に関わると考えればそれほどかわらないと見ることもできる。)

敬語体系はその一つであるが, 敬語は他人との距離に関わり, 距離をとらなければならない他人との接触に関わる言語コミュニケーションはすべてある種の敬体を取る。

そのような広い意味の公的場面は「大人」になってから生じる。現在の危機言語の維持・再生の問題にこのような敬語や敬体に関わることは広く認識されている。

多くの地域言語でその言語の使用が家庭, 親しい友人との親密場面での使用に限定され, 公的場面における使用が制限され, 喪失しており, ほぼ完全に共通語に取り替わってしまっている地域言語も多い。

本発表ではこのような取り替わりがどのようなメカニズムでおきるのかを宮古島西原地区の池間方言と岡山県玉野市の岡山方言との比較・対照によって見る。

社会的な「壁」としての言語

林 徹

Abdal と呼ばれる小さな孤立した集団が使う秘密語 (Eynu 語と Teber 語) の調査の経験から, なぜ秘密語が生まれ継承されてきたかについて仮説を紹介する。「秘密語」とされるが, 実は他の小集団からの語彙借用, 近傍の非 Abdal 住民への拡散, 秘密語を必要とする具体的状況の欠如など, 秘匿性のみをその働きとするには疑問の余地がある。そこで, 地域の共通語 (いずれも大言語) とは異なる言語変種を持つことで, 大集団への同化を防ぎ集団を維持しているのではないか, つまり秘密語は, 外の集団との間に壁を作ることで, 自らの連帯を築くためではないか, と考えた。秘密語には, 乏しい語彙, 規則的な造語法, 甚だしい多義性などピジンと共通する特徴が見られ, これらが成人による秘密語の習得・継承を容易にしている。言語にはスタイルやレジスタなどの変種が多く存在する。それらは社会的な現実の一部を言語で実現していると言われるが, その基本に「排除による連帯」という働きがあるのではないか。そもそも, 「同じ」言語の中にある多様なバリエーションのいずれかを上げて「違う」言語と判断することで, 秘密語と同様に壁を作ることもできる。意図的に作られる言語の壁は, いたるところに見つかるかもしれない。

テキストデータにみる公共圏／親密圏の生成の様相

吉田 純

ハーバーマスの市民的公共圏論を嚆矢として, 公共圏 (public sphere), すなわち「人びとの〈間〉にある共通の問題への関心によって成立する」空間, およびそれと対をなす親密圏 (intimate sphere), すなわち「具体的な他者の生／生命への関心によって形成・維持される」空間という対概念は, 社会空間を理論的・実証的に捉える上での基本的な枠組みとなった。公共圏／親密圏は, ともに言語的コミュニケーションによって生成・維持される空間である。

この対概念によって捉えられる社会空間は, 1980 年代後半以降のコンピュータ・ネットワークの普及とともに, テキスト (文字言語) を中心とした非対面コミュニケーションという新たな様相を呈し始め, その流れは現代の SNS にまで至っている。本報告では, この流れの原点に立ち戻り, 日本におけるネット空間普及の最初期のデータの一例として, 報告者自身が 1990 年代前半に運営していたパソコン通信掲示板のログ (全投稿のテキストデータ) を用い, 計量テキスト分析の手法によって, コンピュータ・ネットワークを基盤とする (当時の) 新たな公共圏／親密圏の生成の様相を探索したい。



[1] 「が」「の」主語嗜好性の調査法に係る検証: VAS 法及び穴埋め式テストを用いた検証

宮崎順大 (岐阜大学・jun_tokaihighschool-gaibutoiawase@yahoo.co.jp) , 牧秀樹 (岐阜大学)

1.はじめに

Miyazaki (2024)は、穴埋め式のテストを用いて「が」「の」交替における個人の偏り(以下「が」「の」主語嗜好性)を調査した。その結果、現代の日本語を母語とする若年層母語話者は「が」主語を好んで使用する傾向にあることを明らかにした。しかし、実験では「が」あるいは「の」のいずれかを選択して記入させる方式を採用しており、その選択した主語に対する傾向度の差異を計測することがなされていない。また、個人の嗜好性を元に全体の偏りを算出していたが、他の手法との参照が十分に行われておらず、調査法として十分確立されたものとはいえない。そこで、本稿ではこれの問題を出発点として、以下の研究課題に取り組む。

(1)研究課題

- a. 調査法によって「が」「の」主語の嗜好度に差は認められるのか。 b. a.をふまえて、「が」「の」主語の嗜好度に偏りが認められるのか。

2.背景

Miyazaki (2024) 岐阜大学において、学部学生に対する穴埋め式調査を用いて「が」「の」交替における嗜好度の個人の偏りを調査し、「が」主語を好んで使用する傾向にあることを示した。

Maki et al. (2004) 沖縄・岐阜において学部学生に対する調査による主格・属格交替の統計的分析を行い、「の」の生起率が2003年の調査当時、低い状態であったことを示した。

3. データ

本調査では、岐阜大学に在学する学部学生32名(平均年齢:18.41)を対象として、Visual Analogue Scale (VAS)法(Gould et al. (2001))を用いて「が」「の」交替における全体の偏りの有無の調査を行った。



3.1 VAS 法を用いた「が」「の」主語の偏りの調査

▲(2) 解答用紙(部分)

※本紙では縮尺の都合上 10cm 原寸ではない

紙面上に 10cm の線分を示し、日本語としてどの程度自然であるかその線分上に縦線を書き込んで回答させる方式を採用した。(2)を参照)問題は、関係節・「が」主語 20 問、関係節・「の」主語 20 問(それぞれ対となる文)、及びベンチマーク文 20 問の計 60 問である。

(3) 例文(部分)

- | | |
|------------------------------|-----------------------------------|
| a. 勢力が強い台風はその台風だ。(関係節・「が」主語) | e. タブレットの壊れた。(ベンチマーク文・単文) |
| b. 品格がある高校はこの高校だ。(関係節・「が」主語) | f. 四郎が叫んだ。(ベンチマーク文・単文) |
| c. 将来のある国はこの国だ。(関係節・「の」主語) | g. 次郎を作った扇子はその扇子だ。(ベンチマーク文・関係節) |
| d. 光沢のある食器はその食器だ。(関係節・「の」主語) | h. 夏子が食べたうどんはそのうどんだ。(ベンチマーク文・関係節) |

調査の結果、ターゲットとする関係節「が」主語の平均値が 66.4、関係節「の」主語の平均値が 67.0 であった。なお、t-検定を用いた p 値は.48 であり 2 つの平均値間には統計的な有意差は存在しなかった。

3.2 穴埋め式テストを用いた「が」「の」主語嗜好性の調査の再計算

Miyazaki (2024)では、穴埋め式テスト(4)を参照)を用いた調査の結果、以下の示唆が与えられた。

(4) 穴埋め式テスト(例、一部)

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| a. 太郎()飲んだお茶は、このお茶だ。(他動詞) | d. サッカー()強い高校は、この高校だ。(い形容詞) |
| b. 授業()終わった時間は、この時間だ。(非対格動詞) | e. 農学部()有名な大学は、あの大学だ。(な形容詞) |
| c. 春子()泣いた日は、その日だ。(自動詞) | |

(5) 任意の個人が、40 問中 27 問以上「が」を選択した場合、「が」主語嗜好性、14 問以上 26 問以下の場合嗜好性なし、13 問以下の場合「の」主語嗜好性とし、それぞれが全体(33 名平均年齢:18.18)に占める割合を元に、全体が「が」主語へ偏っていることを示唆した。

しかし、本稿では個人より全体の偏りを重視するため、全体の偏りの算出に際し、全体の回答数を元にいずれに偏っているか算出し、その比較を行う。その結果、全体の回答数 1320 件に占める「が」の回答数は 1020 件であった。これと、理論値である、「が」「の」1:1 比率との母比率検定を行い、全体として「が」主語への顕著な偏りが改めて確認された($Z = 19.82 > 1.96$)。これは 3.3.1 の VAS 法の調査で得られた結果と反する。

4.議論

4.1 調査法による「が」「の」主語の偏りにおける傾向差

Miyazaki (2024)で採用された穴埋め式テストと、本研究で採用した VAS 法の結果を比較し、これらの 2 手法間で結果に大きな差が生ずることが明らかとなった。これより、「が」「の」交替における全体の偏りの観察は実態の把握が困難である可能性があることが示唆される。

4.2 「が」「の」主語の偏りの存在

本調査では、全体としての「が」「の」主語の偏りの存在は認められなかった。このことは、Miyazaki (2024)及び Maki et al. (2004)と反する。このことは、今後本件についてさらなる調査が必要であることを示している。



参考文献

- Gould, Dinah, Daniel Kelly, Len Goldstone and John Gammon (2001) “Examining the Validity of Pressure Ulcer Risk Assessment Scales: Developing and Using Illustrated Patient Simulations to Collect the Data,” *Journal of Clinical Nursing* 10, 697–706.
- Maki, Hideki and Tamami Morishima (2004) “A Statistical Analysis of the Nominative/Genitive Alternation in Japanese: A Preliminary Study,” *Bulletin of the Faculty of Regional Studies, Gifu University* 14, 87–119.
- 宮崎順大 (2024) 「「が」・「の」主語嗜好性:穴埋め式テストによる実験」, 第 169 回日本言語学会大会要旨集 34–35.



[2]

日本語の右方転移文とコピュラ文の並行性

松田竜宙（岩手医科大学）

本研究では、複節(biclausal)構造を成すとされる日本語の（無空所）右方転移文(1)を取り上げる。Tanaka (2001)以来、日本語の右方転移文は複節構造を持つことが一般に仮定されているが、右方転移文を構成している二つの節が文全体でどのような位置を占めるのかに関しては、十分な議論がされてこなかった。本研究では、右方転移文を構成する二つの節が、(2)のようにコピュラの項として機能しており、コピュラ文の一種であることを主張する。（データの取り消し線は、削除等により音形を持たない部分を示す。）以下に、この主張を支持する根拠を提示する。

第一に、日本語のコピュラ文は、文中の名詞句の果たす意味機能に基づき、指定文と措定文に分類される（上林 1988, 西山 2003）。(3a)の指定文においては、「犯人」が[x が犯人である]という命題関数を表す変項名詞句として機能し、指示的名詞句「太郎」が命題関数の変項の値を指定している。(3b)の措定文においては、「村上春樹」が具体的な指示対象を指示し、「小説家」という叙述名詞がその指示対象の属性を叙述している。これと同じ意味関係が無空所右方転移文にも成り立つ。無空所右方転移文(4a)において、節内の「犯人」と右方転移要素「太郎」がそれぞれ変項名詞句とその命題関数内の変項の値を指定する要素としての関係が成立している。一方、(4b)においては、「村上春樹」と「(有名な) 小説家」との間に指示的名詞と叙述名詞の関係が成立している。このコピュラ文と無空所右方転移文の並行性は、無空所右方転移文がコピュラ文と類似した統辞構造を持つことを示唆している。第二に、措定文と指定文の述語名詞句において用いられる接続表現においても右方転移文との並行性が観察される。コピュラ文においては、指定文の述語名詞句を接続する表現は「と」であり、(5a)は犯人は誰かと言えば、画家と詐欺師の二人である、と解釈される。一方、措定文(5b)は指示的名詞句「犯人」がある特定の人物を指示し、その人物が画家でありかつ詐欺師であるという属性を叙述している。その際、述語名詞句で用いられている接続表現は「で」である(cf. Matsuda 2000)。この接続表現の違いが、そのまま無空所右方転移文(6)でも観察される。(6a)の「犯人」と右方転移要素「その画家とその詐欺師」との間には変項名詞句とその命題関数内の変項の値という関係が成り立っており、二つの右方転移要素「その画家」「その詐欺師」が「と」という接続表現で接続されている。一方、(6b)の「その犯人」と右方転移要素「画家で詐欺師」との間には指示的名詞句とその属性を表す叙述名詞句の関係が成立している。二つの右方転移要素「画家」と「詐欺師」を接続している表現は「で」である。また、節内に空所を含んでも接続表現の区別は維持され、空所を含む右方転移文(6a)は、その右方転移要素が空所の値を指定する役割を担い、(6b)は右方転移要素が空所の指示対象を叙述する属性を表すと考えることができる。このような、コピュラ文と右方転移文の並行性は、右方転移文がコピュラ文と類似した構造を持つことを示唆している。第三に、コピュラ文における再帰代名詞の連結性効果(7)も無空所右方転移文(8)で観察される。(7)のコピュラ文において、照応詞「自分自身」をc 統御していない「太郎」を先行詞とすることができる(三宅 2011)。同様に、(8)において局所性を示す「彼自身」(Katada 1991)が「太郎」と同一の指示対象を指示している。(9)において、S2 内で「彼自身」が「太郎」を先行詞とする解釈が不可能なことから、(8)において、単に複節構造を仮定しただけでは「彼自身」の連結性効果が説明できない。このコピュラ文と無空所右方転移文の並行性も右方転移文がコピュラ文と類似した構造を持つことを示唆している。第四に、コピュラ文内の名詞句を指す代用表現についても、右方転移文との並行性が観察される。(10)が示すように、指示的名詞句とは異なり、措定文の叙述名詞句を受ける代用表現として、「そう」を用いることは可能であるが、人称代名詞を用いることはできない(上林(1988))。 (無空所) 右方転移文においても、措定文に対応している（無空所）右方転移文の右方転移要素を指す代用表現として「そう」を用いることは可能であるが、「それ」「彼」を用いることはできない(11a)。一方、指定文に対応する（無空所）右方転移文の転移要素を「彼ら」で指示することは可能である(11b)。この違いも、コピュラ文と右方転移文の並行性を示しており、両現象が類似の統辞構造を持つことを示唆している。

以上、日本語のコピュラ文と右方転移文が並行的な振る舞いをすることを示す証拠を提示した。このことから、日本語の右方転移文を構成している二つの節が(2)のようにコピュラの項であると主張する。

データ等：(1)太郎が{花子を_ie_i}批判したよ、花子を_i。(2)[[s₁ 太郎が{花子を_ie_i}批判したよ][[s₂ 太郎が花子を_i批判したよ]BE]](3)a. 犯人は太郎だ。(指定文) b. 村上春樹は小説家だ。(措定文) (4)a. 警察は犯人を捕まえたよ、太郎を。b. 太郎は村上春樹に会ったよ、(有名な) 小説家に。(5)a. 犯人は画家と詐欺師だ。(指定文) b. その犯人は画家で(かつ) 詐欺師だ。(措定文) (6)a. 警察は{犯人/e_j}を捕まえたよ、その画家とその詐欺師を。b. 警察が{その犯人/e_j}を捕まえたよ、画家で(かつ) 詐欺師を。(7) 太郎_iの誇りは自分自身_iの父親だ。(8)花子_iは太郎_jの一番の宝物を盗んだよ、彼自身_{*i_j}について書かれた本を。(9)[s₁...太郎_jの一番の宝物...][s₂*花子は彼自身_jについて書かれた本を盗んだよ](10) 太郎は大学生_iです。実は、5年前からずっと*それ/*彼_iそう_iです。(11) a. 警察は{その犯人/e_j}を見つけましたよ、[画家で実業家_j]を。その犯人は、5年前からずっと*それ/*彼_iそう_iです。b. 警察は{犯人/e_j}を見つけましたよ、画家_iと実業家_jを。彼ら_{i+j}二人は、海外に潜伏していました。



参考文献:

- [1] 上林洋二. (1988) 「措定文と指定文ーハとガの一面ー」『文藝言語研究 言語編』 14 :57-74. 筑波大学.
- [2] Katada, Fusa. (1991) The LF representation of anaphors. *Linguistic Inquiry* 22:287-313.
- [3] Matsuda, Yuki. (2000) An Asymmetry in Copular Sentences: Evidence from Japanese Complex Nominals Headed by *-no*. 『言語研究』 117: 3-36.
- [4] 三宅知宏. (2011) 『日本語研究のインターフェイス』 東京：くろしお出版.
- [5] 西山佑司. (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 東京：ひつじ書房.
- [6] Tanaka, Hidekazu. (2001) Right-dislocation as scrambling. *Journal of Linguistics* 37: 551–579.



[3]

上代語の従属節におけるガ格は活格か

小林 奏 (大阪大学大学院)

Synopsis: 上代語の従属節内で主語表示するガ格は活格であるという[4]の提案を踏まえ、上代語における従属節内主語表示(ガ格・ノ格・ゼロ格)の分布を、完了の助動詞「ツ」・「ヌ」の選択的分布を基準とした動詞分類に基づきコーパス調査することで、ガ格の定義について検討を行う。

Issues: [4]は、上代語で所有者項を示すガ格とノ格を名詞の意味に基づき交替する属格とする一方、従属節内で主語を示すガ格を活格とし、上代語の従属節が流動的 S 組織(Fluid-S system, [2])の格アライメントを持つと主張している。流動的 S 組織とは、以下(1a)のように、自動詞「行く」が人間名詞を主語とし、意志的に用いられる時、主語表示に活格(ガ格)が現れるのに対し、(1b)のように無生物を主語とし、非意志的に用いられる時、活格は現れないというように、自動詞の文脈上の意志性・非意志性に応じて、自動詞の主語表示が変化する活格類型のことである。

(1) a. 君が行く道の長手(万葉集 15/3724) b. 明日香川-~~行~~く瀬を早み(万葉集 11/2713) ([4]: 114)

しかし、以下(2)のように、ノ格もまた、人間名詞を主語とする意志的な自動詞に現れることがあるため、動詞の意志性とガ格の分布の関係は曖昧であり、[4]の分析には課題が残る。

(2) よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野(万葉集 1/27) ([4]: 113)

Observation: 意志的な自動詞・非意志的な自動詞は、非能格自動詞・非対格自動詞に対応する(UTAH, [1])ため、本調査では自動詞を非能格自動詞(①)・非対格自動詞(②)・その中間にある自動詞(③)の 3 つに分類する。上代語では完了の助動詞「ツ」が非能格自動詞に、「ヌ」が非対格自動詞に分布するため([5][6])、①は「ツ」に②は「ヌ」に上接する(③は両方に上接する)ものから、〈表 A〉に示す語彙素を検索対象として選んだ。調査の結果、〈表 B〉に示す割合で主語表示が見られ、次の(i)~(iii)が明らかとなった。

〈表 A: コーパス検索する動詞の語彙素一覧〉

自動詞	①	遊ぶ, 泣く, 嘆く, 笑む
	②	越える, 吹く, 渡る, 入る, 成る, 生ふ, 増える, 過ぎる, 泊てる, 移ろう, 隔る, 暮れる, 止まる
	③	行く, 来る
他動詞		飲む, 刈る, 結ぶ, 呼ぶ, 固める, 作る, 擦る, 焼く, 織る, 触れる, 振る, 置く, 縫う, 欲る, 留める, 抜く

〈表 B: 従属節内主語表示の割合〉

主語表示	自動詞			他動詞
	①	②	③	
ガ格	61.9%	8.7%	70.7%	57.1%
ノ格	38.1%	49.6%	17.2%	36.5%
ゼロ格	0.0%	41.7%	12.1%	6.3%

(i): ①と他動詞において、ノ格が 4 割程度現れる。

(ii): 非意志的な自動詞②においてもガ格が現れる。

(iii): ゼロ格は①では見られず、②に集中的に見られる。

(i)(ii)及び③より、ガ格とノ格は動詞の種類に関わらず出現する一方、(iii)から、ゼロ格の分布は動詞の非意志性に

〈表 C: 主語表示と名詞類階層(The Nominal Hierarchy, [3])〉

主語表示	代名詞類			名詞類			
	一人称	二人称	三人称指示	人間(固有)	人間(普通)	有生物	無生物
ガ格	○	○		○	○		
ノ格				○	○	○	○
ゼロ格				○	○	○	○
意味素性	特定性かつ定性			特定性かつ不定性		非特定性かつ不定性	

相関がある。さらに、ガ格・ノ格・ゼロ格の主語名詞には、〈表 C〉の分布が確かめられた。ガ格は「特定性かつ定性」を持つ名詞(代名詞類, 人間名詞(固有・普通))に、ノ格は「非特定性かつ不定性」を持つ名詞(人間名詞(固有・普通), 有生物, 無生物)に相補分布し、人間名詞が「特定性かつ不定性」を持つ場合には、両者が随意的に現れる。(『特定』は話者から、『定』は聞き手から同定可能な対象を意味する。)。例えば、(3)では「(我が)母」は話者にのみ同定可能、聞き手には同定不可能であり、ガ格とノ格が交替できる。これらのことから、ガ格とノ格は、[7][8]の通り主語名詞の意味により交替する属格であり、名詞類階層の人間名詞(固有・普通)において分布の境界があると考えられる。

相関がある。さらに、ガ格・ノ格・ゼロ格の主語名詞には、〈表 C〉の分布が確かめられた。ガ格は「特定性かつ定性」を持つ名詞(代名詞類, 人間名詞(固有・普通))に、ノ格は「非特定性かつ不定性」を持つ名詞(人間名詞(固有・普通), 有生物, 無生物)に相補分布し、人間名詞が「特定性かつ不定性」を持つ場合には、両者が随意的に現れる。(『特定』は話者から、『定』は聞き手から同定可能な対象を意味する。)。例えば、(3)では「(我が)母」は話者にのみ同定可能、聞き手には同定不可能であり、ガ格とノ格が交替できる。これらのことから、ガ格とノ格は、[7][8]の通り主語名詞の意味により交替する属格であり、名詞類階層の人間名詞(固有・普通)において分布の境界があると考えられる。

(3) a. 母が呼ぶ名を申さめど(万葉集 12/3102)「母が呼ぶ名を教えてあげたいが」

b. 我が母の袖もち撫でて我が故に泣きし心(万葉集 20/4356)「おれの母が袖で撫でてはおれのため泣いた気持ち」

Conclusion: 従属節内主語表示のガ格は、動詞の意志性に関わるものというより、主語名詞の意味素性によりノ格と交替を見せる属格であると考えられる。

- [1] Baker, M. (1988). *Incorporation*. Chicago: University of Chicago Press.
- [2] Dixon, R. M. W. (1979). "Ergativity". *Language*, 55(1), 59–138.
- [3] Silverstein, Michael. (1976). "Hierarchy of features and ergativity". *Grammatical categories in Australian languages*/R.M.W. Dixon (Ed.), 112–171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- [4] Yanagida, Y., & Whitman, J. (2009). "Alignment and word order in Old Japanese". *Journal of East Asian Linguistics*, 18, 101-144.
- [5] 木下正俊.(1964). 「助動詞『ツ』と『ヌ』の区別は何とみるべきか」. 『国文学: 解釈と鑑賞』, 29(11), 59-66. 至文堂.
- [6] 野村剛史.(1989). 「上代語のツとヌについて」. 『国語学』, 158, 1-14. 日本語学会 編.
- [7] 野村剛史.(1993). 「上代語のノとガについて-上」. 『国語国文』, 62(2), 1-17. 京都大学文学部 国語学国文学研究室 編.
- [8] 野村剛史.(1993). 「上代語のノとガについて-下」. 『国語国文』, 62, 30-49. 京都大学文学部 国語学国文学研究室 編.



[4] 「P と (は) {思わない/思っていない}」に後続・後起する「S もそう {思う/思っている}」について

森 貞 (福井工業高等専門学校) mori@fukui-nct.ac.jp

本発表の目的は次の2つである。① [1]の下線部の細部を検討し、その成立過程を明らかにする。② [2]で示されている言語感覚調査 (Microsoft forms 利用: 学生(70名:18~19歳)2025年2月6日実施・教職員(46名:20代(1)、30代(11)、40代(17)、50代(10)、60代(7))2025年3月3日~7日実施)の結果をもたらし要因を明らかにする。

[1] a. A: 太郎は病気だとは思わない。B: 僕も [そう] 思う。 b. < [そう] = [太郎は病気ではない] >

この場合には、問題の代名詞の [そう] の先行詞は、先行文脈からは直接には予測できない。この場合の [そう] は、むしろ A の台詞の深層レベルの否定辞を含む命題内容と間接的に呼応することになる。 (山梨 (1992: 51))

[2] あなたが役員 B であると仮定した場合、イとロのどちらの発言をする可能性が高いですか。該当するものを選んで下さい。【代表役員 (代表取締役) の『この内容で提案すれば、株主全員が賛成するはずだ。』という発言に対して】

役員 A: (私は) 必ずしも全員が賛成するとは思いません。 / (私は) みんながみんな賛成するとは思いません。

役員 B: イ. 私もそう思います。ロ. 私もそう思いません。

	イを選択	ロを選択
学生 (70) [M:51, F:19]	60 (85.7%)	10 (14.3%) (内訳: 男子学生 9 名、女子学生 1 名)
教職員 (46) [M:29, F:17]	44 (95.7%)	2 (4.3%) (内訳: 男性 50 代 2 名)

①に関して、Yagi *et al.* (2022) では、[1]のような場合には、Syntactic Neg-raising (Filmore, 1963; Collins and Postal, 2014)でも Semantic-pragmatic Inference (Horn, 1978, 1989; Gajewski, 2007)でも説明可能 (Syntactic Identity が成立) であるが、[3]の場合 (「みんながみんな」は文末に部分否定表現を要求: この場合、「と思わない」は (「わけではない」と同様に) 部分否定表現として機能していることに注意せよ (龔 (2022)) には、Semantic-pragmatic Inference でしか説明できないとしている (Semantic Identity([3b])は成立するが、Syntactic Identity([3a])は成立しない)。

[3] 僕は、みんながみんな、アヤネを褒めたと思っていないし、先生も<[そう]=[a. *みんながみんな、アヤネを褒めたかった / b. みんながみんな、アヤネを褒めたわけではない]>思っている。

(Yagi *et al.* (2022: 356)): 日本語表記への変換および [そう] の中身に関わる加筆は発表者による)

しかし、[4]のように、一般に否定辞繰り上げ述語とは見なされない (考える) が「私もそう思う」の前に使われている場合でも (<[そう]=[地方交付税が総額ではない]>が成立することから、本発表では、別の説明を提案する。

[4] 国務大臣 (前略) 地方交付税総額が過大であるということは考えておりません。○委員 私もそう思います。

(第 193 回国会 衆議院 総務委員会 第 21 号 平成 29 年 5 月 30 日)

本発表者は、以前から、学会発表・論文等で、『日本語の「(と (は)) 思わない」は、基本的には、既定的前提 (例えば、他人 (例えば、聞き手) の考え) を否定する (阿部 (2008))、言わば、【否認】の表現である』と主張しており、それにも関わらず、「A と (は) 思わない」を聞いて「-A と思う」と解釈する場合があるのは、人は「(他人が) どう思っていない (考えていない)」かよりも「(他人が) どう思っている (考えている)」かにより強い関心があるからであるという説明 (①に対する解答) を与えている (Semantic-pragmatic Inference に近い考え方であるが、「(と (は)) 思わない」を、談話的には、【否認】の表現として規定している点に注意せよ)。

「(と (は)) 思わない」を【否認】の表現として捉えることで、[2]の言語感覚調査の結果に対して、談話語用論的な観点から説明が可能になる。(他人の意見に対する)「考え」の表明の場面では、「私も」は《賛成表明》を (聞き手に) 予想させ、「と思う」との親和性が高い。一方、「私は」は《反対表明》を予想させ、(【否認】の表現である)「(と (は)) 思わない」との親和性が高い。[2]において、イを選択したアンケート回答者が圧倒的に多いのは、イを選択することが、役員 A の意見に対して、より明確な《賛成表明》(ポライトネスの観点から役員 A に対しての「心理的負担」はゼロ)につながると判断する回答者が多かったからであろうと予測される (②に対する解答)。別の見方をすれば、ロを選択した場合でも、機能的には、「私も」が《賛成表明》に寄与しているが、「(と (は)) 思わない」の表現が持つ【否認】(《反対表明》)の機能が、多くの回答者に、ロの選択を躊躇させたと言ったことができそうである。

参考文献

- 阿部二郎 (2008) 『『～と思う』と否定 — 『～ないと思う』と『～とは思わない』』『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』 59-1: 33-44.
- Collins, Chris and Paul Postal (2014) *Classical NEG Raising: An essay on the syntax of negation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Filmore, Charles (1963) The position of embedding transformations in grammar. *Word* 208–231.
- Gajewski, Jon (2007) Neg-raising and Polarity. *Linguistics and Philosophy* 30: 289-328.
- Horn, Lawrence R. (1978) Remarks on Neg-Raising. *Syntax and Semantics* 9: 129–220.
- Horn, Lawrence R. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- 龔 柏榮 (2022) 『日本語教育文法における「部分否定表現」の研究』 博士学位論文 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本語文化専攻).
- Yagi, Yusuke, Yuta Sakamoto and Yuta Tatsumi (2022) Against syntactic neg-raising: Evidence from polarity-reversed ellipsis in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 29: 351-359.
- 山梨正明 (1992) 『推論と照応』 東京：くろしお出版.



[5]

リトアニア語の移動動詞と共起する不定詞の格支配の通時的変化

宮永唯衣花（東京大学大学院人文社会系研究科）

リトアニア語は、印欧語族バルト語派の言語であり、現代標準語の名詞類は7つの格(主格、属格、与格、対格、具格、処格、呼格)を持つ。古リトアニア語期(16世紀から18世紀)に成立した最古の文献群は、ほとんどがポーランド語やラテン語、ドイツ語のキリスト教文献の翻訳である。

リトアニア語の不定詞には、名詞用法(～すること)(1)と、副詞用法(～ために)(2,3)の2用法がある。リトアニア語歴史統語論の唯一の研究書である Ambrazas(2006)は、不定詞の目的語が対格から属格に変化したと述べているが、その変化過程は名詞用法にのみ当てはまり、副詞用法では確認されないという問題点がある。そこで本研究は、不定詞の副詞用法の一部を分析することで、副詞用法においても目的語が対格から属格に変化したのか否か、及び、その根拠を明らかにすることを目的とする。さらに不定詞の目的表現に関する通時的変化の過程の解明に寄与することをさらなる目的とする。本研究は、属格目的語が無標であるという印欧語族言語では珍しい現象が実は通常の通時変化として理解可能と主張する点に新規性がある。

本研究の対象は、不定詞の代表的な副詞用法である目的表現(例：講義を「受けるために」大学へ行く)のうち、移動動詞と共起する場合の不定詞である。対象の不定詞の目的語(例では「講義を」)の格標識を調査し、通時的に分析した。不定詞と共起する移動動詞は、基本移動動詞の *eiti* “go”及び *bėgti* “run”に絞り、コーパス分析を行った。本データの分析結果では対格と属格の使用には文献による有意な差は見られない点、翻訳元の文献の構文の影響はない点を確認して、方言別に調査及び議論を行った。

本研究は、古リトアニア語期では、移動動詞と共起する目的用法の不定詞の直接目的語は対格表示が基本であったが、後に属格表示に変化したことを明らかにした。その根拠として、古リトアニア語では属格の直接目的語が出現する条件が、以下の二つに限られていることが挙げられる。

- ① バルト祖語において目的分詞(*supinam*)を形成し得た *suditu* “judge”などの一部の動詞 (Palionis 1974)が、形態が似た不定詞(*suditi*)として再解釈された場合(2)。移動動詞において目的表現は本来目的語を属格で取る目的分詞で表されていた背景があり、不定詞に再解釈された後も属格標示のみ残存した。
- ② 移動動詞、不定詞および直接目的語が、従属接続詞(*nes* ‘because’等)が導く目的節の中にある場合(3)。

当初、属格標示は、従属節内または、目的分詞由来の一部の不定詞に限られていたが、やがて全ての不定詞に拡張される再分析が発生した。その結果、現代標準リトアニア語では移動動詞の不定詞の目的語は全て属格標示となった。通時的変化の結果属格に新たな格の用法である目的用法が確立した。

(1) *grieku átláydima áptureti ne-gali* (sin.GEN forgiveness.ACC.SG have.INF not-can.3SG) // 罪の赦しを得ることはできない (KN SE 205,8)

(2) *Iš tén áteys sudit giw-u ir miruš-iu* (from here come.FUT.3SG judge.INF alive-GEN.PL and dead-GEN.PL) // ここから生きている者と死んでいる者を裁くために来るだろう (KN K 77,39)

(3) *Nesa neatėjau wadinti teisuj-ū* (because not-come.PST.1SG call.INF selfless_person-GEN.PL) // なぜなら私は義人を呼ぶために来たのではないからだ (BtNT Mt 9,13)

参考文献

- Ambrazas, Vytautas. (2006) *Lietuvių Kalbos Istorinė Sintaksė*, Vilnius, Lietuvių kalbos institutas
Bitneris, Samuelis. (1701)(BtNT) *Naujasis Testamentas*, 出版地不明



Minvydas, Samuelis. Božymovskis, Jonas. (1653) (KN) *Katekizmas*, 出版地不明

Palionis, Jonas. (1974) “Supino Vartojimas XVI – XVII a. Lietuvių Rašto Paminkluose” *Baltistica X(2)*, Vilnius



[6]

タタール語の確定未来形：非規範的表記から見る語幹末母音の狭母音化

菱山湧人（新潟大学）

タタール語の確定未来形 {-y)AcAk} (/ačak, -äčäk, -yačak, -yäčäk/) は、未来の出来事について話者が前もって知識を得ている場合や、それが起こることを確信している場合に使われ、「～する（予定だ）」「（絶対に）～する」を意味する（例：/qara-yačak/「見る予定だ」、/ešlä-yäčäk/「働く予定だ」）。キリル文字正書法では動詞語幹にそのまま確定未来形接辞を付けた表記（例：караячак (/qara-yačak/), эшләчәк (/ešlä-yäčäk/)）が規範である。ただし、語幹が母音で終わる動詞の場合は、接辞頭子音 /y/ の影響で語幹末の /a/ [a] が /i/ [u] に、/ä/ [æ] と /e/ [ě] が /i/ [i] に狭母音化することがあり、これに起因する表記の揺れが見られる（例：караячак (/qara-yačak/) ~ карыячак (/qarī-yačak/), эшләчәк (/ešlä-yäčäk/) ~ эшлиячәк (/ešli-yäčäk/)）。

確定未来形における語幹末母音の狭母音化について記述しているのは管見の限りでは Burbiel (2018) のみであり、Burbiel (2018) の記述も十分ではない。Burbiel (2018: 562) は、口語で語幹末の /a/ が /i/ に、/ä/、/e/ が /i/ に変化する傾向があること、/e/ で終わる動詞語幹についてはこの傾向が文語でも観察されることを指摘し、例として төзәчәк (/töze-yäčäk/)「建てる予定だ」の代わりに төзиячәк (/tözi-yäčäk/)、йөрәчәк (/yöre-yäčäk/)「歩く予定だ」の代わりに йөриячәк (/yöri-yäčäk/) が表記されうることを挙げているのみである。本研究では当該現象をより詳細に記述することを目指し、コーパスを用いた定量的調査を行った。

調査の結果、非規範的な表記の割合は、語幹末母音によって高い順に /e/ > /ä/ > /a/ であることが分かった。語幹末母音が後舌広母音 /a/ の場合は非規範的表記の割合が 5%以下なのに対し、前舌広母音 /ä/ の場合は 5~10%とやや高く、前舌中母音 /e/ の場合は 75%以上と規範的表記よりも頻度が高かった。この結果は、実際の発音でもスケールの左の母音ほど高頻度で狭母音化していることを反映していると考えられる。その要因としては、左の母音ほど舌頂が /y/ の調音点である硬口蓋に近いことが挙げられる。不確定未来形は比較的新しい形式であり (Xisamova 2006: 192)、語幹末母音が狭母音化した形が発音・表記ともに規範である現在形（例：карый (/karī-y/ < */kara-y/)「見ている」、эшли (/ešli-y/ < */ešlä-y/)「働いている」）のようになる過渡期にあるといえる。

これらの音変化は、調音の容易さに動機づけられた言語内的変化であると考えられる。類似形式を持つ他のチュルク諸語を見ると、地理的分布に関係なく、類似の現象が起こっている言語もあれば、起こっていない言語もある。Göksel and Kerslake (2005: 19-20, 77) によると、地理的に離れたトルコ語（南西語群）でも口語において /y/ の影響で先行する語幹末母音が狭母音化する現象が見られ、この現象を起こす接辞の一つに未来形 {-y)AcAk} (/acak, -ecek, -yacak, -yecek/) が挙げられている（例：文語 bekle-yecek > 口語 /bekli-ycek/「待つ予定だ」、文語 başla-yacak > 口語 /başlı-yacak/「始まる予定だ」）。一方、地理的に隣接し、タタール語に最も近い言語であるバシキール語（北西語群）では、発表者による調査の結果から類似の現象が起こっていないことが示唆される。/a/、/ä/、/e/ で終わる主な動詞の語幹に確定未来形 {-y)AsAk} (/asak, -äsäk, -yasak, -yäsäk/) を付け、語幹末母音を狭母音化させた表記（例：規範の караясак (/kara-yasak/)「見る予定だ」を карыясак (/karī-yasak/) にしたもの）をコーパス等で検索したところ、1 例もヒットしなかった。バシキール語では現在形でも語幹末母音の狭母音化が発音・表記ともに起こっていない（例：карай (/kara-y/)「見ている」、эшләй (/ešlä-y/)「働いている」）。後続する /y/ の影響で前の母音が狭母音化するという変化に対してバシキール語が保守的であることは、他の形式からも見て取れる（例：タタール語 /šundīy/ に対してバシキール語 /šunday/「そのように」）。

参考文献

- Burbiel, G. (2018) *Tatar Grammar: A Grammar of the Contemporary Tatar Literary Language*. Stockholm – Moscow: Institute for Bible Translation.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. London, New York: Routledge.
- Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiäse*. [タタール語の形態論] Qazan: Mäğärif nāşriyatı.



[7]

格助詞ガの脱落に関わる情報構造・韻律的条件について

大島 デイヴィッド 義和 (名古屋大学; davidyo@nagoya-u.jp)

日本語では、くだけた使用域（文体・話体）において格助詞ガが脱落する現象が見られる。主語名詞句からのガ脱落の容認度に影響を与える要因として、以下のようなものが指摘されてきた（Tsutsui 1983, 影山 1993, Yatabe 1999, 高見・久野 2006）: (a) 主語が狭い焦点にあたる場合、ガ脱落の容認度が下がる。**（焦点条件）**; (b) 主語が述語に隣接していない場合、ガ脱落の容認度が下がる。**（隣接性条件）**; c. 述語が非対格動詞（特に存在・出現を表すもの）の場合に容認度が高く、非能格動詞や他動詞の場合には容認度が下がる。**（述語タイプ条件）**。（ただし、1 人称・2 人称指示の名詞は例外的な振る舞いを見せる。）

- (1) a. (どうしたの? —) ヒロシ {が/ $\emptyset$ } 来た。[非対格動詞]
 b. (どうしたの? —) ヒロシ {が/? $\emptyset$ } どなった。[非能格動詞]
 c. (どうしたの? —) ヒロシ {が/? $\emptyset$ } オフィスに来了。[非対格動詞, 非隣接]
 d. (誰が来たの? —) ヒロシ {が/? $\emptyset$ } 来た。[非対格動詞, 狭い焦点]

Yatabe (1999) が指摘するように、(1a,b) では音調的な違いが見られ、(1a) の場合にのみ述語部分の韻律的な際立ちが抑制される。同様の現象は英語の自動詞文にも観察される (Landblom & Ionin 2022 など)。

- (2) What happened? — {An ACTOR arrived. / An actor BURPED.}

存在・出現動詞などの述語が焦点の一部であっても音調的な抑制を受けやすいという現象の理由については、研究者間で見解が異なる。この点について、本発表では、述語の情報的重要性 (informational significance) が主語のそれと比較して希薄であるほど音調的抑制を受けやすいためであると考える。

Yatabe (1999) による議論ならびに近年の情報構造・韻律インターフェース研究の知見 (Ishihara 2015 など) を踏まえ、本発表ではガ脱落は制約 (3) に従うという提案を行い、また、「焦点性条件」・「隣接性条件」・「述語タイプ条件」はこの制約から帰結することを論じる。

- (3) **ガ脱落原則:** ガ脱落は以下の 2 条件が充足されている場合にのみ容認される。(i) ガ格主語と述語が**情報構造的に一律**であること。すなわち、ともに F (焦点) であるか、ともに G (背景/非焦点) であること。(ii) ガ格主語と述語がともに F である場合には、さらに両者が**韻律的な一体性**を持つこと。
- (4) **韻律的一体性:** $\alpha \cdot \beta$ を任意の統語的句とする。(i) $\alpha \cdot \beta$ が単一のアクセント句に属する、または (ii) β が、ないしは $\alpha \cdot \beta$ の両方が、韻律的に抑制された (tonally reduced) アクセント句に対応する場合 (またその場合に限り)、 $\alpha \cdot \beta$ は韻律的な一体性を持つ。

(1a-d) の情報構造・韻律は、典型的には (5) のようになる。波括弧はアクセント句境界，下線は音調抑制を表す。ここで，(5a) のみが (3) の条件を充足し，ガの脱落を許容することが正しく予測される。

- (5) a. {ヒロシが}_F{来た}_F b. {ヒロシが}_F{どなった}_F
 c. {ヒロシが}_F{オフィスに}_F{来た}_F d. {ヒロシが}_F{来た}_G

ガ格主語と述語 (などの後続要素) がともに G となるのは、原則的に従属節内に限られる。これは、主節環境では、G である主語にはガの代わりにハが用いられるためである (Oshima 2021)。(6a) は「G タイプ」のガ脱落の例 (Yatabe 1999 に類例あり) である。

- (6) a. あの_{NP}人_{NP} (が) ど_Qな_Qった_Vの_{CP}, 無_{ADJ}視_{ADJ}さ_Vれた_{CP}か_Qら_Qだ_Qよ_Q。
 b. {あの_{NP}人_{NP} (が)}_G {ど_Qな_Qった_Vの_{CP}}_G...



参考文献

- Ishihara, Shinichiro (2015) “Syntax-phonology interface”, In Haruo Kubozono (ed.) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. Walter de Gruyter: Berlin. pp.569–618.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- Landblom, Stephanie & Ionin, Tania (2022) “Nuclear accent placement in broad focus intransitives in native and non-native English: an investigation of syntactic and pragmatic factors”, *Glossa: A journal of General Linguistics* 7(1):1–37.
- Oshima, David Y. (2021) “When (not) to use the Japanese particle *wa*: Groundhood, contrastive topics, and grammatical functions”, *Language: A Journal of the Linguistic Society of America* 97:e320–340.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店.
- Tsutsui, Michio (1983) “Ellipsis of *ga*”, *Papers in Japanese Linguistics* 9:199–244.
- Yatabe, Shûichi (1999) “Particle ellipsis and focus projection in Japanese”, *Language, Information, Text* 6: 79–104.



[8]

道具機能を兼務する能格の通言語的分布と類型論

箱崎光毅 (東京外国語大学大学院 博士前期課程)

mitsuki.hakozaki.lg@gmail.com

本発表では、能格型 flagging を持つ言語のサンプルを系統的多様性を可能な限り確保して構築し、他動詞主語 (以下 A とする) 機能を標示する能格が道具機能も標示するような言語 (本発表では道具能格と呼ぶ) の通言語的分布を調査する。さらに、①能格が有生性による異形態を持つかどうか (Arkadiev 2017)、②道具能格であるかどうかという2つのパラメーターに着目した類型論的考察を展開する。

1. 先行研究と研究方針

通言語的に能格が A 機能に加え様々な斜格的機能を標示し得ることは、ディクソン (2018 [1994]) などにおいて報告されている。このような能格は Tibeto-Burman, Pama-Nyungan, Caucasian, Chukotko-Kamchatkan, Papuan, Panoan, Cariban などの語族および諸語に見られ (ディクソン 2018 [1994]: 71-72; Palancar 2009: 567-570)、このうち初めの3つの言語群ではおよそ4分の3の言語にそのような能格が観察される (Palancar 2009: 567)。Palancar (2009: 567-570) はこのような能格の諸相を簡潔にまとめているほか、クリモフ (2016 [1983]: 54-61, 135-143) による内容類型学は能格のこのような「兼務性」の演繹的な説明を試みている。しかし、これらの先行研究は数多く存在する比較的小規模の語族を考慮しておらず系統的多様性の確保が不十分であり、包括的かつ十分に帰納的な研究とは言えない。本発表では能格の道具機能の兼務に焦点を当ててその通言語的分布をより正確かつ大規模に調査し、その諸相の観察から帰納的な類型論的考察を試みる。

2. 調査方法

Glottolog の系統分類を参考に言語サンプルを構築し、記述文法を参照して例文データを収集する。Grambank の Feature 409 における 390 の能格型言語、Arkadiev (2017) が用いた 73 言語、McGregor (2010) が用いた 114 言語を合わせた異なり言語数 505 の能格型言語を母サンプルとする。ここから各言語間の系統的距離が最大限遠くなるように選出した 50 語族 105 言語の言語サンプルを構築して、通言語的分布を調査した。比較的小規模の大きい語族の数は9であり、残りの41語族は比較的小規模の語族あるいは系統的孤立語である。これに発表者が任意に選出した45言語を加え、最終的には合計150言語の諸相を観察した。

3. 調査結果

表の点線で区切った上段が道具能格を持つ言語数、下段が道具機能を兼務しない能格を持つ言語数である。

	アフリカ	ユーラシア	パプネシア	オーストラリア	北アメリカ	南アメリカ	合計
全体	1 (33%)	24 (63%)	16 (80%)	25 (89%)	2 (50%)	9 (75%)	77 (73%)
	2 (67%)	14 (37%)	4 (20%)	3 (11%)	2 (50%)	3 (25%)	28 (27%)
小語族	1 (33%)	1 (17%)	7 (70%)	9 (82%)	2 (50%)	5 (71%)	25 (61%)
	2 (67%)	5 (83%)	3 (30%)	2 (18%)	2 (50%)	2 (29%)	16 (39%)

上の表に示されるように、通言語的におよそ4分の3の能格型言語が道具能格を持つことを再確認した。小語族の言語にもおよそ6割観察されることから、道具能格は特定の大規模な語族に特徴的な現象ではなく能格型言語の格体系それ自体に関連する現象であることが示唆される。

4. 考察

本調査では、能格が有生性による異形態を持つ言語が28言語観察されたが、このうち次の表に例を示す Una 語 (Arkadiev 2017: 727; Louwerse 1988: 112) を含む17言語では、より低い階層の能格が道具機能も標示している。

1SG	2SG	1PL, 2PL	3	固有	親族	人間	有生	無生	道具
ERG1: <i>-ci</i>				ERG2: <i>beji</i>		ERG3: <i>aji</i>			INST: <i>aji</i>

このような言語の存在を踏まえ、①能格が有生性による異形態を持つかどうか、② (いずれかの) 能格が道具も標示するかどうかに着目した4つの類型を立てると、これらは有生性 (有生～無生) および機能 (A～道具) の異同が格形式に反映されている度合いの観点から次の表のように整理することができる。

	いずれかの能格が道具も標示する	いずれの能格も道具を標示しない
能格が有生性異形態を持つ	A. 17 言語 有生性○、機能×	B. 11 言語 有生性△、機能△
能格が有生性異形態を持たない	C. 91 言語 有生性△、機能△	D. 31 言語 有生性×、機能○

本発表では、これら4類型における有生性および機能の格形式への反映の諸相を実例と共に示す。さらに①類型Bと類型Cの言語数の非対称性が、有生性および機能の同一性よりも差異の方が無視されやすい傾向の表れであると論じるほか、②有生性の反映が強い類型Aと機能の反映が強い類型Dに着目し、これらの傾向が能格の道具以外の斜格的機能の兼務にも一貫して観察される可能性を内容類型学に言及しながら示す。

参考文献

- Arkadiev, Peter (2017) Multiple ergatives: From allomorphy to differential agent marking. *Studies in Language* 41(3): 717-780.
- ディクソン, R. M. W., 柳沢民雄・石田修一 (訳) (2018) 『能格性』東京: 研究社 (*Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- Kittilä, Seppo, Katja Västi and Jussi Ylikoski (2011) Introduction to case, animacy and semantic roles. In: Seppo Kittilä, Katja Västi and Jussi Ylikoski (eds.) *Case, Animacy and Semantic Roles*. 1-26. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- クリモフ, G. A., 石田修一 (訳) (2016) 『内容類型学の原理』東京: 三省堂 (*Принципы контентивной типологии*. Москва: академия наук СССР институт языкознания, 1983).
- Louwerse, John (1988) *The Morphosyntax of Una in Relation to Discourse Structure*. Pacific Linguistics: Series B, 100. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- McGregor, William B. (2010) Optional ergative case marking systems in a typological-semiotic perspective. *Lingua* 120. 1610-1636.
- Palancar, Enrique L. (2009) Varieties of Ergative. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer. (eds.) *The Oxford Handbook of Case*. 562-571. Oxford: Oxford University Press.

データベース

Glottolog:

Hammarström, Harald, Robert Forkel, Martin Haspelmath and Sebastian Bank (2024) Glottolog 5.1. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://doi.org/10.5281/zenodo.14006617> (最終閲覧日 2025/03/18)

Grambank:

Skirgård, Hedvig et al. (2023) Grambank reveals the importance of genealogical constraints on linguistic diversity and highlights the impact of language loss. *Science Advances*, 9(16), eadg6175.

Skirgård, Hedvig et al. (2023) Grambank v1.0 (v1.0) [Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7740140> (最終閲覧日 2025/03/18)



[9]

多重後置文：後置要素を隣接させるための移動と削除に基づく分析

木村宣美（弘前大学）

hukimura@hirosaki-u.ac.jp

【2 種類の後置文：移動と削除に基づく分析と削除に基づく分析】(1a, 1b)からわかるように、後置要素が一つのみ生じる後置 (single right-dislocation: RD) 文 (以降, SRD 文) には 2 種類ある。(1)a. e 本当にダメだね, 君は. b. 山田は馬鹿だよ, あいつは 本当に. (久野 1978) (e は後置要素と関係のある要素である。後置要素には波線を引く。)「後置要素」に対応する空所を伴う SRD 文(1a)には bi-clausal 「移動+削除」分析が、空所を伴わない SRD 文(1b)には bi-clausal 「削除」分析が提案されている。【空所がある SRD 文に対する移動と削除に基づく分析】(Tanaka 2001; cf. Ott & de Vries 2016) (1a)の SRD 文(久野 1978; Abe 2016)では、2 番目の節の要素「LGB を」にかき混ぜ規則が適用されて、文頭に移動し、「LGB を」以外の要素 (ジョンが e 読んだよ) が、最初の文との同一性に基づき、削除される。【空所がない SRD 文に対する削除に基づく分析】(Tanaka 2001; cf. Abe 2016, Kimura and Narita 2016) (1b)や(2)は空所を伴わない SRD 文である。(2) ジョンが {あの本を/LGB を} 読んだよ, LGB を. 空所を伴わない SRD 文には、移動を伴わない、焦点を担う要素[+Focus]以外が削除されるという削除分析が提案されている。空所を伴う SRD 文には移動に課される島の効果が観察されるが、空所を伴わない SRD 文では島の効果が観察されない、空所を伴う SRD 文では数量詞の作用域に曖昧さが生じるが、空所を伴わない SRD 文では作用域に曖昧さは生じないという違いがある。

【多重後置文：先行研究】Ishii(2019)や Agbayani and Ishii(2024)では、多重後置(multiple right dislocation)文 (以降, MRD 文) 「(3) 店長が[John が e e 渡し忘れたと]思っているよ, 客に その指輪を.」では、1)「島の効果」が観察されない(4), 2)数量詞の作用域で曖昧性が生じない(5)ことから、移動ではなく、音声形式(PF)部門における音調的右方移動分析(prosodic rightward movement)が提案されている。(4) a. 店長が[Complex NP [John が e e 渡し忘れた]日時]を覚えていたよ, その客に 指輪を. b. 店長が[Adjunct John が e e 渡し忘れたから]とても怒っているよ, その客に 指輪を. (5) 三つの銀行が e e 言ったよ, トヨタだけに 文句を. (4a)では複合名詞句内の「その客に」と「指輪を」が、(4b)では付加詞内の「その客に」と「指輪を」が後置されているにもかかわらず、文法的である。また、(5)では、主語名詞句の「三つの」が、間接目的語「トヨタだけに」より広い作用域を取り、曖昧でないことが指摘されている。Lee(2017)では、MRD に対する mono-clausal 音声的残留 (phonetic resumption) 分析が提案されている。【問題の所在】Ishii(2019)や Agbayani and Ishii(2024)では、MRD 文の特性は、PF 部門での音調的右方移動分析で説明できると論じられているが、島の効果が観察される場合がある。これは、PF 移動分析では予測されない現象である。また、Lee(2017)では、右方移動を仮定することで、束縛現象に適切な説明を与えることができないということが指摘されている。(6)*お互いの先生が e 批判したよ, John と Mary を. 右方移動分析では head-final 構造が仮定され、目的語が照応語を含む主語より構造的に高い位置にあり、文法的であるはずが、非文法的である。MRD 文に対する PF 右方移動分析には問題があるということが出来る。Lee(2017)は、SRD 文と MRD 文に対して、PF での mono-clausal 音声的残留分析を提案しているが、(1b)や(2)のような空所がない RD 文で対応する後置要素との表現が異なる場合が問題になる。Lee (2017)は、文の TP を CP 指定辞に移動させ、元位置に残留する後置要素を発音させることで、RD 文が導かれると提案している。この分析では、元の文と移動した文に含まれる要素は同じである必要がある。

【本発表の分析及び結論】MRD 文は、空所があるか否かにかかわらず、1)移動に課される島の効果が観察されない、2)数量詞の作用域に曖昧さが観察されない (Lee 2017) ことが報告されているが、本発表では、後置要素に課される隣接性条件 (後置要素は隣接していなければならない。)のため、(7b)のように、移動が許され、容認性がある場合があるが、(8)のように、移動に課される島の効果のため、隣接性が確保できず、非文法的になる場合があることを指摘する。(7) a. *Mary が [John が Barriers を読んだと] 言ったよ, Mary が Barriers を. b. ?Mary が [Barriers を John が読んだと] 言ったよ, Mary が Barriers を. (Abe 2016) (8) a. * 店長が /e [Complex NP [{アルバイトが その客に/e} / {その客に/e アルバイトが} 指輪を 渡し忘れた] 日時]を覚えていたよ, 店長が その客に. b. * 店長が /e [Adjunct {アルバイトが その客に/e} / {その客に/e アルバイトが} 指輪を 渡し忘れたから] とても怒っているよ, 店長が その客に. (後置要素が隣接しているか否かを確認するために色付けする。)このことは、従来の分析の言語観察及び予測とは異なり、MRD 文に課される隣接性条件を満たすための移動があり、島の効果が観察される場合があることを示している。従来の分析で島の効果が観察されなかったのは、島内に後置要素が共に含まれていて、後置要素が隣接し、MRD 文に課される隣接性条件が満たされているからである。本発表では、MRD 文に課される隣接性条件を満たすために適用される移動には、島の効果が観察される場合があることに基づき、後置要素を隣接させるための移動と削除に基づく分析 (cf. An 2016, 2019) を提案する。

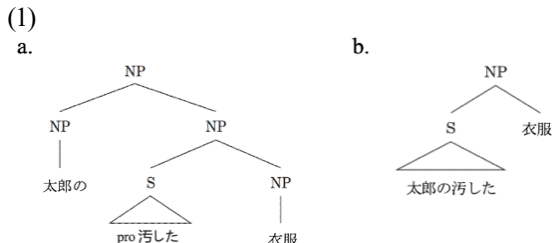
【参考文献】 Agbayani, Brian and Toru Ishii. 2024. “Universal Uniqueness Principle and Multiple Right Dislocation in Japanese,” *WCCFL* 42. An, Duk-Ho. 2016. “Extra Deletion in Fragment Answers,” *Journal of East Asian Linguistics* 25, 313- 350. An, Duk-Ho. 2019. “On Certain Adjacency Effects in Ellipsis Contexts,” *Linguistic Inquiry* 50, 337-355. Abe, Jun. 2016. “Two Types of Japanese Right Dislocation under the Bi-Clausal Analysis.” (To appear in *Proceedings of WAFL 11*.) Ishii, Toru. 2019. “Japanese Multiple Right Dislocation,” *WAFL* 14, 103-116. Kimura, Hiroko. and Hiroki Narita. 2016 “Focus-Inclusive Deletion in Fragment Answers: Evidence from Japanese,” In *Beyond Core Syntax: A Minimalist Approach*, 225-245. 久野 暲 1978. 『談話の文法』 大修館書店 Lee, Jeong-Shik. 2017. A Resumption Strategy for Gapless Multiple Right Dislocation. *Language Research* 53, 23-58. Ott, Dennis & Mark de Vries. 2016. “Right Dislocation as Deletion,” *Natural Language & Linguistic Theory* 34, 641-690. Tanaka, Hidekazu. 2001. “Right-dislocation as scrambling,” *Journal of Linguistics* 37, 551-579.



[10] 日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者による「ガ・ノ」交替文におけるノ格名詞句の解釈について

席 俊森・江村 玲・小泉 政利（東北大学）

【背景】これまでの研究で、「ガ・ノ」交替におけるノ格名詞句には、文法的に 2 種類の統語構造が可能であることが分かっている（Hiraiwa 2005; 三原・平岩 2006; Miyagawa 2012; Watanabe 1996）。例えば、「太郎の汚した衣服」は(1)のような 2 つの構造が可能である。a では「太郎の」が連体修飾語として機能し、衣服の所有者が太郎であることが明確である。行為の主体は、音形を持たない代名詞 pro の指示対象によって決まり、pro が太郎と同一指示ならば太郎が行為者、異なる場合は不明瞭である。これに対して、b の構造では、「太郎の」が主語として解釈され、行為の主体が太郎であることが明示されるが、衣服の所有者についての情報は構造からは明確に示されない（「+行為者 -所有者」と書く）。



【目的】本研究は、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者（以下「学習者」と呼ぶ）の間に、統語構造による解釈差異が存在するという仮説のもと、「ガ・ノ」交替におけるノ格名詞句の解釈を解明する。

【方法】日本語母語話者 60 名と学習者 60 名が容認度判断課題に参加した。格助詞（ガ／ノ）と動詞（有対他動詞／無対他動詞）を組み合わせた名詞修飾節 64 項目を作成し、各節に対して 2 つの質問を提示、それぞれ 3 つの回答を用意した。参加者は、各回答の自然さを 5 段階（1:非常に不自然、5:非常に自然）で評価した。

(2) 佐藤さんの汚した衣服

質問：①誰が汚した？ 回答：i：①佐藤さん ②言及されていない [+行為者 -所有者]
 ②衣服の持ち主は誰か？ ii：①佐藤さん ②佐藤さん [+行為者 +所有者]
 iii：①言及されていない ②佐藤さん [-行為者 +所有者]

データ分析には R の線形混合効果モデルを使用し、ノ格名詞句の容認度を従属変数とした。独立変数には、「ガ・ノ」交替における名詞句の解釈（[+行為者 -所有者]、[+行為者 +所有者]、[-行為者 +所有者]）に加えて、動詞の種類（有対他動詞、無対他動詞）を設定した。また、刺激文項目と実験参加者をランダム変数として扱った。

【結果・考察】図 1 の通り、母語話者と学習者のノ格名詞句についての解釈に明確な差異を確認した。まず、母語話者の結果では、名詞句の解釈の主効果が有意であった（[+行 -所] > [+行 +所] > [-行 +所] ; $p < .001$ ）。よって、日本語母語話者は、ノ格名詞句を主語として理解する（つまり (1)a の構造よりも (1)b の構造を好む）傾向があることが示唆された。また、交互作用も有意で（ $p < .001$ ）、[+行 -所] の解釈では無対他動詞の方が有対他動詞よりも容認度が有意に高かったが、[-行 +所] の解釈では有対他動詞の方が無対他動詞よりも有意に高かった。無対他動詞では動作過程への焦点化が行為者解釈を促進し、有対他動詞では結果状態の認知が所有者解釈を促進すると考察する。

一方、学習者の結果では、名詞句の解釈の主効果が有意であった（[+行 +所] > [-行 +所] > [+行 -所] ; $p < .001$ ）。したがって、学習者はノ格に、所有関係を連想する傾向が強く、(1)b よりも (1)a の構造を好む傾向がある。これは、中国語の「的」が修飾関係の標識として働くことの影響で、日本語の格助詞「ノ」も「所有」を表す機能が強調されるためであろう。また、交互作用も有意で（ $p < .001$ ）、[+行 -所] と [+行 +所] の解釈においては、無対他動詞の方が有対他動詞よりも有意に高い容認度を示したが、[-行 +所] の解釈においては、有対他動詞の方が無対他動詞よりも有意に高い容認度を示した。このことから以下のように考察した。すなわち、有対他動詞の場合には、ノ格環境で自他動詞の混同が促進され、対応する自動詞として解釈されやすく、(1)a における音形を持たない代名詞 pro が存在せず、より単純な構造となり、処理負荷が低くなるため、所有者としての解釈が優先される。

一方、学習者の結果では、名詞句の解釈の主効果が有意であった（[+行 +所] > [-行 +所] > [+行 -所] ; $p < .001$ ）。したがって、学習者はノ格に、所有関係を連想する傾向が強く、(1)b よりも (1)a の構造を好む傾向がある。これは、中国語の「的」が修飾関係の標識として働くことの影響で、日本語の格助詞「ノ」も「所有」を表す機能が強調されるためであろう。また、交互作用も有意で（ $p < .001$ ）、[+行 -所] と [+行 +所] の解釈においては、無対他動詞の方が有対他動詞よりも有意に高い容認度を示したが、[-行 +所] の解釈においては、有対他動詞の方が無対他動詞よりも有意に高い容認度を示した。このことから以下のように考察した。すなわち、有対他動詞の場合には、ノ格環境で自他動詞の混同が促進され、対応する自動詞として解釈されやすく、(1)a における音形を持たない代名詞 pro が存在せず、より単純な構造となり、処理負荷が低くなるため、所有者としての解釈が優先される。

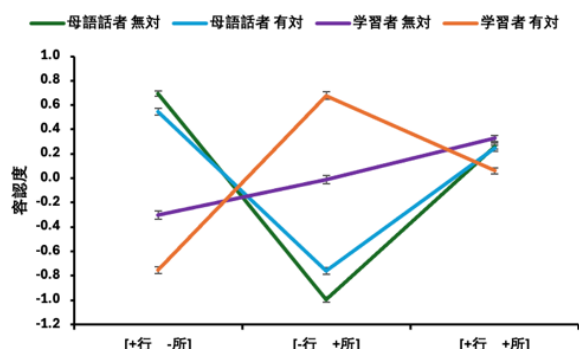


図 1 ノ格表現の条件ごとの標準化容認度

注：エラーバーは標準誤差を示している。

行：行為者；所：所有者；有対：有対他動詞；無対：無対他動詞

【参考文献】

- Hiraiwa, Ken. (2005). Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and Clausal Architecture. Doctoral dissertation, MIT.
- 三原健一・平岩健. (2006). 『日本語の統語構造—生成文法理論とその応用—』. 松柏社, 東京.
- Miyagawa, Shigeru. (2012). *Case, Argument Structure, and Word Order*. Routledge, New York.
- Watababe, Akira. (1996). Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.



動詞句を焦点位置に置く動詞句分裂文の分析として名詞化の「こと」を用いた岸本 (2015, 2016)、および取りたて詞の「など」を用いた藤巻 (2024a, b)がある。動詞句分裂文は名詞句などを焦点位置に置く分裂文とは異なる興味深い特徴を持ち、岸本 (2016)では、VP の内項が前提節の「の」節に現れないという重要な観察がなされている。藤巻 (2024b)では、「など」を用いた場合に動詞句分裂文が可能であり、(1b)にあるように VP の内項（「を」格と「に」格）が「の」節に現れないことが示され、岸本 (2016)の観察が再現された。さらに「など」を用いると動詞句前置も可能であり、(2b)のように Hoji et al. (1989) および Yatsushiro (1999)の観察（VP の内項が残置できないという観察）が再現された。藤巻 (2024b)では、この「など」を用いると動詞句分裂文と動詞句前置の両者が可能であるという特性に基づき、(1)と(2)のように両者の統語的共通点が明らかにされ、両者を結びつける分析として、Hasegawa (1997, 2011) および Hiraiwa and Ishihara (2002)の分裂文の分析に、動詞句前置（実際は不定形の TP の FocP の指定部への移動）を組み込んだ分析の(3)がひとつの可能性として提出されている。

本発表では、この(3)の分析に対してさらなる証拠として付加詞に関するデータを中心に提出し、その理論的分析の予測について考察する。まず、(4)と(5)のように節である内項の「と」節（と「か」節）も、(1)と(2)の「を」格の名詞句と同様の振る舞いをするを新たに追加データとして提出する。次に、「こと」による動詞句分裂文において、VP に付加する付加詞（目的語に関わる二次述語や「事態（変化）の様態」や「行為の結果」を表わす句）が動詞句分裂文の焦点位置には現れるが、「の」節には現れないという岸本 (2015)の観察が、(6)のように「など」を用いた動詞句分裂文において再現されることを示す。その上で、さらに新たなデータとして、動詞句前置における付加詞の分布に関する(7)の例を提出する。(6a, b, c)と(7a, b, c)は同様である。これにより、項のみでなく付加詞においても、「など」を用いた動詞句分裂文と動詞句前置が同様の振る舞いをするのが明らかになる。最後に、理論的には(3)において不定形の TP が前置され焦点位置に現れる点についての予測に関して考察し、この(3)の分析を支持する。

<先行研究のデータと分析: 藤巻 (2024b)>

- (1) a. 太郎がしたのはリンゴを皿に置くなどです。
 b. *太郎がリンゴをしたのは皿に置くなどです。
 (2) a. リンゴを皿に置くなど太郎がした。
 b. *皿に置くなど太郎がリンゴをした。
 (3) [_{TopP} [_{FinP} 太郎が[_{TP}]_i したの]_j は [_{FocP} [_{TP} PRO バナナを食べる] など [_{FinP} 太郎が [_{VP} 太郎が [_{TP} PRO バナナを食べる] など]_i したの]_j だ]

<本発表のデータ：項に関する追加データと付加詞の分布>

- (4) a. [太郎が []_i したの]は[[花子はその店で本を買った]と言うなど]_iだ。 「と」節
 b. *太郎が [花子はその店で本を買った]と]_i []_j したの]は[_{ti} 言うなど]_jだ。 動詞句分裂文
 (5) a. [[花子はその店で本を買った]と（慌てて）言う]など、太郎がした。 「と」節
 b. *[(慌てて) []_i言う]など、太郎が[花子はその店で本を買った]と]_iした。 動詞句前置
 (6) a. [太郎が {裸で／*生で} したの]は[魚を食べる]などだ。 主語または目的語の二次述語
 b. [太郎が {ペンで／*斜めに} したの]は[線を引く]などだ。 「道具」／「事態（変化）の様態」
 c. [太郎が {丁寧に／*真っ黒く} したの]は[壁を塗る]などだ。 「動作の様態」／「行為の結果」
 d. [太郎が {丁寧に／真っ黒く} 塗った]のは壁をだ。 名詞句を焦点位置に置く分裂文
 (7) a. [魚を食べる]など、[太郎が {裸で／*生で} した]。 主語または目的語の二次述語
 b. [線を引く]など、[太郎が {ペンで／*斜めに} した]。 「道具」／「事態（変化）の様態」
 c. [壁を塗る]など、[太郎が {丁寧に／*真っ黒く} した]。 「動作の様態」／「行為の結果」

参照文献

- 藤巻一真 (2024a) 「「など」を用いた分裂文と動詞句前置」『言語教育研究』第 34 号, 51-91, 神田外語大学言語教育研究所.
- 藤巻一真 (2024b) 「日本語の動詞句分裂文と動詞句前置の統語的共通点」『日本言語学会第168回大会予稿集』, 326-332, 日本言語学会.
- Hasegawa, Nobuko (1997) “A Copula-Based Analysis of Japanese Clefts: *Wa*-Cleft and *Ga*-Cleft,” *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, Grant-in-Aid for COE Research Report (1), 15-38, Kanda University of International Studies.
- Hasegawa, Nobuko (2011) “On the Cleft Construction: Is It Simplex or Complex?” *Scientific Approaches to Language* 10, 13-32, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) “Missing Links: Cleft, Sluicing and “*No da*” Construction in Japanese,” *The Proceedings of HUMIT 2001, MIT Working Papers in Linguistics* 43, ed. by Tania Ionin, Heejeong Ko, and Andrew Nevins, 35-54, MIT.
- Hoji, Hajime, Shigeru Miyagawa, and Hiroaki Tada (1989) “NP Movement in Japanese,” Ms.
- 岸本秀樹 (2015) 「隠された主語」岸本秀樹 (著)『文法現象から捉える日本語』, 84-100, 開拓社, 東京.
- 岸本秀樹 (2016) 「文の構造と格関係」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介 (編)『日本語文法ハンドブックー言語理論と言語獲得の観点からー』, 102-145, 開拓社, 東京.
- Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*, Doctoral Dissertation, University of Connecticut.



[12] 閉鎖音における「長短」と「硬軟」という対立パターンは如何に異なるか — 日本語と朝鮮語をケースとするランダムフォレスト分析 —

呉 少晗（東北大学大学院/日本学術振興会）

閉鎖音には、有声開始時間（VOT）を主要な手がかりとする有声対立や送気対立とは別に、口腔に閉鎖をもつ時間に基づく「長短対立（gemination contrast）」と、調音器官の緊張度によるとされる「硬軟対立（fortition contrast）」という対立パターンも存在しており、それぞれは日本語と朝鮮語に代表される。ただし、さまざまな測定結果から、長短対立とみられる日本語の長子音（促音）と短子音（非促音）との間にも、声帯緊張と相関するスペクトル傾斜の測定値に有意差が認められること、および硬軟対立を有するとされる朝鮮語においても、硬子音（濃音）の閉鎖時間が軟子音（平音）に比べて有意に長いことが確認されており、両タイプの対立間の区別の曖昧性が示唆されている。

音素の調音は当該セグメントや隣接セグメント内の複数の要素を含む多次元の情報が統合されたものであり、音素間の対立を実現するために多様なストラテジーが講じられうことは音声で一般的にみられる現象である。しかしながら、それぞれ「長短」「硬軟」と称される閉鎖音の対立パターンの間に明確な一線が引けるのかについては、なお検討の余地があると思われる。そこで本研究は、両タイプの対立に関わりうる各種パラメーターを含めたフレームワークを構築し、それらのパラメーターの当該対立に対する貢献度を定量的に評価するアプローチをもって、両タイプの対立パターンの実現され方を細緻に捉えることをめざした。

本研究では分析にあたり、「ランダムフォレスト（Random Forest）」という機械学習のアルゴリズムを用いて分類を試みた。モデルに入力するデータとして、日本語と朝鮮語（咸鏡方言をベースとする中国・延辺朝鮮族自治州の方言）を母語とする各四名（男女各二名）の話者に発音された音響と電気声門図（electroglottograph）の信号から、対立をなす両系列の閉鎖音の閉鎖時間、声帯緊張を反映する主成分の因子得点、閉鎖音後の f_0 振動、VOT を抽出・算出した。上記の分析を行った結果、Gini 重要度（GI）、Permutation 重要度（PI）、Shapley 値（SHAP）との三種類の指標はおおむね一致した結果を示した。トレーニング済みのモデルが日本語の長・短子音を分類するにあたり、閉鎖時間による貢献が絶対優位にあった一方（GI = 134.10 ; PI = 0.46 ; SHAP = ± 0.60 ）、朝鮮語の硬・軟子音については閉鎖時間の貢献度がもっとも高かったとはいえ（GI = 69.88 ; PI = 0.31 ; SHAP = ± 0.44 ）、主成分因子得点にインデックスされる声帯緊張もかなり関与していた（GI = 66.14 ; PI = 0.17 ; SHAP = ± 0.13 ）。これらの結果から、日本語に代表される閉鎖音の長短対立において、声帯緊張などの諸種の差異が調音に伴われる副次的産物として現れうるが、閉鎖時間の制御は対立を恒常的に支えている単一の柱であるのに対し、一方の朝鮮語のような硬軟対立では、閉鎖時間と声帯緊張の両方が協調して機能することで識別のロバスト性を維持していることが示唆された。なお、長短対立に比べて、閉鎖時間による貢献の低下とともに声帯緊張の役割が顕著に高まったことは、「硬軟対立」という聴覚印象に基づく命名の根拠とも考えられる。

本研究を通じて、それぞれ「長短」「硬軟」と称される閉鎖音の対立パターンは特定のパラメーターに関して類似性があるものの、多様な調音資源の配分され方といったより総合的な視点から捉えれば、本質的な違いを表出しているという知見が得られた。また、本研究で考案した手法の有効性が確認されたことで、今後、他言語や異なるパラメーターへの適用が期待できる。これにより今日に至るまで曖昧であった音声に関する事象や要因の解明が進むことが予想される。



Background Qugu Qiang is an SOV language with subject-verb agreement but no tense markers: Although (1) describes a past event, it contains the morpheme *-a*: which suggests a future reading. Prior studies (Huang & Zhou 2006, Huang 2021) therefore interpret these as aspectual markers.

- (1) *qa nap tɕiɕua qəʂku-a: nɿ, dziku ma-ɣdzə, sə-mə-qəʂku-a.*
 1SG last year house build-FUTCONJ money NEG-enough DIR-NEG-bulid-1SG
"I was going to build a house last year, but I didn't because I didn't have enough money."

The directional prefix (DIR), which originally marked directionality, has grammaticalized to indicate past interpretation, as shown in (2). Previous studies have considered DIR to be the perfective marker.

- (2) *qupu ɕi (sə-)tʰə-jy-jɿ.*
 3SG alcohol (DIR-)have-CSM-REP-CSM
 With DIR: "He drank alcohol again (and now he is drunk)."
 Without DIR: "He is drinking alcohol again (right now)."

Finding 1: DIR and the Objects The perfective analysis fails to explain the relationship between DIR and objects. In (3), a definite or quantified object requires DIR.

- (3) **qupu nəjməχa ɕi xsi-tʂa (sə-)tʰə-jy.*
 3SG yesterday evening alcohol three-CL *(DIR-)have-CSM
 Expected interpretation: "He has drank some three bowls of alcohol last night."
 The only suitable interpretation: "He drank (a specific) three bowls of alcohol last night."

(4) shows that DIR enforces definiteness; the object may be indefinite only when without DIR.

- (4) *qupu wu' (tə-)tsa-jy.*
 3SG horse (DIR-)ride-CSM
 With DIR: "He rode a (specific) horse." Without DIR: "He rode (a) horse."

Finding 2: DIR and the Predicate DIR does not mark perfectivity. Instead, it alters the interpretation of the verb by imposing an endpoint reading. In (5), DIR coerces the stative verb *ɕidze* "believe" into an achievement verb—something a perfective marker should not be able to do.

- (5) *Qa e-dzi-tɕiku tʰe xsi-tən de-ɕidze/ *ɕidze-jy/ *de-ɕidze-jy*
 1SG one-hour-in 3SG three-times DIR-believe/ *believe-CSM/ *DIR-believe-CSM
"I believed him three times within one hour."

DIR as a Telic Marker DIR predicates are not necessarily perfective but are always telic. Example (6) presents an obligation modal, which lacks an outer aspect projection. Its telicity is demonstrated by the co-occurrence of a closed time interval phrase (inPP) *e-dzi-tɕiku* 'in an hour'.

- (6) *ʔu e-dzi-tɕiku dzuɕu-tʰe: da-ta tɕʰi*
 2SG one-hour-in key-DEM DIR-find must
"You must find that key within one hour."

The above evidence indicates that DIR is located within vP in a position that can directly affect both the verb and the object. To explain the relationship between aspect markers, verbs, and objects, we support the claims of Borer (2005a, 2005b), Travis (2010), and others, arguing that inner aspect is the structural configuration of vP and its complement IAspP. The head of the inner aspect phrase (IAspP) is licensed by the quantificational information of the object in SPEC, IAspP, and, together with vP, determines the interpretation of the predicate.

Syntactic Structure and Derivation of DIR We argue that the directional prefix (DIR) in Qiang is the IAspP head, licensed by the object's quantificational feature. The predicate structure is:

- (7) [_{VP} [_{SPEC} Subj] [_{v'} [_{IAspP} [_{SPEC} Obj] [_{IAsp'} [_{VP} [_{SPEC} tObj] [_{v'} [_{XP} tv]] t_{DIR+v}]]] DIR+V]]

We propose that the object moves to IAspP to license the head, DIR, and check the quantification feature, following Borer (2005a, 2005b) and Travis (2010). And the verb spell-outs vP (cf. Sybesma & Shen, 2006), incorporating elements along its movement path, including DIR in IAspP, for morphological reasons (cf. Diesing, 1998).

The grammaticalization of directional affixes is common in Qiangic. However, only Qiang fully encodes time and aspect through DIR, functioning as an inner aspect marker. This provides a reference point for investigating predicate structures and grammaticalization in related languages.

Reference

- Borer, H. (2005a). *Structuring sense, volume I: In name only*. Oxford University Press.
- Borer, H. (2005b). *Structuring sense, volume II: The normal course of events*. Oxford University Press.
- Diesing, M. (1998). Light verbs and the syntax of aspect in Yiddish. *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 1: 119–156
- Huang, B. & Zhou, F. (2006). *A study of the Qiang language*. Sichuan People's Publishing House. [黄布凡、周发成. 2006. 羌语研究. 四川人民出版社.]
- Huang, C. (2021). *An overview of Qiang language and script*. Sichuan Nationalities Publishing House. [黄成龙. 2021 羌语言文字通览. 四川民族出版社.]
- Shen, Y., & Sybesma, R. (2006). Small clause results and the internal structure of the Chinese resultative small clause. *Journal of the Huazhong University of Science and Technology (Social Science Edition)*, 20(4), 40-46. [沈阳、司马翎. 2006. 结果补语小句分析和小句的内部结构. 华中科技大学学报(社会科学版), 20(4), 40-46.]
- Travis, L. deMena. (2010). *Inner aspect*. Springer Netherlands.



[14] 日本語における非主格・非対格の動詞共起要素の項性について：容認度判断による研究

原基通（横浜国立大学[院]）・藤井友比呂（横浜国立大学）

概要：本研究は動詞に共起する、主格でもなく対格でもない要素の項性についての研究である。一般に、統語論の多くの教科書に見られるように、他動詞（あるいは他動性述語）は項を2つ以上取る述語とされ、項とはその述語が要求する義務的要素とされる（Fromkin et al. 1999 など）。一方で、他動詞は、主語に加えて目的語を取る動詞とされ、目的語とは典型的には対格要素である。そのような用語法においては、対格要素を伴うもののみを他動詞と定義することもあり（長谷川 1999、益岡・田窪 2000 など）、対格要素を伴わない(1)の「落ちる」のような例が非対格自動詞として分類されることがある（Fukuda 2017 など）。

(1) 太郎がマンホールに落ちた。

このとき、(1)の「マンホールに」は付加詞のごとく扱われている。一方で、これを項として扱う文献も存在するが（Takano 2011 など）、この議論における対立そのものについての研究は知る限り為されていない。本研究の第1の目的は、(α)「落ちる」、「着く」のような動詞が伴う与格要素の項性（義務性）を示すことである。本研究ではこれを示すため、容認度判断実験を用いた。一般的に、容認度判断実験では刺激文が長いほど文処理コストが増し容認度が落ちるため文長の異なる条件を比較することは困難と考えられているが（Lau et al. 2016）、適切なカウンターbalancingを行うことで、(β) 省略文が省略文であることを示すとき容認度判断実験が活用可能であることを示すことが、本研究の第2の目的である。行った2つの実験では、αおよびβをサポートする結果が得られた。

実験デザイン：2つの容認度判断実験を行った。両実験ともに、与格あるいは対格要因（与格・対格要素の有無）と付加詞要因（時間句の有無）の2要因2水準を条件とするデザインである。

- (2) a. その登山家は3月頃に北岳に登りました。 c. その登山家は_____北岳に登りました。
b. その登山家は3月頃に_____登りました。 d. その登山家は_____登りました。

実験Ⅰでは、擬似分裂文テスト（岸本 2015）に基づき項・付加詞の区別を行い「有性主語+時の付加詞+与格要素（着点）+（無）意思動詞」というマテリアルについて(2)のような例文を各条件6個ずつ計24個提示し、7段階の容認度スコアを得た。条件間で文長が異なるため、フィラー48文を用いて文長と推定される容認度のカウンターbalancingを行った。実験Ⅱでは、対格に取る動詞でターゲット文（例：「その会社員は午前中に報告書を書きました」）を作り直し、同様の実験を行った。

結果：容認度を Z-score に変換して線形混合モデルによる分析を行った。Z-score を縦軸、条件を横軸に取り、条件ごとの平均と標準誤差を示したグラフが Figure 1 および Figure 2 である。実験Ⅰにおいては与格要素の欠落で容認度が減少する傾向が有意に（ $t=7.254$,

$p<0.0001$ ）見られ、時間句の欠落および2要因の交互作用についての固定効果は見られなかった。実験Ⅱにおいては、対格要素の欠落について同様の傾向が有意に（ $t=12.066$, $p<0.0001$ ）見られ、時間句の欠落によって容認度は増加する傾向が有意に（ $t=-2.668$, $p<0.01$ ）見られた。交互作用の固定効果は見られなかった。

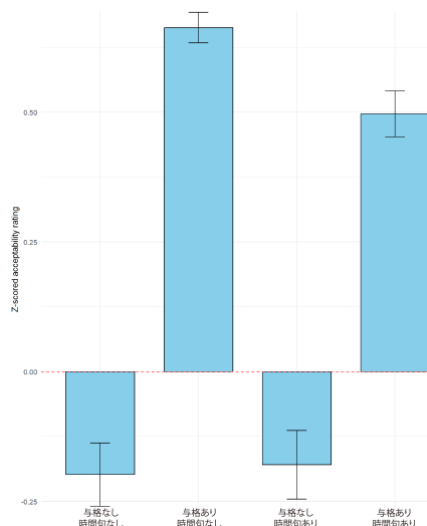


Figure 1：実験Ⅰ

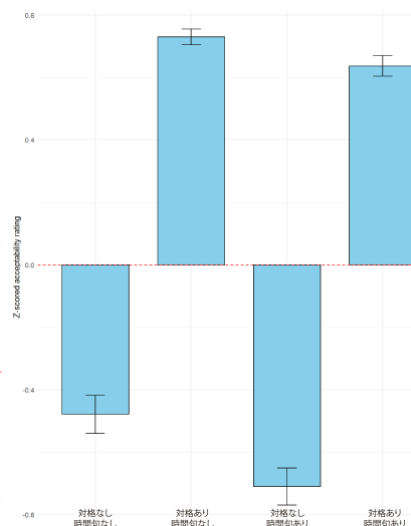


Figure 2：実験Ⅱ

帰結：両実験において、容認度は与格・対格要素の欠落でのみ有意に減少し、時間句の不在条件では減少しなかった。これは容認度判断タスクが項の不在と付加詞の不在を区別することを示す (β)。また、実験Ⅰの与格要素は、実験Ⅱの対格要素と同様に義務性を示した。これは「落ちる」や「着く」に伴う与格要素が項であるということを示した (α)。

参考文献

Fukuda, Shin (2017) Split intransitivity in Japanese is syntactic: Evidence for the Unaccusative Hypothesis from sentence acceptability and truth value judgment experiments, *Glossa: a journal of general linguistics*, 2(1):83,1-41.

長谷川信子(1999) 『生成日本語学入門』 東京：大修館書店.

岸本秀樹(2015) 『文法現象から捉える日本語』 東京：開拓社.

Lau, Jay Han, Clark Alexander, and Lappin Shalom (2017) Grammaticality, Acceptability, and Probability: A Probabilistic View of Linguistic Knowledge. *Cognitive Science*, 41(5):1202-1241.

益岡隆志・田窪行則(2000) 『基礎日本語文法－改訂版－』 東京：くろしお出版.

Fromkin, Victoria Alexandra, Susan Curtiss, Bruce P. Hayes, Nina Hyams, Patricia A. Keating, Hilda Koopman, Pamela Munro, Dominique Sportiche, Edward P. Stabler, Donca Steriabe, Tim Stowell and Anna Szabolcsi (1999) *Linguistics: An Introduction to Linguistic Theory*. Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.

Takano, Yuji (2011) Double complement unaccusatives in Japanese: puzzles and implications. *Journal of East Asian Linguistics*, 20: 229–254.



[15]

日琉諸方言における二項形容詞文の第二項の対格標示

笠原隆成 (東京外国語大学大学院 博士前期課程)

kasahara.t8@gmail.com

本発表では、下地ほか (2022) をふまえ、日琉諸方言における二項形容詞文の第二項が対格で標示される構文や述語の種類に関する含意普遍的な階層を提案する。そして、第二項の対格・与格標示の動機について考察する。さらに、=o を含む複数の種類の対格標識を持つ方言において、二項形容詞文の格標示を観察することで、=o がその方言に本来のものか共通語からの借用によるものかをテストできることを論じる。

1. 先行研究

まず、下地ほか (2022: 159-161) は、二項形容詞文を以下の3つに分類する。なお、形容詞はイ形容詞もナ形容詞も含む。2つの項のうち、述語焦点において先行し、かつ主語と見なせる方を第一項と呼ぶ。

①他動形容詞文：第一項の意味役割が経験者で、第二項の意味役割が刺激であるような構文。

(例：「俺は水が欲しい」「俺は花子が好きだ」「俺は親が怖い」)

②準二重主語文：「上手だ」「下手だ」「得意だ」を述語とし、第二項が行為名詞であるような構文。

2つの項の間に広義の所有関係が成り立つ。(例：「友達は絵が上手だ」)

③二重主語文：2つの項が全体と部分、所有と被所有、主体と関連物の関係にあるような構文。

(例：「俺が頭が痛い」「俺が親が病気だ」「俺は背が高い」)

下地ほか (2022) は二項形容詞文の第二項の与格標示について、次の階層 (1) を提案した。

(1) ある方言において階層の左側ほど与格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。

a. 二項述語タイプの階層：他動形容詞文>準二重主語文>二重主語文

b. 他動形容詞の階層：心情述語>感覚述語

c. 刺激タイプの階層：ネガティブな刺激>ポジティブな刺激

(下地ほか 2022: 167, ただし「与格標示」は原文では「与格交替」)

久保蘭 (2019) は、甌島里方言において第二項の対格標示が階層 (1a), (1b) に従うことを指摘している。

2. 議論①：二項形容詞文の第二項の対格標示に関する階層の提案と対格標示・与格標示の意味

これをふまえて、本発表では、旧中里町、銚子 (発表者調査データ)、埼玉県東南部 (原田 2016)、甲府 (高橋新氏 p.c.)、安島 (松倉 2023)、北方、尾前 (松岡 2019)、野方 (中村 2019)、里 (久保蘭 2019) の9つの方言におけるデータから、二項形容詞文における第二項の対格標示について、次の階層 (2) を提案する。

(2) ある方言において階層の左側ほど対格標示を生じやすく、右で可能なら左でも可能である。

a. 二項述語タイプの階層：他動形容詞文>準二重主語文>二重主語文

b. 他動形容詞の階層：心情述語>感覚述語

対格標示に関する階層 (2a) は、2つの項が所有関係になく互いに独立しているほど他動性が高く、対格標示が好まれるということであると解釈できる。さらに、心情形容詞の意味によって対格標示の生じやすさに違いがあり、「欲しい」は通方言的に最も対格標示を受けやすく、次いで「羨ましい」「好きだ」「嫌いだ」「憎い」も対格標示を受けやすい。これらの心情はいずれも意志性・制御性が高いという特徴がある。

与格標示に関する階層 (1a) は、2つの項の独立性が低いほど二重主格をとりやすいということであると思われる。しかし、他動形容詞文と準二重主語文では第二項が与格で標示される動機が異なると考えられる。他動形容詞文の与格が刺激の動作主性を表している可能性がある (松岡 2024) のに対し、準二重主語文「上手だ」の与格は「堪能だ」「詳しい」「長けている」に通じ、「分野」や「知識」を表すと考えられる。

3. 議論②：対格標識の在来性テストの提案

千葉県銚子方言は、①=ba、②=o、③語末母音の延長という3つの対格標識を持つが、このうち=oだけが二項形容詞文の第二項を標示することができない (3)。

(3) wasi=ŋa nacu{=ba/*=o/=u} sukida. 「私が夏が好きだ。」 (発表者調査データ)

しかし、日琉諸方言には=wo系の対格標識が二項形容詞文の第二項を標示する例が広く見られる (平安京都 (小田 2015)、八丈三根 (金田 2001)、南琉球池間 (松岡 2020) など)。したがって、銚子方言において=oだけが第二項を標示することができないのは、=oが銚子方言に本来のものではなく、(共通語において=oによる第二項の標示が衰退した後で) 共通語から借用されたものであることによると考えられる。

日本語諸方言には、青森県津軽方言 (大槻 2018) など、=oを含むいくつかの対格標識を持ち、=oが共通語からの借用ではないかと疑われている方言があるが、借用と見なす十分な根拠が示されてこなかった。しかし、=oが他の対格標識とちがって二項形容詞文の第二項を標示できないことを確認すれば、=oが共通語からの影響によるものと判断する証拠とすることができる。



参考文献

- 大槻知世 (2018)「青森県津軽方言の情報の表示をめぐって」博士論文, 東京大学.
- 小田勝 (2015)『実例詳解古典文法総覧』大阪: 和泉書院.
- 金田章宏 (2001)『八丈方言動詞の基礎研究』東京: 風間書院.
- 久保蘭愛 (2019)「甕島方言の二格・バ格標示の形容詞」日本言語学会第 159 回大会ワークショップ. 名古屋学院大学名古屋キャンパスしりと, 2019 年 11 月 17 日.
- 下地理則・松岡葵・宮岡大 (2022)「宮崎県椎葉村尾前方言における形容詞述語文の格標示」木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編)『日本語の格表現』157-174. 東京: くろしお出版.
- 中村京介 (2019)「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文, 東京外国語大学.
- 原田伊佐男 (2016)『埼玉県東南部方言の記述的研究』東京: くろしお出版.
- 松岡葵 (2019)「九州方言における形容詞経験者構文の非典型格標示: 宮崎県椎葉村尾前方言と佐賀県武雄市北方方言を中心に」学士論文, 九州大学.
- 松岡葵 (2020)「日琉諸方言における心情述語文の格フレーム: 意味的結合価・意味役割・述語の品詞に着目して」『日本語文法』20 (2): 158-174.
- 松岡葵 (2024)「福岡県柳川市方言の記述研究」博士論文, 九州大学.
- 松倉昂平 (2023)「福岡県三国町安島方言における二項形容詞文の格標示」『日本語学会 2023 年度春季大会 予稿集』73-78.



本発表では、絶対的場所表現と相対的場所表現の2種類の場所表現に着目することで、これらに関して2つの通言語的一般性（相対的場所は絶対的場所比べ、長い形式で表される；相対的場所は絶対的場所比べ、自由形態素で表されやすい）が存在することを報告し、その2つの一般性から演繹的に導かれる更なる一般性（長い形式は短い形式に比べ自由形態素になりやすい）が通言語的な普遍性として存在することを主張する。

本研究では、絶対的場所と相対的場所の2種類の場所を区別する。絶対的場所とは「私は家にいる」のように *figure* (私) と *ground* (家) が分離せず存在する場所表現である。一方、相対的場所とは「私は家の前にいる」のように *figure* が *ground* から相対的に離れた位置 (前) に存在する場所表現で、具体的には、前後、上下、横の5つの位置関係を含める。

相対的場所表現は、いくつか特異な振る舞いを見せるため、先行研究において、様々な観点から広く研究されてきた (e.g. 語彙類型論 (Levinson & Wilkins 2006); 生成文法 (Svenonius 2006; Cinque 2010); 機能談話文法 (Mackenzie 2013); 文法化理論 (Lehmann 2015; Svorou 1994))。しかしながら、これに関して、言語の形態統語に関する普遍性を導出することを目標とする形態統語類型論の観点からは全く研究がされていない。そこで、本研究はその溝を埋めるべく、相対的場所表現に関して、形態統語類型論研究を行い、相対的場所表現の更なる理解へ貢献しようとするものである。その結果として、以下の2つの通言語的一般性を報告する。①相対的場所表現は一般的場所表現より長い形式で表される。以下の(1)~(3)のように相対的場所 (a) は様々な方法で表現されるが、いずれの方法においても絶対的場所表現 (b) より短くはない。②相対的場所表現は、多くの場合で自由形態素 (*free form*) であるが、絶対的場所表現は多くの場合、拘束形態素 (*bound form*) である。以下の3つの例においても、(a) の相対的場所表現は、自由形態素であるのに対して、(b) の絶対的場所表現は、拘束形態素である。

- | | | |
|----------------------------------|---|---|
| (1) Yimas (Foley 1991: 106; 166) | (2) Tommo So (McPherson 2013: 230; 227) | (3) Sri Lanka Malay (Nordhoff 2009: 202; 340) |
| a. <i>ya-nan</i> <i>wampunan</i> | a. <i>tòndòó</i> <i>ònnùbaa</i> | a. <i>ruuma=pe</i> <i>dup pang</i> |
| tree-OBL in.front.of | water.jug behind | house=POSS front |
| ‘in front of the tree’ | ‘behind the water jug’ | ‘in front of the house’ |
| b. <i>ɲaŋk-pan</i> | b. <i>Àmèríkí=nɛ</i> | b. <i>nigiri</i> <i>pada=ka</i> |
| grass.PL-OBL | America=OBL | country PL=LOC |
| ‘in the grass’ | ‘in America’ | ‘in those countries’ |

最後に、これら2つの一般性から演繹的に考えることで導き出される、長い形式は自由形態素になりやすく、短い形式は拘束形態素になりやすいということが通言語的普遍性として確認されることを主張する。言語形式の長さや拘束性の相関関係については、Urban (2012) で既に示唆されているが、本研究は、これを具体的に実証することで理論的な貢献をもたらすものである。

参考文献

- Cinque, Guglielmo. 2010. Mapping Spatial PPs: An Introduction. In Guglielmo Cinque & Luigi Rizzi (eds.), *Mapping Spatial PPs: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 6*, 3–25. Oxford: Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780195393675.003.0001>.
- Foley, William A. 1991. *The Yimas Language of Papua New Guinea*. Stanford: Stanford University Press.
- Lehmann, Christian. 2015. *Thoughts on grammaticalization*. 3rd edn. Berlin: Language Science Press. <https://doi.org/10.17169/langsci.b88.99>.
- Levinson, Stephen C. & David P. Wilkins (eds.). 2006. *Grammars of Space: Explorations in Cognitive Diversity* (Language Culture and Cognition). Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511486753>.
- Mackenzie, J. Lachlan. 2013. Spatial adpositions between lexicon and grammar. In J. Lachlan Mackenzie & Hella Olbertz (eds.), *Casebook in Functional Discourse Grammar* (Studies in Language Companion Series), 67–94. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. <https://doi.org/10.1075/slcs.137.04mac>.
- McPherson, Laura. 2013. *A Grammar of Tommo So* (Mouton Grammar Library). Vol. 62. Berlin, Boston: Berlin: De Gruyter Mouton.
- Nordhoff, Sebastian. 2009. *A Grammar of Upcountry Sri Lanka Malay*. Utrecht: LOT PhD Thesis.
- Svenonius, Peter. 2006. The Emergence of Axial Parts. *Nordlyd* 33(1). 49–77. <https://doi.org/10.7557/12.85>.
- Svorou, Soteria. 1994. *The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins. <https://www.jbe-platform.com/content/books/9789027276575>.
- Urban, Matthias. 2012. *Analyzability and semantic associations in referring expressions: a study in comparative lexicology*. Leiden: Leiden University PhD Thesis. <https://hdl.handle.net/1887/19940>.



[17]

統語的複合動詞の分類再考：2種類か？3種類か？

山口 真史（関西外国語大学 masashiy@kansai.ac.jp）伊藤 克将（大阪公立大学 katsumasa.ito0716@gmail.com）

1. 分析対象と提案 統語的複合動詞に関して、①コントロール動詞 ((1a))、②上昇動詞 ((1b))、③コントロール動詞/上昇動詞の間で曖昧なもの ((1c))、の3種類があると先行研究では広く想定されている（柴谷 1978; 久野 1983; 影山 1993; Nishigauchi 1993; Koizumi 1995; Matsumoto 1996; Koizumi 1998; Yashima 2009; Kishimoto 2021 他）。

(1) a. 太郎は本を [読み-忘れ]た。 b. 太郎は本を [読み-出し]た。 c. 太郎は本を [読み-始め]た。
ただし、判断基準になるとされてきたテストの多様性も相まって、具体的にどういった動詞が①②③それぞれに分類されるかについては先行研究の間でも意見が一致していない。本研究では、これまで提案されてきたコントロール動詞と上昇動詞を区別する数多くのテストのうち、真に有効なものは無生物主語との共起可能性と受動化した際の真理条件の変化の有無のみであることを示し、③とされてきた曖昧な動詞はいずれも上昇動詞として分析されるべきであることを主張する。さらにコントロール動詞/上昇動詞それぞれの統語構造として (2) を提案する。コントロール動詞については第一動詞が vP として埋め込まれ第二動詞が主文の vP をなす一方、上昇動詞については第二動詞が機能範疇 $AspP_I$ あるいは機能範疇 $AspP_{II}$ (cf. Cinque 1999) のいずれかとして第一動詞と共に主文に位置付けられている。

(2) a. コントロール動詞: $[TP \text{ 太郎が } [vP \text{ } t [v_2 [VP_2 [vP_1 \text{ PRO } [VP_1 \text{ 本を } [V_1 \text{ 読み}] v_1] [V_2 \text{ 忘れ}] v_2]] [T \text{ た}]]]$
b. 上昇動詞: $[TP \text{ 太郎が } [AspP_I [vP \text{ } t [v [AspP_{II} [VP \text{ 本を 読み}] [Asp_{II} (\text{始め})] v]] [Asp_I (\text{始め})] [T \text{ た}]]]$

2. 先行研究とその問題点 (3) と (4) で示すように、コントロール動詞は無生物主語と共起不可でありまた受動化した際には真理条件が変わる一方、これらの特徴は上昇動詞には当てはまらない。以下(3)(4)(6)(7)において、(a)ではコントロール動詞、(b)では上昇動詞の例をあげる。

(3) a. * 雨が [降り-忘れ] た。 b. 雨が [降り-出し] た。
(4) a. 医者は太郎を診察し忘れた。
✗ 太郎は医者に診察され忘れた。
b. 医者は太郎を診察し出した。
⇒ 太郎は医者に診察され出した。

他に、コントロール動詞のみに当てはまる特徴として、i) 主語を含む熟語表現との共起が不可、ii) 目的語が第二動詞に対して狭いスコープを取ることができない、iii) 第二動詞が単独で他動詞として用いることができる、iv) 第一動詞を頻度や時間幅の副詞が修飾できない、v) 第一動詞を動作主指向副詞が修飾できない、vi) 長距離受動（第二動詞に受動形態素がつき第一動詞の被動作主が主格になる現象）を受け付ける、などが上記の先行研究で挙げられてきた。

しかし、i) についてはあくまで熟語表現の第二動詞との共起可能性に依存しており、たとえば (5) のように同じ第二動詞であっても熟語表現が変わると容認度も異なったものとなる。

(5) a. * 鳶が鷹を {産み-尽くし} た。 b. 血が {流れ-尽くし} て、戦争が終結した。

さらに本発表では ii) および iii) についてはあくまで第二動詞が対格を付与するかに依存しておりコントロール動詞/上昇動詞の区別のテストにはならないことを示す。iv) については実際にはコントロール動詞/上昇動詞いずれも第一動詞を頻度/時間幅の副詞は修飾できない。(6a) においては第二動詞を修飾する解釈（「2 時間忘れていた状態が続いた」）のみが可能であり、(6b) はそもそも容認できない。これは (2) の分析では、コントロール動詞に埋め込まれた vP が副詞の機能範疇を司る TP 領域を欠いていることと、上昇動詞には埋め込み構造が存在しないことから説明される。

(6) a. * 太郎は [2 時間 線を 引き]-忘れた。 b. * 太郎は [2 時間 戦を引き]-出した。

また、v) については実際にはコントロール動詞/上昇動詞いずれも第一動詞を動作主指向副詞が修飾できる。これは動作主指向副詞が VP 副詞である (cf. Ernst 2002) ことに起因する。

(7) a. [一生懸命 勉強し]-忘れたので、試験に落ちた。 b. 太郎は [一生懸命 勉強し]-出した。

唯一 vi) については、無生物主語との共起が可能で受動化した際にも真理条件が変わらない動詞である（つまり上昇動詞と思われる）「始める」などにも当てはまるコントロール動詞の特徴であるため、「始める」などはコントロール動詞/上昇動詞の間で曖昧であると先行研究（Kishimoto 2021 等）ではされてきた。しかし Cinque 1999 を基とした Ishizuka 2010 や Fukuda (2007, 2012) を採用し、受動形態素を司る機能範疇の上側にも下側にも $AspP$ が存在すると (2b) のように仮定することで、「始める」などについてはあくまで上昇動詞と考えることが可能となる。



参考文献

- Cinque, Guilelmo. 1999. *Adverbs and functional heads: a cross-linguistic perspective*. New York: Oxford University Press.
- Ernst, Thomas. 2002. *The syntax of adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fukuda, Shin. 2007. On the control/raising ambiguity with aspectual verbs: a structural account. In *Studies in Complement Control*, ed. Barbara Stiebels, ZAS Papers in Linguistics 47, 159–195. Berlin: ZAS.
- Fukuda, Shin. 2012. Aspectual verbs as functional heads: evidence from Japanese aspectual verbs. *Natural Language and Linguistic Theory* 30:965–1026.
- Ishizuka, Tomoko. 2010. *Toward a unified analysis of passives in Japanese: A cartographic minimalist approach*. Doctoral Dissertation, University of California, Los Angeles.
- 影山太郎. 1993. 文法と語形成. 東京: ひつじ書房.
- Kishimoto, Hideki. 2021. Syntactic verb-verb compounds in Japanese. In *Verb-verb complexes in Asian languages*, ed. Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi, 103–138. Oxford University Press.
- Koizumi, Masatoshi. 1995. *Phrase structure in minimalist syntax*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Koizumi, Masatoshi. 1998. Invisible Agr in Japanese. *The Linguistic Review* 15:1–40.
- 久野璋. 1983. 新日本語文法研究. 東京: 大修館.
- Matsumoto, Yo. 1996. *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion ‘word’*. Chicago: University of Chicago Press.
- Nishigauchi, Taisuke. 1993. Long distance passive. In *Japanese syntax in comparative grammar*, ed. Nobuko Hasegawa, 79–114. Tokyo: Kurosio Publisher.
- 柴谷方良. 1978. 日本語の分析. 東京: 大修館.
- Yashima, Jun. 2009. Clausal architecture and complex predicate formation: A case study of Japanese syntactic V-V compounds. ms. University of Tokyo.



[19]

ジョンはいかにして存在しないものを購入するか: ロシア語の人称代名詞の不定解釈について

森一 (東京大学、 morihajime@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)、木下蒼一郎 (慶應義塾大学、 soichiro kinoshita@keio.jp)

[ロシア語と英語の代名詞の比較] 本発表では、ロシア語における代名詞照応が、従来の形式意味論における照応の理論からは予測されない振る舞いをするを指摘すると共に、その振る舞いを説明する新たな分析を提案する。まず、ロシア語の三人称代名詞は、不定の対象を表示するものとして解釈することができる (なお、以下すべての例文の適格性の判断にはフルマノワ・ポリナ氏 (東京大学大学院) とそのご友人たちに多大なるご協力を賜った)。

(1) ?? Three wizards_i came to visit John. They_j came to visit me, too. (Roberts, 2021)

(2) Tri volšebnik-a_i priš-l-o k Džon-u. Oni_j priš-l-i ko mne tože.
three.NOM wizard-M.SG.GEN come-PST-N for John-DAT they.NOM come-PST-PL for me.DAT too
‘3人の魔法使いがジョンのところに来た。彼らは私のところにも来た。’

(1) の文には、*three wizards* と *they* が異なる不定の魔法使いを指示する読みは存在しない。それに対して、(2) では、代名詞 *oni* が指示する魔法使いがジョンを訪ねた魔法使いとは別の魔法使いであるという解釈が可能である。

加えて、ロシア語の代名詞は否定のスコープの中にある不定名詞をそのスコープの外部から参照することができる。

(3) ?? Alice doesn't have an iPad, but Bill bought it yesterday.

(4) U Alis-y net ajpad-a, a Bill kupi-l ego včera.
by Alce-GEN not.be iPad-M.SG.GEN but Bill.NOM buy.PFT-M.PST him.ACC yesterday
‘アリスは iPad を持っていないが、ビルはそれを昨日買った。’

英語では *it* が否定のスコープの中にある *an iPad* を参照することができず (3) の容認度が低くなるのに対し、ロシア語では *ego* が不定の iPad を表示しうするため、(4) の第2連言肢は $\exists x(\text{iPad}(x) \wedge \text{bought}(\text{bill}, x))$ を意味する文として解釈可能である。

[動的意味論とロシア語の代名詞] 現代の形式意味論において、代名詞による照応に関する理論には動的意味論と E-type 分析の二つがある。動的意味論において、不定名詞の存在量化のスコープは (連言と違い) 否定節の外に及ばない = 「外的に静的 (externally static)」であるとされており、(3) における照応の難しさはその顕れとして説明される (Groenendijk & Stokhof, 1991)。ところが (4) では、代名詞 *ego* が否定のスコープの外部からその内部の不定名詞を平気で参照するため、理論の予測に反している。このことは、ロシア語の代名詞の動的意味論による分析が難しいことを示唆する。

[E-type 分析とロシア語の代名詞] E-type 分析 (Evans, 1977) では、照応における代名詞を定名詞の省略として分析する。このことは、代名詞の指示対象の唯一性 (uniqueness) を予測する (Heim, 1982)。これを踏まえると、代名詞の不定解釈が可能 (2) は、ロシア語の代名詞が E-type 的でないことを示唆するかに見える。しかし本発表は、Elbourne (2001, 2002) による形式化を用いてロシア語の代名詞を E-type 的に分析しようと主張する。Elbourne の説では、例えば (1) の *they* を $[_{DP}the[_{NP}three\ wizards]]$ から NP 除去をした結果残った限定詞として分析する。いま、ロシア語が発音のない限定詞を持つとする Chierchia (1998) に倣いつつ、上の分析を (2) に適用すると、この文は LF において (5) のような構造をもつと分析される。

(5) $[_{DP} \emptyset [_{NP} wizards]] \text{ come-PST-PL for me.DAT too.}$

これはすなわち、(5) における「魔法使い」を指す *oni* は端的に複数形名詞 $\emptyset \text{ volšebnik-i}$ に等しいということにはならない。ロシア語の代名詞が定的でも不定的でもありうるのはこのためである。

本提案は英露の iPad 文 (3) (4) に見られる容認度の差異をも整合的に捉える。E-type 分析において、(3) の容認度の低さは、存在しない iPad を *it* (= 文脈上ただ一つ存在する iPad) で指すことによる論理的矛盾に由来する。ロシア語の代名詞が発音されない限定詞を主要部とする DP の省略形なのだとすれば (4) の二文目は一文目と矛盾せず、容認度が低くなることはない。

またこの分析は、日本語のゼロ代名詞が E-type 的であるという Kurafuji (1998) による分析とも一致する。実際、(6-7) に示されている通り、日本語のゼロ代名詞は (2) と (4) と同様の振る舞いをする。

(6) 3人の魔法使い_iが太郎を訪ねてきた。[??彼ら_jは/ø_j]僕にも訪ねてきた。

(7) 太郎は iPad_iを持っていないが、花子は[?それ_jを/ø_j]昨日買った。

これらの現象は、Kurafuji (1998) によるゼロ代名詞の E-type 分析と、日本語にも冠詞が無いという事実を踏まえつつ、本発表の分析を日本語にそのまま適用することで説明することができる。

[不定代名詞とロシア語の代名詞] ここまでに見てきたロシア語の代名詞の特異な振る舞いは、英語の不定代名詞 *one* の振る舞いと類似している。しかし、英語の不定代名詞で可能な (8) の構造が、ロシア語の代名詞では不可能である。したがって、ロシア語の代名詞は英語の不定代名詞とも異なると言える。

(8) John has some coins. I have one.

(9) U Džon-a est' monet-y. U menja est' tol'ko [??ona/ odn-a (moneta)]
by John.GEN be coin.PL.NOM by me.GEN be only [??she.NOM/ one-F.NOM (coin)]
‘ジョンはコインをいくつか持っている。私はひとつしか持っていない。’



参考文献

- Chierchia, G. (1998). Reference to kinds across language. *Natural language semantics*, 6(4), 339–405.
- Elbourne, P. (2001). E-type anaphora as np-deletion. *Natural Language Semantics*, 9(3), 241–288.
- Elbourne, P. (2002). *Situations and individuals*. PhD thesis, Massachusetts Institute of Technology.
- Evans, G. (1977). Pronouns, quantifiers, and relative clauses (I). *Canadian journal of philosophy*, 7(3), 467–536.
- Groenendijk, J. & Stokhof, M. (1991). Dynamic predicate logic. *Linguistics and philosophy*, 39–100.
- Heim, I. R. (1982). *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. University of Massachusetts Amherst.
- Kurafuji, T. (1998). Dynamic binding and the e-type strategy: Evidence from Japanese. *Semantics and Linguistic Theory*, 129–144.
- Roberts, I. (2021). *Diachronic Syntax*. Oxford University Press.



本発表は宮崎県椎葉村尾前方言（以下、尾前方言）には以下のような文の節の数を議論する。

(1) ioba jaate mita. 「魚を焼いてみた。」 (2) ioba jaate kuta. 「魚を焼いて食べた。」

これらは日本語標準語の「魚を焼いた。」と同じように単節の構造体だろうか。それとも、「魚を焼いて、怒られた。」と同じように二節が連置されているのだろうか。

同様の問題は標準語研究でも議論されてきた。標準語では(1)のような補助動詞構文は単節と見る立場が主流で（日本語記述文法研究会編 2008: 279）、動詞連続構文の一種と分析されることもある

（Shibatani 2009）。(2)のように V_1 が V_2 を副詞的に修飾している構造体は一般に二節とされるが（日本語記述文法研究会編 2008: 279）、 V_1 と V_2 はまとめて1つの事象を表していることが V_2 否定辞のスコープテスト（ V_2 に付与した否定辞が「[魚を焼いて食べ]なかった」のように V_1 も含めて否定する）

（三原 2015: 90, Matsumoto 2021）等で知られており、Shimoji (2021) のように(1)も(2)も単節として扱う論者もいる。一方で Kageyama (2021) は(1) (2)とも二節と分析しており、これらの構造体が単節か二節の連置かは議論が分かれる。本研究は(1)や(2)を、単節の極にある複合述語（「魚を焼き始めた」）と、二節連置の極にある節連鎖（「魚を焼いて、怒られた」）と比較検討し精緻に位置付ける。

まず、標準語研究でしばしば単節性の根拠として持ち出される（Matsumoto 2021, Shimoji 2021）、韻律的な一体性（ V_1 と V_2 がまとめて1つの韻律句として実現）を検証した。尾前方言では複合語では韻律句が1つ、節連鎖では2つになるのに対し、(1)や(2)では安定せず、1~2つで実現した。次いで Lovestrand (2021) の節性に関する4つの通言語的観点を検討した。これらは、 V_1 と V_2 が単節に属するとき① V_1 と V_2 を個別に否定できない、② V_1 と V_2 が必ず同じ TAM を共有する、③ V_1 と V_2 が少なくとも1つの項を共有する、④ V_1 と V_2 が合わせて1つの事象を表す、の4つである。尾前方言では(1)は①~④を満たし、(2)は①を満たさない（jakande kuta 「焼かずに食べた」という V_1 だけ否定する構造が可能）。これら5つの観点を以下の表に整理した（例文は標準語で示した）。単節と二節連置は対極にあり、(1)や(2)はそのいずれかの極に近い、というように段階的に位置付けられる。

	複合述語（単節） 「焼き始める」	補助動詞構文 (1) 焼いてみた	V_1 が V_2 を修飾 (2) 焼いて食べた	節連鎖（二節） 「焼いて、怒られた」
韻律句の数	1つ	1~2つ	1~2つ	2つ
①（ V_1 否定不可）	✓	✓	*	*
②（TAM 共有）	✓	✓	✓	*
③（項共有）	✓	✓	✓	*
④（事象の一体性）	✓	✓	✓	*

単節構造と二節構造はカテゴリーカルな区別であるため、ある構造がいずれかに峻別されるという前提が先行研究にはあった。しかし、(1)のような補助動詞構文が文法化によって生じることはよく知られており、その過程では二節連置から単節への段階的な移行があったはずである。(1)や(2)の構造体は単節・二節の違いを連続的に捉えることで初めて適切に位置付けることができる。本発表では、尾前方言を例にこのことを示したが、このような捉え方は標準語など、他の言語体系でも有効であろう。

- Kageyama Taro (2021) Between lexical verbs and auxiliaries: The architecture of Japanese verb-verb complexes. In: Taro, Kageyama, Peter E Hook and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. 15-43.
- Lovestrland Joseph (2021) Serial Verb Constructions. *Annual Review of Linguistics* 7: 109-130.
- Matsumoto Yo (2021) The semantic differentiation of verb-te verb complexes and verb-verb compounds in Japanese. In: Kageyama, Hook and Pardeshi (eds.) 139-164.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』 東京：ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6』 東京：くろしお出版.
- Shibatani Masayoshi (2009) On the form of complex predicates: toward demystifying serial verbs. In Johannes Helmbrecht, Yoko Nishina, Yong-Min Shin, Stavros Skopeteas, and Elisabeth Verhoeven (eds.) *Form and Function in Language Research: Papers in Honour of Christian Lehmann*, 255–283. Berlin, New York: De Gruyter Mouton.
- Shimoji Michinori (2021) Verb-verb complexes in Irabu Ryukyuan. In: Kageyama, Hook and Pardeshi (eds.) 165-192.



This study investigates the adaptation of Japanese pitch accent in Budai Rukai, an Austronesian language spoken in Taiwan, which was under Japanese rule from 1895 to 1945. While prior research (Zeitoun 2000, Liu 2011, Palemeq 2014) has documented Japanese loanwords in Budai Rukai, existing records rely on orthographic transcriptions and lack stress-related information. This study addresses that gap through first-hand data collected from 2023 to 2024, comprising 197 loanwords. Japanese is a pitch-accent language where lexical prominence is assigned at the word level (e.g., *hána* ‘Hana, a girl’s name’ vs. *haná* ‘flower’ vs. *hana* ‘nose’). In contrast, Budai Rukai is a stress language with a final trochee, generally placing stress on the penultimate syllable (e.g., [d̪a.d̪á.va] ‘Wait!’). However, stress shifts to the ultimate syllable when the final syllable is heavy (i.e., containing a vowel-glide (VG) sequence derived from a vowel cluster; e.g., /kikai/ > [ki.káj] ‘this’) and to the pre-penultimate syllable when the word ends in an epenthetic vowel inserted to prevent coda consonants (e.g., /uŋul/ > [ú.ŋu.lu] ‘drink’). Notice that in Budai Rukai phonemic glides do not attract stress (e.g., /pagaj/ > [pá.ga.j] ‘rice’) and inserted vowels, known as *echo vowels*, mirror the preceding vowel in quality (e.g., /vaŋig/ > [vá.i.gi] ‘wind’, /uŋul/ > [ú.ŋu.lu] ‘drink’, and /b̥ətsəŋ/ > [b̥ə.tsə.ŋə] ‘millet’). However, when the preceding vowel is /a/, the echo vowel surfaces as [ə] (e.g., /udal/ > [ú.da.lə] ‘rain’).

The data collected in this study reveal a systematic pattern in the adaptation of Japanese pitch accent in Budai Rukai. Notably, Japanese pitch accent is completely disregarded during the adaptation process. When the loanword ends in a light, non-epenthetic syllable, stress falls on the penultimate syllable, regardless of the Japanese source word’s pitch accent (cf. 1). And if the final syllable contains an epenthetic vowel, stress shifts to the pre-penultimate position, again independent of the Japanese pitch accent (cf. 2). Interestingly, loanwords with final VG sequences corresponding to Japanese vowel clusters (VV) exhibit penultimate stress rather than ultimate stress (cf. 3), suggesting that surface glides in these sequences are considered phonemic and that the syllable role of the vowels in VV cluster in the source word is not faithfully preserved. Additionally, some loanwords that do not end in epenthetic vowels also unexpectedly exhibit pre-penultimate stress, as shown in (4). These words end in /i, u, ə/ vowels, corresponding to /i, o, u/ in the Japanese source word. I argue that the final vowels, though not epenthetic, function as echo vowels because they occur in an environment where such vowels are expected in native Budai Rukai phonology. Specifically, a word-final /i/ or /u/ in such loanwords always follows an identical vowel in the preceding syllable, while a word-final /ə/ is consistently preceded by another /ə/ or a /a/ vowel. As a result, these vowels are ignored in stress assignment, following native phonological rules. If echo vowels are placeless and share place features with the preceding vowel (Kawahara 2005, Liu 2011, Lin 2014, among others), then the adaptation of full vowels from Japanese as placeless echo vowels suggests that the place features of word-final vowels in the source words are also not faithfully preserved in the process of loanword adaptation.

Suprasegmental features in loanword adaptation have received relatively less attention compared to segmental and phonotactic adaptation. The findings in this paper provide new insights into the phonological adaptation of loanwords, demonstrating how Budai Rukai systematically integrates Japanese lexical items while maintaining its own stress system.

	Japanese		Budai Rukai	Glossary
(1)	a. <i>enpitsu</i> [emp̚itsu]	>	<i>inpice</i> [in.pí.tsi]	‘pencil’
	b. <i>hakase</i> [há.kase]	>	<i>hakasi</i> [ha.ká.ɕi]	‘doctor’
	c. <i>obā</i> [ó.ba:]	>	<i>uba</i> [ú.ba]	‘coat’
	d. <i>geta</i> [getá]	>	<i>gita</i> [gí.ta] ~ [gé.ta]	‘clogs’
(2)	a. <i>zaisan</i> [dza.isan]	>	<i>zaysange</i> [dzáj.sa.ŋə]	‘property’
	b. <i>kouisin</i> [kó:is̩n]	>	<i>kuisange</i> [kúj.sa.ŋə]	‘school doctor’
	c. <i>enjin</i> [éndziŋ]	>	<i>inzingi</i> [in.dzi.ŋi]	‘engine’
	d. <i>nippon</i> [nippón]	>	<i>dripungu</i> [d̪í.pu.ŋu] ~ [d̪í.po.ŋu]	‘Japan’
(3)	a. <i>tsukue</i> [tsu̚kúe]	>	<i>cukui</i> [tsú.ku̠]	‘table’
	b. <i>kikai</i> [k̪íkai]	>	<i>kikay</i> [k̪í.kaj]	‘machine’
	c. <i>rajio</i> [rádzio]	>	<i>raziw</i> [z̪á.dziw]	‘radio’
(4)	a. <i>batterī</i> [bátteri:]	>	<i>badilri</i> [bá.di.l̪i]	‘battery’
	b. <i>tokeisō</i> [toké:so:]	>	<i>tukisi</i> [tú.ki.ɕi]	‘passion fruit’
	c. <i>risoku</i> [risók̪u]	>	<i>lrisuku</i> [l̪i.su.ku]	‘interest’
	d. <i>daigaku</i> [daigák̪u]	>	<i>taigake</i> [táj.ga.kə]	‘university’
	e. <i>miruku</i> [m̪iruku]	>	<i>mireke</i> [m̪í.zə.kə]	‘milk’



- KAWAHARA, SHIGETO. 2005. "Copying and Spreading in Phonological Theory: Evidence from Echo Epenthesis." In *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics: Papers in Optimality Theory III*, edited by Leah Bateman and Adam Werle, 111–144. Amherst, MA: GLSA Publications.
- LIN, KUO-CHIAO. 2014. "Gradual Epenthesis: Echo Vowels in Austronesian Languages." *Oceanic Linguistics* 53 (2): 443–466.
- LIU, CHONG-YU. 2011. "Echo Vowels in Budai Rukai." Master's thesis, Graduate Institute of Linguistics, National Tsing Hua University.
- PALEMEQ, YEDDA. 2014. *A Glossary of Loanwords in Truku*. Indigenous Languages Research and Language Center.
- ZEITOUN, ELIZABETH. 2000. *A Reference Grammar of Rukai*. Taipei: Yuanliou Publishing Co.



[22]

重子音の頻度が音象徴的效果に与える影響：「かわいい」効果の減退

熊谷学而（関西大学）

背景と目的：音象徴とは、音と意味やイメージが結びつくという現象を指す。これまでの研究の多くは、単独の子音や母音を研究対象としてきた。しかし、重子音が、単子音と同様の音象徴的效果を持つかどうかを検証した研究はほとんどなかった。ある単子音が特定の意味と結びついていると仮定したとき、重子音の音象徴的效果については、次の3つが考えられる。

仮説(1) 重子音は、単子音よりも、その意味の程度を増大させる。

仮説(2) 重子音は、単子音と同程度に、その意味を伝える。

仮説(3) 重子音は、単子音と比べて、その意味の程度を十分に伝えることができない。

本研究では、どの仮説があり得るか検証するために、「かわいい」イメージを持つと考えられる/p/と/r/（Kumagai 2019, 2022）を取り上げた。日本語において、重子音/pp/は語種に限らず現れるが、重子音/rr/はイタリア語やアラビア語などの外来語にのみ許容される（Kawahara & Kumagai 2024）。つまり、/pp/は高頻度であるが、/rr/は低頻度である。その言語に存在しない音韻構造は、期待される音象徴的效果が現れない（Styles & Gawne 2017）という研究結果を踏まえると、低頻度の重子音/rr/（つまり、日本語ではほぼ許されない音韻構造）は、単子音/r/と比べて「かわいい」イメージを十分に伝えることができないと予測した。この問いを検証するため、無意味語を用いた実験的検証を行った。

実験の問い：本実験は、下記の問いを検証した（「かわいい」効果とは、与えられた名前が「かわいい」と感じる効果という意味である）。

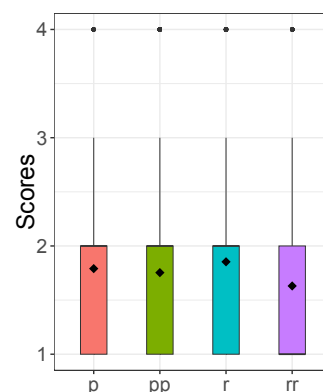
問い：/r/は、それが重子音/rr/になると「かわいい」効果を減退させるか。

実験では、ターゲットである単子音、または重子音を含む無意味語を提示し、どの程度かわいいか4段階で判断してもらった（4:とてもかわいい ~ 1:かわいくない）。条件は4つであった：/p/, /pp/, /r/, /rr/。各条件において、無意味語を10個ずつ用意した（例えば、条件/r/では「カーリン」条件/rr/では「カッリン」）。高頻度である/pp/を条件に含めた理由は、低頻度/rr/による音象徴的效果の減退を確認するためであった。実験では、計40個の無意味語を参加者ごとにランダムに提示し、回答してもらった。参加者は日本語母語話者151名であった。

結果：右図は、結果の箱ひげ図である（縦軸はスコア、ダイヤモンドは平均スコア）。下記は、各条件の平均スコアである。

/p/ = 1.79 /pp/ = 1.75 /r/ = 1.85 /rr/ = 1.63

実験の結果を、ベイズ線形モデルに当てはめた（目的変数はスコア、説明変数は各条件、ベースラインは/rr/）。重子音/rr/のスコア（1.63）は、重子音/pp/や単子音/p/, /r/と比べて、統計的に低かった。



考察：高頻度である/pp/は、単子音/p/と同程度の「かわいい」効果を発揮する一方で、低頻度である/rr/では単子音/r/と比べてその効果が減退した。これは、低頻度の重子音は有標性が高いため、*rrのような音素配列に関する制約が働き、「かわいい」という音象徴的效果を減退させたと言える。つまり、音象徴的效果が音韻制約によって影響を受けたことを示唆している。

全体の考察：以上の結果を踏まえて、重子音の音象徴的效果に関する仮説として、仮説(3)があり得るという結論を得た。これは、重子音の頻度が音象徴的效果を減退させたことが原因と考えられる。重子音に関する音象徴の研究事例は乏しいため、今後、仮説(1)~(3)は、他の種類の重子音や他の音象徴的つながりにも当てはまるか、検証することが期待される。



参考文献

- Kawahara, Shigeto and Gakuji Kumagai (2024) Japanese speakers can infer specific sublexicons using phonotactic cues. *Linguistics Vanguard* 10(1). DOI: 10.1515/lingvan-2024-0097
- Kumagai, Gakuji (2019) A sound-symbolic alternation to express cuteness and the orthographic Lyman's Law in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 35. pp.39–74.
- Kumagai, Gakuji (2022) What's in a Japanese *kawaii* 'cute' name? A linguistic perspective. *Frontiers in Psychology* 13. 1040415.
- Styles, Suzy J. and Lauren Gawne (2017) When does maluma/takete fail? Two key failures and a meta-analysis suggest that phonology and phonotactics matter. *i-Perception* 8. pp.1–17.



[23]

インドネシア語における随意的な適用態接尾辞-kan

佐近優太 (神田外語大学)

インドネシア語の接尾辞-kan は適用態(applicative)標示とされ、受益者・道具などの項の増加を行う機能を持つ(Sneddon et al. 2010: 73-88)。しかし統語的・意味的に影響を及ぼさない随意的な場合がある。

- (1) *Utomo mengantar(-kan) ibu=nya ke pasar*
 Utomo guide(-KAN) mother=3 to market
 「Utomo は母を市場へ案内した」

(Sneddon et al. 2010: 88)

随意的な接尾辞-kan の説明にあたり、語彙意味論の立場では接尾辞-kan の統一的機能を「結果状態項の導入」としている。Kroeger (2007: 248)は授与動詞など語基が語彙概念構造の中にすでに結果状態を持つ場合、接尾辞-kan の付与で構造が変わらないため随意的になると分析する。同様に Son & Cole (2008: 154)は述語分解の観点から、特に前置詞句で結果状態項がすでに統語的に表れている場合に接尾辞-kan が随意的になると主張している。しかし接尾辞の有無による意味的な差異は明らかになっていない (Truong & McDonnell 2022: 427)。Musgrave, Arka & Rajeg (2024: 299–300)は西インドネシアの諸言語で確認されるような適用態接辞の「被影響の強調」(Truong & McDonnell 2022: 426)の機能を接尾辞-kan に当てはめているが、定義が不明瞭かつ演繹的な分析のみに留まるため、実証的に検証する必要がある。

そこで本発表はコーパスを基に客観的に判別できるタグ情報を用いて定量的調査を行うことで、接尾辞-kan の有無による意味の差異を明確化し、随意的な接尾辞-kan の具体的機能を説明することを目的とする。特に以下の2点を主張する。

- ・[主張 1] 随意的な接尾辞-kan は既知性の高い被動作主項を導く形式である
- ・[主張 2] 接尾辞-kan の随意性は確率で捉えるべきである

調査方法は次の通りである。インドネシアの新聞 Kompas (2004 年)の記事コーパスから Kroeger (2007: 243)において接尾辞-kan が随意的とされる頻度の高い4つの語基(kirim「送る」、tanam「植える」、antar「案内する」、lempar「投げる」)を検索し、前述の結果状態項の有無に加え、態と被動作主の既知性・有生性(cf. Sneddon et al. 2010: 261; Peterson 2006: 89; Vander Klok & Evans 2022: 468)をタグ付けし、ベイズモデルによるロジスティック回帰分析を行った。主張の根拠となる主要な結果は以下の様にまとめられる。

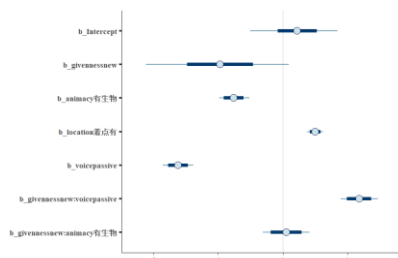


図 1

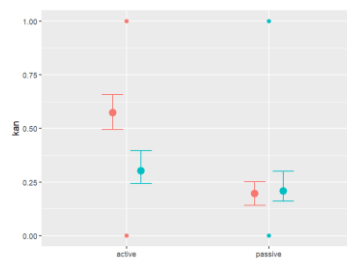


図 2

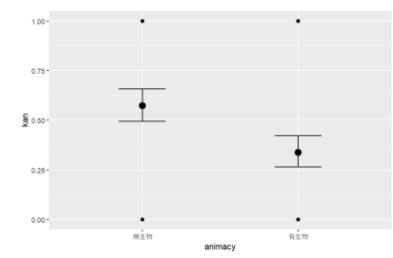


図 3

- 能動文では既知の被動作主の場合に接尾辞-kan の確率が上がる。これが[主張 1]の根拠となる。受身文では既知性にかかわらず接尾辞-kan の使用率が低い。これは受身文の場合はすでに被動作主の既知性が高く、既知性が高い項を導入する標示を改めて行うことが求められないためである(図 2)。
- 被動作主が有生物の場合に接尾辞-kan の確率が下がる。これは受益者項の導入との混同を避けるためであり、接尾辞-kan 自体の機能ではないと考える(図 3)。
- 信用区間が大きく偏ることはなく、当該の接尾辞-kan は随意的と言える(図 2, 3)。上記の要素は[主張 2]のように標示のされやすさ、つまり随意性の程度・確率を変動させる要因である(図 1)。

今回の結果は意味的には例外とされてきた機能が、典型的な接尾辞-kan の機能と連続性を持つことを示唆し(cf. Peterson 2006)、接尾辞-kan の機能の統一的分析に貢献する。加えてベイズモデルにより随意性の程度を確率として扱ったことは類型論的な随意的表現の記述に対する手法的貢献となる。

参考文献

- Kroeger, Paul. (2007). Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian *-kan*. In Annie Zaenen, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, and Chris Manning, (eds). *Architectures, Rules, and Preferences: Variations on Themes of Joan Bresnan*. Stanford/CA: CSLI Publications. 229–251.
- Musgrave, S., Arka, I. W. and Wijaya Rajeg, G. P. (2024). 10 Applicative constructions in Standard Indonesian (Bahasa Indonesia). In Fernando Zuniga and Denis Creissels. (eds.). *Applicative Constructions in the World's Languages*. Berlin: De Gruyter. 279–304.
- Peterson, David A. (2006). *Applicative Construction*. Oxford: Oxford University Press.
- Sneddon, James Neil, K Alexander Adelaar, Dwi Djenar and Michael Ewing. (2010). *Indonesian: A comprehensive grammar 2nd edition*. London. Routledge.
- Son, Min-Jeong. and Peter Cole, (2008). An Event-Based Account of *-kan* Constructions in Standard Indonesian. *Language* 84(1). 120–160.
- Truong, Christina L. & Bradley McDonnell. (2022). 14 Neglected functions of western Indonesian applicatives. In S. Pacchiarotti & F. Zúñiga. (eds.), *Applicative Morphology: Neglected Syntactic and Non-syntactic Functions*. Berlin, Boston: De Gruyter. 405–436
- Vander Klok, Jozina & Bethwyn Evans. (2022). 15 The evolution of non-syntactic functions of applicatives: *-i* suffixation in Javanese and neighboring languages. In S. Pacchiarotti & F. Zúñiga. (eds.), *Applicative Morphology: Neglected Syntactic and Non-syntactic Functions*. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. 437–474



[24]

古ジャワ語の有標 S-V 語順における対比的主題提示

竹内晶 (東京大学人文社会系研究科言語学研究室 shotakeuchiattuat@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

古ジャワ語 (Old Javanese、あるいは Kawi; ISO 639-3: kaw) は比較的語順が自由だが、Zoetmulder (1950) などによると V-S 語順が最も無標な語順とされ、S-V 語順は主に「主語の強調」のために用いられるとされる。

Zoetmulder (1950) は S-V 語順を大きく分けて 4 つのパターンに分類している。その内の 3 パターン、すなわち (1) 代名詞により表される主語が述語の前に置かれる場合、(2) *kunañ* (原義「しかし」) や *yapwan* (原義「もし」) のような接続詞が主語の前に置かれる場合、(3) 主語の後にそれを指示する代名詞が置かれる場合 (例: 「偉大なる聖仙たち、彼らは...」)、また上記 3 パターンの組み合わせが、「主語の強調」のためとしている。残る 1 つの S-V 語順のパターンは (4) 主語にも述語にも特段の「強調」がない列挙の場合であると説明している。しかし、これら S-V 語順の示す「主語の強調」が具体的にどのような機能を持つのか、情報構造の観点から詳細に論じた研究は少ない。Uhlenbeck (1987) はパターン (1) の中でも特に *communicative salience* を示す小辞 *ta* が用いられる文について、代名詞による主語が焦点となる「S (こそ) が V する」の文だとしているが、それ以外には触れていない。本発表においてはパターン (2) に注目し、このパターン (2) がどのような語用論的機能を有するのか、また他のパターンとどのような関係を持つのかについて分析を提示する。

分析においては、古ジャワ語に翻案されたサンスクリット叙事詩 *Mahābhārata* から Gonda (1936) による *Bhīṣmaparwa* の校訂版を主なコーパスとして用い、また副次的なデータとして Phalgunadi (1995) による古ジャワ語-英語対訳も用いた。まず、OCR によってデジタルデータ化された Gonda (1936) のテキストを Python プログラムにより文ごとに分割し、得られた約 3300 文から *kunañ* と *yapwan* が含まれた各 172 文、37 文を前後の 10 文とともに抽出し、さらに目視で文型を確認した。また、パターン (2) 以外とも比較するため、代名詞の代表として三人称代名詞 *sira* 「彼(ら)/彼女(ら)」を含む文を抽出し、目視により文型を確認した。

結果として、パターン (2) はパターン (4) と類似してはいるが、より対比的な主題提示機能を有すると主張する。以下の例文は、地理を説明する文脈において連続する 2 文である (和訳は発表者による。原文の構造を損なわないよう、内容と句読点との位置関係は訳に反映されている): *kunañ ikañ Bhāratawarsa*, *kidulniñ wukir Himawān parahnika*. 「Bhāratawarsa については、Himawān 山の南に位置する」 *yapwan ikañ warsa kalor sakeñ Himawān*, *kidulniñ Hemakūṭa, i Kimpuruṣa naranya*. 「Himawān 山の北の地域については、Hemakūṭa の南は、Kimpuruṣa という名前である」。これらのいずれにおいても、文頭の *kunañ* と *yapwan* は接続詞としての原義を保持しておらず、むしろ読点までで説明対象の地域を対比的な主題として標示するために機能し、読点の後に解説が加えられている。また、この用法において *yapwan* はほぼ常に *kunañ* と交互に現れ、*kunañ* を用いた文の後の文において用いられるが、*kunañ* は単体でも機能し、先行研究では焦点を示すとされる小辞 *ta* とパターン (1) において共起する。以上の事実と、本来の接続詞としての機能の差から考察し、厳密にはパターン (2) の用法において *kunañ* が *yapwan* よりも高い対比性を示す機能を有することも主張する。

本発表の特色は、デジタルコーパスとしては未整備の古典語テキストデータに人文情報学の知見を応用し、先行研究において重点的に扱われていなかったデータを加え、十分に扱われていなかった語順の機能を情報構造の観点から改めて分析した点にある。



参照文献

- Erawati, N.K.R. (2017) The Relativity Strategy of Old Javanese. In: *Journal of Language Teaching and Research*, Vol. 8, No. 6, pp. 1100-1108.
- Gonda, J. (1936) *Het Oudjavaansche Bhīṣmaparwa*. Bandoeng : A.C. Nix.
- Givón, T. (1983) *Topic Continuity in Discourse : a Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam/Philadelphia: J. Benjamins Pub. Co.
- Hoff, B.J. (1998) Communicative salience in Old Javanese. In: *Productivity and Creativity; Studies in General and Descriptive Linguistics in Honor of E.M. Uhlenbeck*, pp. 337–347, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Hunter, T.M. (2009). Some Problems in the Study of Old Javanese as a Linguistic System. In: *The Second International Symposium On The Languages Of Java*, Lombok, Indonesia.
- Hunter, T.M. (2018) Irrealis, aspect, and complementation in Old Javanese. In: *Wacana, Journal of the Humanities of Indonesia*, Vol. 19, No. 1, Article 1.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form : Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Li, C.N. (1976) *Subject and Topic*. New York: Academic Press.
- Molen, W. (2015) *An Introduction to Old Javanese*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Müller-Gotama, F. (1996) Topic and focus in Sundanese. In: *Anthropological Linguistics*, vol. 38, pp. 117-132, Bloomington: the Department of Anthropology and the American Indian Studies Research Institute.
- Ogloblin, A.K. 2005. Notes on Old Javanese and structural changes in the history of Old Javanese. In: *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, pp. 615-621, London and New York: Routledge.
- Phalgunadi, I.G.P. (1990) *The Indonesian Mahābhārata Ādiparva*. New Delhi : International Academy of Indian Culture : Aditya Prakashan.
- Phalgunadi, I. G. P. (1995) *The Indonesian Mahābhārata Bhīṣmaparva*. New Delhi : International Academy of Indian Culture : Aditya Prakashan.
- Puspitorini, D. (2018) Particles pwa and ta in the Old Javanese language. In: *Cultural Dynamics in a Globalized World*, London and New York: Routledge.
- Puspitorini, D. and Griffiths, A. (2024) *Pengantar Bahasa Jawa Kuno oleh Willem van der Molen, Diterjemahkan dari Bahasa Inggris oleh Yosephin Apriastuti Rahayu (2019)*. DIY: Kursus Intensif Bahasa Jawa Kuno Cangkringan, Kaliurang DIY.
- 上村勝彦 (2002) 『原典訳マハーバーラタ6』 東京: 筑摩書房.
- Uhlenbeck, E.M. (1987) Sentence patterns in the Old Javanese of the parwa literature. In: *A World of Language: Papers Presented to Professor S.A. Wurm on His 65th Birthday (=Pacific Linguistics C-100)*, pp. 695-708, Canberra: The Australian National University.
- Zoetmulder, P.J. (1950) *De Taal van Het Adiparwa*. Bandung : A.C. Nix.
- Zoetmulder, P.J. (1982) *Old Javanese-English Dictionary*. Leiden: KITLV Press.



[25]

日本手話における引用 RS の構造領域: 文末指さしに注目して

内堀 朝子 (東京大学), 上田 由紀子 (山口大学), 原 大介 (豊田工業大学)

uchibori@cce.t.u-tokyo.ac.jp ykueda@yamaguchi-u.ac.jp daisuke@toyota-ti.ac.jp

本研究では、日本手話(以後、JSL)における文末指さしと、ロールシフト／リファレンシャルシフト(以後、RS)の一種である引用 RS という2つの現象が一文に見られる例に注目して、引用 RS が CP を成していることを論じる。RS とは「サイナーが、他者の発言や考え、視点などを表わす」(Sandler and Lillo-Martin 2006: 379 (私訳)) 表現であり、JSL の RS は、通常は対話の相手に向ける頭の位置・目の開き・目線の方角などの非手指表現(以後、NM)を変化させることで標示される(市田 2005, 他)。JSL の RS には引用型と行動型の二つがあり(小藺江ら 2000, 他)、引用 RS は節レベル、行動 RS は動詞レベルの現象とされる(市田 2005: 96)。内堀・上田(2023)は、行動 RS と引用 RS では、RS の標示範囲内 NM 副詞の波及に対し、線状的隣接性条件が適用されるかどうかに関連して RS の標示範囲が異なるため、二つは区別する必要があると報告した(異なる観察に基づく RS を区別しない分析については、Kawasaki 2024 参照)。

(1)	RS が NM 標示される要素			VP 様態副詞 NM 形態素の動詞への波及に対する線状的隣接性条件
	目的語	動詞	Asp, Neg, Mod 主要部	
行動 RS	不可	義務	任意	適用
引用 RS	義務	義務	義務	非適用

(内堀・上田 2023(45))

また、JSL では代名詞としての指さし(米川 1984)以外に、文末に指さし(市田 1991, 鳥越 1991) (以後、文末指さし)が現れる。文末指さしは主語または話題要素を示し、それらの人称素性(および任意で数素性)を示す形態となる(市田 2005, 原・黒坂 2013, 内堀・今西・上田 2023 (以後、内堀ら 2023))。内堀ら(2023)は、文末指さしの示す主語または話題要素と、代名詞との指示特性の違いから、文末指さしが(接語)代名詞(市田 1994, 1998)ではないと指摘し、文末指さしは、主語または話題要素との統語的一致を C 主要部において具現化した一致形態素であると分析した。

以下で、例文の最後に現れる文末指さしは、三人称単数の形態をとり、話題要素/SATO/を表出する際にその指示対象を手話空間上に配置した場所(/SATO/に続いて‘佐藤’を指示する指さしが現れた場合それが指す位置)を、人さし指が示す。また、‘明日車を丁寧に洗う予定’を意味する発話の部分では、目線の方角が発話の相手から逸れることで、RS が標示されている。さらに、予備的調査の段階ではあるが、RS 標示範囲の最後には、領きが必要である(以下、紙面の都合上、例文を発話するために適切な文脈の記載は省略する。例文中の hn は領きを表わす。また例文の意味としては命題に当たる部分のみを記し、RS が標示されている部分には波線を引いておく)。

(2) ^{TOP} SATO (PT3_{SATO}) TOMORROW CAR WASH PLAN PT3_{SATO} ^{*(hn)RS CAREFULLY} ‘佐藤は明日車を丁寧に洗う予定’

(2)では RS の標示範囲にモダリティ要素と目的語が含まれているため、内堀・上田(2023)の調査(1)によれば、引用 RS とみなせる。このような引用 RS における明示的主語は、JSL が pro-drop 言語であり、また文脈依存度が高く通常は空主語が多いため、わざわざ発音するという容認度の低さはあるものの、1 人称代名詞であれば可能である(3)。

(3) ^{TOP} SATO (PT3_{SATO}) TOMORROW PT1/*3 CAR WASH PLAN PT_{SATO} ^{*(hn)RS CAREFULLY}

この 1 人称は話題要素/SATO/を意味する。また、このような引用 RS の標示が終わる前に文末指さしも出現できる(4)。

(4) ^{TOP} SATO (PT3_{SATO}) TOMORROW CAR WASH PLAN PT1 PT3_{SATO} ^{*(hn)RS CAREFULLY}

(4)の引用 RS 内は空主語であるが、文末指さしは、(3)では明示的に現れた主語と同じ 1 人称の形態をとり、領きと同時に生起する。さらに、引用 RS では、文末指さしと明示的主語が共起できる(5)。

(5) ^{TOP} SATO (PT3_{SATO}) TOMORROW PT1/*3 CAR WASH PLAN PT1 PT3_{SATO} ^{*(hn)RS CAREFULLY}

注目すべきは、引用 RS 内文末指さしの後で RS の標示が終わり、サイナーの目線などが対話の相手に向かう体勢に戻ると、主文全体にとっての文末指さしが現れ、話題要素/SATO/が配置された手話空間上の位置を示す点である。

Kawasaki (2024)は、引用 RS を含む JSL の RS を CP や IP ではなく命題領域であるとするが、引用 RS 標示範囲は、時の副詞/TOMORROW/や認識モダリティを表わす述語/PLAN/(Matsuoka, Yano and Maegawa 2022)を含むため、少なくとも IP(TP)であると考えられる。また、内堀ら(2023)の分析に基づけば、引用 RS 内の文末指さしは C 主要部に生起している。さらに、領きが CP の等位接続詞として機能するという報告(上田・内堀 2022, 内堀・上田 2022)から、引用 RS 内の文末指さしと同時に表出される義務的領きも、CP の接続詞とみなせる可能性がある。以上により、引用 RS が標示される範囲は、主文とは別に、CP に相当する領域を成していることが示唆される。



参考文献

- 原大介・黒坂美智代 (2013) 「日本手話の文末指さしが指し示すものは何か」 日本手話学会第 39 回大会口頭発表. 鈴鹿医療科学大学, 2013 年 10 月 27 日.
- 市田泰弘 (1991) 「手話の基本文法」 小川仁 (監修) 神田和幸 (編) 『手話通訳の基礎—手話通訳士をめざして—』 138-150. 第一法規.
- 市田泰弘 (1994) 「日本手話の文法と語彙」 『日本語学』 13(2): 25-35. 東京: 明治書院.
- 市田泰弘 (1998) 「日本手話の文法」 『月刊言語』 27(4): 44-51. 東京: 大修館書店.
- 市田泰弘 (2005) 「手話の言語学 第 7 回話し手の身体と視線—日本手話の文法(3) 「動詞の一致 (再考) と指示対象のシフト」 『月刊言語』 34(7): 92-99. 東京: 大修館書店.
- Kawasaki, Noriko (2024) Syntax and semantics of Role Shift in Japanese Sign Language. *Sign Language & Linguistics* 27(2): 209-239.
- 小蘭江聡・木村晴美・芳仲愛子・市田泰弘 (2000) 「日本手話におけるロールシフト」 『日本手話学会第 26 回大会予稿集』 8-11. 日本手話学会.
- Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano and Kazumi Maegawa (2022) Epistemic modal verbs and negation in Japanese Sign Language. In Kazumi Matsuoka, Onno Crasborn and Marie Coppola (eds.) *East Asian Sign Linguistics*, 137-167. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Sandler, Wendy and Diane Lillo-Martin (2006) *Sign language and linguistic universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鳥越隆士 (1991) 「日本手話の文末の位置について」 『手話学研究』 12: 15-29.
- 内堀朝子・上田由紀子 (2022) 「日本手話(愛媛方言)に見られるいわゆる等位接続構造制約違反について」 『日本言語学会第164回大会予稿集』 212-218. 日本言語学会.
- 内堀朝子・上田由紀子 (2023) 「日本手話(愛媛方言)に見られる様態副詞の非手指形態素の波及と RS 領域」 『日本言語学会第 166 回大会予稿集』 239-245. 日本言語学会.
- 内堀朝子・今西祐介・上田由紀子 (2023) 「文末指さし」 松岡和美・内堀朝子 (編) 『手話言語学のトピック: 基礎から最前線へ』 113-144. 東京: くろしお出版.
- 上田由紀子・内堀朝子 (2022) 「日本手話(愛媛方言)における接続詞としての非手指表現(NMM)について」 『日本言語学会第 164 回大会予稿集』 205-211. 日本言語学会.
- 米川明彦 (1984) 『手話言語の記述的研究』 東京: 明治書院.



[26] 「じゃあ」との共起から見た日本語の勧誘文—談話構造に着目して—

邢立中（岡山大学社会文化科学研究科）

現代日本語の勧誘文の文頭には、「ねえ、あなたも行きましょうよ」「さあ、行きましょう」「じゃあ、行きましょう」のように様々な要素が現れる。本発表では、このうち、接続詞「じゃあ」が現れたものが目立って多いという事実に注目し（小説の会話の用例を目視によって調査したところ、907 例の勧誘文中 120 例が「じゃあ」を伴っていた）、「じゃあ」と共起した勧誘文はどのような特徴を持つのか、なぜ勧誘文と「じゃあ」が密接に関連するのかを明らかにする。

接続詞「じゃあ」は、浜田（1991）によると、「新しい情報を受け取った時に生起する推論に基づく積極的反応（p. 30）」を特徴とする。本発表ではこれを参考にして「じゃあ」を伴う勧誘文が現れる談話構造を実例によって観察した結果、以下のようなタイプが確認できた。ここでは作例を挙げる。

- I. 話し手が勧誘の前提条件（聞き手の都合、動作を行う能力、動作に対する態度など）を聞き手に尋ねる
→ 聞き手が肯定的な答えを返す → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文を使って提案する
・「太郎って今度の日曜日、暇？」「暇は暇だけど？」「じゃあ、遊びに行こう」
- II. 話し手と聞き手の行動について話し手が提案する → 聞き手が否定的な態度を示す → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で別の提案をする
・「もう帰りますか」花子は首を横に振った。「じゃあ、どこかで一杯飲みましょうか」
- III. 話し手と聞き手に共有課題が存在する（または聞き手に課題がある） → 聞き手の意向が導入される → 話し手が聞き手の意向に沿って「じゃあ」を伴う勧誘文で提案する
・「どこに行こうか」「私、映画が好きなんだけど」「じゃあ、映画を見に行こう」
- IV. 話し手と聞き手が何をするかについて相談する → 合意に向かう → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で行動を具体化して提案する
・「みんなで探したほうがいいね」「そうだね、探しにいこう」「じゃあ、探す場所の分担を決めよう」
- V. 聞き手から勧誘してくる → 話し手が「じゃあ」を伴う勧誘文で同意または許可を与える
・「まだだいぶ時間があるね。歩いて行かない？」「じゃあ、そうしよう」
- VI. 話し手と聞き手が行動をともにしようとする → 話し手が動作実行のタイミングを判断する → 「じゃあ」を伴う勧誘文で動作のきっかけを与える
・開演 15 分前のブザーが鳴る。「じゃあ、席に着こうか」

以上の観察から、「じゃあ」を伴う勧誘文が使用される談話構造のスキーマが抽出できる。すなわち、「じゃあ」を伴う勧誘文の先行文脈には何らかの新情報が提示されている。それは主に聞き手の意向（一部、場面状況）である。それに基づき、話し手は、どのような提案を行えば、双方あるいは聞き手にとって望ましいかということを推論し、勧誘文を用いて勧誘する。

従来の勧誘文の研究では、シヨウ・シヨウカ・シナイカといった述語形式の意味や用法の違いを中心に考察されてきたが、「じゃあ」を伴う勧誘文はこの観点から大きく 2 類に分けられる。上記の 6 つのパターンのすべてにシヨウ・シヨウカが使えるが、I～IV はシナイカも自然に使えるのに対して、V・VI はシナイカは不自然である。これは、談話構造の中で「提案」の働きをしているか否かによると考えられる。

命令文や依頼文も「じゃあ」を伴うことがないわけではないが、非常に少ない。勧誘文とそれらとの違いは、勧誘文は動作主体が 1・2 人称ということであり、意向の一致点を探るための情報の収集と推論のプロセスを必要とすることが少なくない。他方、「じゃあ」を伴わない勧誘文は、そのようなプロセスを介さない勧誘文であると言える。例えば、話し手の意向に基づく勧誘の場合、「のどが渴いたなあ、喫茶店に行こうよ」のように、いきなり勧誘文で勧誘することもある。こうした勧誘文は最も行為要求文らしいと言える。



参考文献：

- 安達太郎（1995）「シナイカとシヨウとシヨウカ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版，pp. 226-234
- 邢 立中（2024）「勧誘文の類型化をめぐって―「さあ」「ねえ」との共起を中心に―」『2024 年度日本語学会秋季大会予稿集』2024 年 10 月
- 甲田直美（2000）「接続詞と対話」『国語語彙史の研究 十九』和泉書院，pp. 255-272
- 佐藤里美（1992）「依頼文―してくれ，してください―」『ことばの科学 5』言語学研究会編，むぎ書房
- 高橋太郎（1994）「会話の展開のなかでの接続詞」『立正大学文学部論叢』99，pp. 1-19
- 浜田麻里（1991）「「デハ」の機能：推論と接続語」『阪大日本語研究』3，pp. 25-44
- 林 淳子（2020）『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 樋口文彦（1992）「勧誘文―しよう，しましろう―」『ことばの科学 5』言語学研究会編，むぎ書房
- 姫野伴子（1998）「勧誘表現の位置―「しよう」「しようか」「しないか」―」『日本語教育』96，pp. 132-142
- ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版
- 村上三寿（1993）「命令文―しろ，しなさい―」『ことばの科学 6』言語学研究会編，むぎ書房



1.はじめに: 基体動詞+タイからなる述語を取る願望構文は(1)のように目的語における格交替を許容し、主格目的語構文(Nominative Object Constructions, NOC)になる場合と対格目的語構文(Accusative Object Constructions, AOC)になる場合がある。

(1) (僕は)カレー{を/が}食べたい。

本稿の目的は、先行研究で言及されていない問題も射程に収めた願望構文の分析を提案することである。

2.先行研究: 格交替に伴う統語的差異として、Sugioka(1986)は NOC でのみ再分析が生じ基体動詞とタイが一語化し、一語化した述語と NO は姉妹位置になければならないという制約が生じるとしている。このような分析によって、(2)のような述語が接続された文における容認度の差異や(3)のように動詞を修飾する要素を NO と述語の間に置くと不自然になることが説明される。

(2) a.*紅茶が飲み、ケーキ{を/が}食べたい。 b. 紅茶を飲み、ケーキ{を/(?)が}食べたい。(Sugioka1986)

(3) 僕は(寝っ転がって)テレビが(??寝っ転がって)見たい。(Sugioka1986)

しかし、Sugioka の説では(4)に見られるような作用域解釈が説明できない。

(4) (僕は)子供達だけでカレーが食べたくない。(ダケ<タイ<ナイ) (cf. Takahashi2021)

(5) (4)の解釈: 子供達だけでカレーを食べるということをしたくない(大人達とも一緒に食べたい)。

Sugioka の分析に則れば、(4)において動詞句に付加し動詞を修飾する「子供達だけで」はタイ(を含む述語)を非対称的に c 統御する位置にあることになり、狭い作用域を取る解釈になることを予測できない。

3.主張と分析: (4)で見た作用域の問題と(2)に見られる述語接続の可否を統一的に説明するため、本稿では NOC と AOC のいずれにおいても一語化は生じないが、それぞれの構文でタイが取る補部の大きさが異なり、NOC では v/VP レベルの動詞句(動詞句の詳細な構造については紙幅の都合上触れない)が、AOC では肯否に関する主要部を持つ PolarityP までが補部になると主張する。

まず、NOC におけるタイの補部について見る。(4)のように動詞修飾要素が共起可能なことから、タイの補部には動詞句が含まれる。また、(6)のようにテイル形を補部を取る場合不自然になることから、アスペクトに関する範疇 AspP は補部に含まれないと考えられる。

(6) (僕は)カレー{を/??が}食べていたい。

加えて、藤村他(2004)や藤村(2009)によれば感嘆的に願望の表出を表現する場合 AOC より NOC の方が適切だとされるが、テイル形を含むと容認度が落ちる。

(7) ああ、水{?を/*が}飲んでいたい! (cf. ああ、水{?を/が}飲みたい!)

以上の観察から、NOC は AspP 以上の大きさの補部は取れず、動詞句を補部にとする。また、基体動詞とタイは一語化しないとすることで、タイが動詞句付加部を非対称的に c 統御する構造が維持され、(4)のような作用域解釈が説明できる。

次に AOC について見る。(6)の AOC が可能であることから、AspP までは補部に含まれるとする。否定辞及び時制辞は単文の場合(8)のようにタイの内側に現れることができない(cf. 平田 2011)が、以下で(2b)のような述語接続文では肯否がタイの作用域内に含まれることを示す。

(8) a.*カレーを食べなたい。 b.*カレーを食べたたい。

平田によれば、述語接続が生じる場合文末の否定辞は 1 つ目の述語を作用域に取れず、(9)は(10b)のように解釈できないことから、接続される 2 つの節は肯否に関する PolP までを必ず投射する。

(9) 太郎はカレーを食べ、コーヒーを飲まなかった。

(10) a. 太郎はカレーを食べた、そしてコーヒーを飲まなかった。

b.*太郎はカレーを食べなかった、そしてコーヒーを飲まなかった。

平田の分析を踏まえ、本稿では(2b)のような述語接続を含む願望構文でも両方の節が PolP までを含み、タイは 2 つの PolP を作用域に含んでいると主張する。このことを示す事実として、1 つ目の述語のみを否定形にした(11)は(12)の意味を持つ文として容認できる。

(11) カレーを食べず、コーヒーを飲みたい。

(12) カレーを食べたくない。そしてコーヒーを飲みたい。

以上の例から、AOC におけるタイは PolP までを補部にとることができると主張する。(8a)のような単文では隣接する否定辞とタイの形態的關係によって不自然さが生じるが、(2b)のような否定辞とタイが隣接しない述語接続文の場合は肯否がタイの作用域に含まれる文として容認される。

4.結語: 本稿の分析によれば、(2a)の不自然さは接続される節が必ず PolP までを持つことと、NOC におけるタイは補部に動詞句を取るという性質から帰結として生じる。また、先行研究で十分に言及されていなかった(4)の作用域解釈についても統一的に説明できる。

参考文献

- 藤村逸子・寺島啓子・寺島佳子・萩原由貴子・大曾美恵子(2004)「『を』と『が』の交替と『他動性』: コーパスを利用した検証」『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究報告論文集』41-72.
- 藤村逸子(2009)「他動性再考:『被動作主』を表示する『が』と『を』の交替」, *Asian and African Studies*13(1), 73-112.
- 平田一郎(2011)「日本語の句構造一述語の等位接続を手がかりに一」博士論文, 筑波大学.
- Sugioka, Yoko(1986) "Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English", London: Routledge.
- Takahashi, Masahiko(2021) Some notes on the scope properties of nominative objects in Japanese. In: Laszakovits, Sabine & Shen, Zheng (eds.) (2021) *The size of things I: Structure building. (Open Generative Syntax 12)* 153-171, Berlin: Language Science Press



本稿の目的は、(1)のような can't seem to を含む節の統語的・意味的特徴を極小主義 (特に Chomsky 2000 以降の研究) の下で説明することである (本稿では関連する can, 否定辞, seem to に下線を引く)。

(1) John can't seem to run very fast.

(Langendoen (1970: 25))

このような文は、以下のような特徴を持つ。第 1 に、埋め込みの述部は seem to に選択されているのではなく、can't に選択されているように振る舞う (2)。第 2 に、seem to がイディオム表現に介在し生じ得る (3)。第 3 に、経験者項は can't seem to 内部には生起できない (4)。(諸特徴は Langendoen (1970) を参照。)

(2) a. John can't seem to lose weight. b. John can/can't lose weight. c. *John seems/doesn't seem to lose weight.

(3) Abe can't (seem to) afford paying the rent

(4) (^{OK}To me) John can't seem (*to me) to run very fast (?to me).

以上を説明するため、本稿では seem to が、can't と述部の間に対併合 (pair-Merge) すると提案する。

(5) John can't [run very fast].

↑[seem to] (= 'seemingly')

(対併合に関しては、Chomsky (2004) を参照)

このため、(2) や (3) のように、述部は can('t) により選択されている振る舞いをし、また、(4) のように seem to は固定の表現として統語部門に導入され、分離できないことになる (Homer (2012), Koopman (2021))。

この分析は、can't と seem to を不可分なイディオムとする分析は誤りであることを示唆する (Jacobson (2006))。この証拠として、can't seem to の一部分に対し、動詞句削除を適用することが可能である (6)。

(6) Ben just can't seem to get to a nine o'clock class on time, and neither can Lance.

さらに、(1) の作用域は seem > not > can と解釈され、表層語順とは異なる。本稿では作用域の点でも、can't と seem to の語彙特性から生じ、合成的な解釈の結果であると論じる。まず、Lechner (2006) に従い、can は、not や never より下位に義務的に再構築 (reconstruct) されると仮定する。

(7) a. John can_i not t_i come along today. (not > can / ??can > not) b. He can_i never t_i do that. (never > can)

次に、seem は evidential Modal であるという考えを採用する (Aijmer (2009), Chafe (1986), Song (2017))。この結果、seem は modal として上位で解釈される。このような、語彙項目の特性により、seem > not > can の作用域で解釈される。実際、Cinque (1999) は evidential Mood を主語よりも高い位置に仮定する。

(8) [*frankly* Mood_{speech act}] [*fortunately* Mood_{evaluative}] [*allegedly* Mood_{evidential}] [*probably* Mood_{epistemic}]

[*once T(Past)*] [*then T(Future)*] [*perhaps* Mood_{irrealis}] [*necessarily* Mood_{necessity} ... (cf. Cinque (1999: 106))

以下の点でも、この分析が適切である。第 1 に、義務的な再構築が生じない助動詞では、(1) と異なり、表層語順の作用域のみとなる (9)。第 2 に、(10) でも、can は never より下位の解釈であり (7b)、(1) と類似の作用域が生じる (10)。第 3 に、evidential Mood は節ごとに存在し、seem は節を越える解釈はない (11)。

(9) John won't/mustn't seem to run very fast. (will/must > not > seem / *seem > not > will/must)

(10) John could never seem to speak in full sentences. (seem > never > could)

(11) You think John can't seem to lose weight. (think > seem > not > can / *seem > think > not > can)

以上、can't seem to 表現は固定したイディオムではなく、統語的にも意味的にも合成的に解釈される。ただし、この表現の特殊性は、本稿の提案である (6) により生じると説明される。



参考文献

- Aijmer, Karin (2009) “Seem and Evidentiality,” *Functions of Language* 16, 63-88.
- Chafe, Wallace (1986) “Evidentiality in English Conversation and Academic Writing,” *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, ed. by Wallace Chafe and Johanna Nichols, 261-272, Ablex, Norwood, NJ.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Homer, Vincent (2012) “As Simple as It Seems,” *Logic, Language and Meaning: 18th Amsterdam Colloquium, Amsterdam, The Netherlands, December 19-21, 2011, Revised Selected Papers*, 351-360, Springer, Berlin.
- Jacobson, Pauline (2006) “I Can’t Seem to Figure This Out,” *Drawing the Boundaries of Meaning: Neo-Gricean Studies in Pragmatics and Semantics in Honor of Laurence R. Horn*, ed. by Betty J. Birner and Gregory Ward, 157-175, John Benjamins, Amsterdam.
- Koopman, Hilda (2021) “On the Syntax of the Can’t Seem Construction in English,” *Smuggling in Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Chris Collins, 188-221, Oxford University Press, Oxford.
- Langendoen, Terence (1970) “The ‘Can’t Seem To’ Construction,” *Linguistic Inquiry* 1, 25-35.
- Lechner, Winfried (2006) “An Interpretive Effect of Head Movement,” *Phases of Interpretation*, ed. by Mara Frascarelli, 45-69, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Song, Mean-Young (2017) “A Modal Semantic Approach to English Evidential Raising Construction,” *Language and Information* 21, 25-47.



[29]

音韻ループ下の文理解に関する fMRI 研究

江村 玲^{1,2}、鄭 嬌婷¹、河地 庸介¹、小室 竜也^{1,2}、小泉 政利¹

¹ 東北大学、² JSPS 特別研究員

概要 本研究は、図1のように、fMRI の中で被験者が「ダバガダダバガダ…」と呟きながら妥当または非妥当な文を聞くという二重課題を実施した。この結果から、妥当性に基づく文理解が、二重課題では単一課題と異なる神経基盤を持つことを示した。

背景・目的 人間が言語を理解するとき、通常は、統語情報と世界知識による妥当性など複数の情報を利用して、一つの解釈を導き出す。一方で、ワーキングメモリの容量が枯渇している場合（たとえば図1のような二重課題下）、統語情報よりも妥当性に依拠して文を理解する傾向が高まると観察されてきた（Gibson et al., 2013 等）。この現象は、統語に関する脳活動領域が二重課題時に単一課題時よりも狭くなることから、文法に依拠した処理が弱まることが示された（Rogalsky et al., 2008）。しかし、妥当性に依拠した文理解の活動（両側下前頭回に当たる（Ye & Zhou, 2009; van de Meerendonk, 2013））が増えるのかは、まだ神経科学的な証拠は示されていない。よって、**本研究は fMRI の実験手法を用い、ワーキングメモリが制限されている場合の（音韻ループ下における）妥当性に基づいた処理の神経基盤を確かめる。**

方法 日本語母語話者 49 名が fMRI 実験に参加し、動き（> 3mm）と正答率（< 80%）により 4 名を分析対象外とした。図1のように、被験者は fMRI の中で、「ダバガダダバガダ」と呟きながら（二重課題条件）もしくは何もしない（単一課題条件）間に、(1) のような妥当または非妥当の文を聞く。その後、(2) のような行為者を問う二択問題に答えた。なお、ターゲット刺激は 48 文、フィラー刺激は 48 文ある。実験は 4 セッションに分け、セッションの中で刺激をランダム提示した。

- (1) 妥当 / 非妥当： （赤ちゃんが母親に / 母親が赤ちゃんに）優しく抱き上げられたらしい。
(2) 質問： 誰が抱き上げたか？ 母親・赤ちゃん

結果 我々は正答率と脳活動を分析し、課題（単一課題 / 二重課題）と妥当性（妥当 / 非妥当）の 2 要因が与える影響を調べた。まずは、正答率は表1の通りである。二項分布の一般化線形混合モデルで分析すると、非妥当な文の正答率が妥当な文に比べて有意に低かった（ $p < 0.001$ ）。

表1 課題と妥当性ごとの質問の正答率

	単一課題	二重課題
妥当	0.95	0.92
非妥当	0.85	0.83

次に、脳活動の結果について説明する。課題ごとにボクセルレベルで t 検定を行い、有意水準 $p < 0.001$ で妥当文より非妥当文の方が活動量大きい領域を求めた。図2のように、単一課題では両側下前頭回三角部と海馬の活動領域が賦活した。一方、図3のように、二重課題では左下前頭回眼窩部と左島皮質前部が賦活した。つまり、**二重課題では、妥当性の処理で賦活する領域が単一課題での領域と異なり、より左半球の前頭葉を中心に賦活した。**

考察 同じ二重課題で統語の処理を調べた研究では、二重課題時の賦活領域は単一課題時の領域から狭くなったただだった（Rogalsky et al., 2008）。一方、本研究は二重課題下、つまり音韻ループの機能が阻害されている条件では、音韻ループで下前頭回が使用されているため（Nishida et al., 2017 等）、妥当性の処理を他の領域で補うことを示唆した。したがって、本研究は、認知負荷が高い場合に言語理解のストラテジーの変化を脳活動から示した。

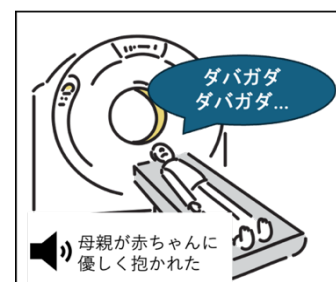


図1 実験の手順

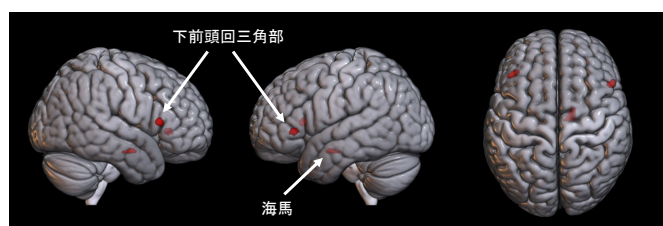


図2 単一課題における非妥当 > 妥当の賦活領域

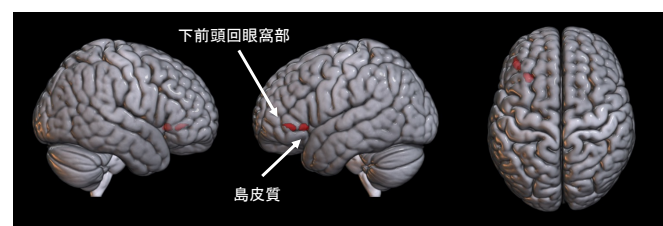


図3 二重課題における非妥当 > 妥当の賦活領域

参考文献

- Gibson, E., Bergen, L., & Piantadosi, S. T. (2013). Rational integration of noisy evidence and prior semantic expectations in sentence interpretation. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 110(20), 8051-8056.
- Nishida, M., Korzeniewska, A., Crone, N. E., Toyoda, G., Nakai, Y., Ofen, N., ... & Asano, E. (2017). Brain network dynamics in the human articulatory loop. *Clinical Neurophysiology*, 128(8), 1473-1487.
- Rogalsky, C., Matchin, W., & Hickok, G. (2008). Broca's area, sentence comprehension, and working memory: an fMRI study. *Frontiers in human neuroscience*, 2, 327.
- Ye, Z., & Zhou, X. (2009). Conflict control during sentence comprehension: fMRI evidence. *Neuroimage*, 48(1), 280-290.
- van de Meerendonk, N., Rueschemeyer, S. A., & Kolk, H. H. (2013). Language comprehension interrupted: Both language errors and word degradation activate Broca's area. *Brain and Language*, 126(3), 291-301.



ブヌン語（台湾、オーストロネシア語族）の接頭辞 mu- は、従来「移動」「脱落」「逆使役」の意味、機能を持つとされてきたが(Jeng 1969, De Busser 2009, Li 2018, Chen 2020)、いずれも少数の例に基づく分析であった（唯一、野島 2023 が𪗇社方言の mu- を含む 39 語を示した上で意味分析を行っている）。本研究では、𪗇社方言の mu- について、発表者自身が現地調査で得たデータに主に基づき、100 以上の語根との結合可能性を調査し、その意味、機能を再検討する。

調査の結果、mu- は単純な「移動」や「逆使役」という記述では説明できない多様な語に現れることが確認された。特に、「はずれる」「落ちる」「壊れる」「去る」「散らばる」「戻る」といった「離脱を出発点とする諸事象」を表す語が多く含まれており、本発表ではこれを mu- が表す意味の核と提案する。もし mu- が単に「移動」を表すなら、「上」「中」「向こう岸」、具体的な地名など空間概念を表す語基と自由に結合し、「～へ行く」という意味が表せるはずである。しかし、実際にはそうはならない（そのような語基と自由に結合するのは、明らかに「移動」を示す接頭辞 mun- である）。また、mu- に「逆使役」の機能しかないなら、「離脱」以外にも様々な事象を表す語基と結合していいはずであるが、付着（「くつつく」）、出現（「現れる」）、上昇（「跳ぶ」「浮く」）、開閉（「あく」「しまる」）など、「離脱」と相容れない事象を表す語基とは mu- は結合しないなど、mu- は明らかに結合の相手を選んでおり、「逆使役」の形成というよりはむしろ、相当に具体的、語彙的な意味を備えているのは明らかである。

さらに、形態論的・統語論的な観点からも、mu- は「移動」だけでは捉えきれない特徴を持つ。例えば、mun- という、明確に「移動」を示す接頭辞を含む語（例：mun-daḏa? 「上がる」）とは異なり、接頭辞 mu- を含む語（例：mu-suqis 「戻る」）は目的地を自由には補足語に従えることができず、例えば「空へ戻る」のように目的地を明示するには munhaan などの方向指示要素（日本語の格助詞「へ」や、英語の前置詞 to に相当）の補助が必須となる。この違いは、mu- が「離脱」を表し、「移動」の意味は持たないことを裏付けている。

意味論的にも、mu- が持つ「離脱」の概念は、分離（はずれる、もげる）、落下（落ちる、転がる）、破損（壊れる、破れる）、散開（去る、散らばる）、緊張からの解放（家路につく、戻る）、省エネ移動（歩く、這う）など、多岐にわたる事象に共通するものとして整理できる。

本研究は、100 以上の語根を用いた大規模調査を通じて、mu- の形態・統語・意味のふるまいを統一的に説明する枠組みを提案し、従来の「移動」や「逆使役」というラベルに基づく分析を再検討する必要性を示す。さらに、オーストロネシア祖語再構における接辞 mu- の位置づけにも新たな視点を提示し、mu- が「移動」から「逆使役」へと意味・機能を拡張させたという従来の説に対し、「離脱」を核とした再解釈を提案する。

参考文献

- Chen, Victoria. (2020) The derived intransitive in Formosan and its implications for the nature of Proto-Austronesian Actor Voice. *Oceanic Linguistics* Volume 59, Number 1/2. University of Hawai'i Press.
- De Busser, Rik L. J. (2009) Towards a grammar of Takivatan Bunun: Selected topics. PhD dissertation, La Trobe University.
- Jeng, Heng-hsiung. (1969) A preliminary report on a Bunun dialect as spoken in Hsinyi, Naut'ou, Taiwan. Mimeo. Taipei: National Taiwan University.
- Li, Lilian Li-ying. (2018) A grammar of Isbukun Bunun. PhD dissertation, National Tsing Hua University.
- 野島本泰. (2023) 「ブヌン語卓社方言の接頭辞 mu- —Moriguchi の Bunun Texts における全用例から見えてくる意味・機能—」 第16回日台原住民族研究フォーラム 発表資料.



Aikhenvald (2000: 207) によると、ベトナム語の類別詞は numeral classifier (A: 数詞+類別詞+名詞)、noun classifier (B: 類別詞+名詞)、deictic classifier (C: 類別詞+(名詞)+指示詞) という三つの種類に分けられる。ここではそれぞれ A パターン、B パターン、C パターンとする。

B パターンに関して、Bisang, Walter & Kim Ngoc Quang (2020: 43) によれば、「類別詞+名詞」は定の文脈に使用される傾向が強い。また、Simpson et al. (2011: 190) によれば、「類別詞+名詞」は定指示の既定形として機能し、より広範な文脈で自然に認められるが、裸名詞の出現はより制約を受ける傾向があり、不適切と判断されることが多い。つまり、定の文脈に出現する裸名詞は特別な説明を要する可能性があるという。しかし、カジュアルな表現では、前文で言及された定の指示物に対して、類別詞を用いない方がより自然だと判断される場合がある。本発表では、(1) に対して、6 人の母語話者に 5 段階調査を行い、その結果を Welch's t-test で検定した結果、a と b の自然さの間に有意差が認められた ($p=0.017, \alpha=0.05$)。調査した結果は以下の図 1-4 の通りである。

表 1

(1) 友人同士間の会話: A: Hôm nay tôi đã chụp cho bạn một bức ảnh. 今日 私過去撮る にあなた CL 写真 「今日は私があなたに写真を一枚撮った。」	
B: a. Gửi ảnh cho tôi nhé. 送る 写真に私ね	
b. Gửi bức ảnh cho tôi nhé. 送る CL 写真に私ね	
c. Gửi ảnh đó cho tôi nhé. 送る写真そのに私ね	
d. Gửi bức ảnh đó cho tôi nhé. 送る CL 写真そのに私ね	
「写真を送ってください。」	

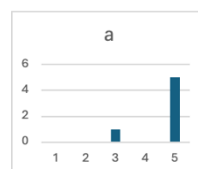


図 1

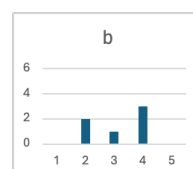


図 2

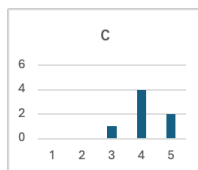


図 3

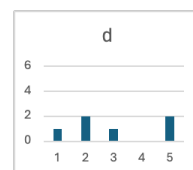


図 4

Bisang, Walter & Kim Ngoc Quang (2020) は 30 人のベトナム語母語話者に映画の内容について報告させる実験を通じて、書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを作成して考察を行っている。Simpson et al. (2011) は英語で作られたアンケートの質問をベトナム語母語話者にベトナム語に翻訳させる形で考察を行っている。しかし、類別詞の使用がより丁寧な印象に繋がることを踏まえると、映画に間する報告や、翻訳されたものをデータとして用いることは、類別詞の日常的な使用を反映していない可能性がある。日常会話の中で、類別詞を用いない現象は A パターンと C パターンにも観察される。

(2) Cầm hai nước lên. 「二つの水を取ってください。」

取る 二 水 くる

発表者によるエリシテーション

(3) mèo này 「この猫」

猫 この

(Löbel 2000: 311)

本発表では、自然談話のデータを用いて、類別詞の使用に関して、先行研究で指摘されていない現象について記述し、よりカジュアルな表現では、A、B、C パターンに対して、類別詞を用いない方がより自然な傾向があることを指摘する。この現象は語用論のポライトネスに関わることを主張する。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2000) *Classifier: A typology of noun categorization devices*. New York: Oxford University Press.
- Bisang, Walter and Kim Ngoc Quang (2020) Definiteness and Vietnamese classifiers. In: Kata Balogh, Anja Latrouite and Robert D. Van Valin, Jr. (eds.) *Nominal anchoring: Specificity, definiteness and article systems across languages*, 15-49. Berlin: Language Science Press.
- Simpson, Andrew, Hooi Ling Soh, and Hiroki Nomoto (2011) Bare classifiers and definiteness: A cross-linguistic investigation. *Studies in Language* 35(1): 168-193.
- Löbel, Elisabeth (2000) Classifiers versus genders and noun classes: A case study in Vietnamese. In: Werner Winter (ed.) *Gender in grammar and cognition*, 259-319. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.



[32] アフリカーンス語における比較級・最上級の形成—英語との比較を通じて—

伊藤一輝(東京外国語大学大学院 博士後期課程)

山藤顕(東京外国語大学大学院 特別研究員)

本発表ではアフリカーンス語の比較級・最上級における語尾パターンと迂言的パターンに着目し、その使い分けには従来指摘されてきた語末音に加えてアクセント位置が重要な役割を果たしていることを示す。また同時にアフリカーンス語の比較級・最上級と英語やアフリカーンス語の基であるオランダ語などの関連する他のゲルマン語における比較級・最上級との対比を行う。

西ゲルマン語群における比較級・最上級の形成は、通常語尾の付加によって行われる。例えば、ドイツ語やオランダ語では語尾を伴う形が主流であり、英語の *more/most* に相当する迂言的な形はほとんど見られない。一方英語では、語尾パターンと迂言的パターンの両方が存在し、Quirk et al(1985)・Dixon(2005)によれば基本的に音節数に応じて使い分けられ、3音節以上であれば迂言的パターンのみを取るとされている。アフリカーンス語も英語と同様に語尾パターンと迂言的パターンの両方が使用される。しかし例えば、*interessant* (英: *interesting*) に対して、*interessanter/interessantste* (語尾パターン)、および *meer interessant/mees interessant* (迂言的パターン)の両方が使用可能であり、英語と異なり3音節以上の語においてどちらも許容されるパターンが見受けられる。

Taalkommissie(2017)によると、アフリカーンス語の比較級・最上級の形成は語尾パターンが伝統的であり、迂言的なものに関しては、英語のように音節数ではなく語末が-eで終わる場合に現れるという。また Uys(2015)はアフリカーンス語の比較級・最上級に関して、語尾パターンと迂言的パターンの分類を行っている。しかし Taalkommissie(2017)・Uys(2015)では、どちらか片方のみの条件に関しては言及があるものの、語尾パターンと迂言的パターンどちらも許容されるものについてどのような条件下でそうなるかまで言及がない。加えて Uys(2015)の分類には、母語話者の直感と反する例が少なからず存在する。例えば Uys(2015)では *interessant* は語尾パターンとされているが、実際は迂言的パターンも可能である。

本発表では、アフリカーンス語の比較級・最上級の形成について、主に英語およびオランダ語と比較し、音韻的要素の観点から新たな法則性を見出す。分析に際して、Uys(2015)の比較級・最上級の分類を音節数とアクセント位置を基準に適当に抽出し、それらを母語話者に語尾パターンと迂言的パターンの両形式で容認度を判断してもらい一般化を試みた。

調査の結果、アフリカーンス語の比較級・最上級には先行研究で言及されている語末音に加えて、特にアクセント位置が影響を与えており、語頭以外にアクセントがある場合に揺れが生じていることを示す。これは例えば *interessant* のような語中にアクセントがある語を語頭アクセントにすると、語尾パターンが優先される事から明らかになる。

本研究は、アフリカーンス語における比較級・最上級の形成条件を整理することで、アフリカーンス語文法の記述的体系化および西ゲルマン語群における形態の簡略化のメカニズムの再考に貢献することを目指す。

参考文献

- Dixon, Robert M.W. (2005). *A Semantic Approach to English Grammar*. 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Taalkommissie (2017). *Afrikaanse woordelys en spelreëls*. Kaapstad: Pharos.
- Uys, Isabel (2015). *Afrikaans vir almal: Taalreëls, Naslaanlyste, Algemene kennis*. Kaapstad: Pharos.



＜問題の所在＞インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語群イラン語派に属するバローチー語の等位接続詞 *o* は、Giusti et al. (2022) が擬似等位接続と呼んでいる構造を作ることがある。これは、これまで指摘されてこなかった。等位接続は、例えば英語の‘and’にみられるように、2 つの出来事を生起した時間的順序に従い単純に並べることができる (Croft 2022: 466–467)。バローチー語の *o* も同様に用いられるため、等位接続詞と分類できる。このような等位接続の中に、英語の *go and eat a pizza* といった表現にみられるように、単なる複数の出来事の並列ではなく移動やアスペクトなど別の意味を加えている例がある。Giusti et al. (2022) はこれを、等位接続と同じ接続辞が用いられ複数の動詞句が同じテンス・ムード・アスペクトに活用しているにもかかわらず、意味的・形態統語論的には等位接続の機能をはたしていないことから擬似等位接続 *pseudo-coordination* と呼ぶ。バローチー語の擬似等位接続構造については研究が進んでいない。また類型論的な擬似等位接続との共通点・相違点も、議論されたことがない。

＜議論の流れ＞バローチー語の *o* は最も頻繁に使用される等位接続詞であるが、独立した複数の出来事を時間経過に従って単純に並列しているわけではない例がある。

- (1) *mēatg-ay bachakka ātk o moccha but-ant* ‘boys of the village gathered’
 village-GEN boy came and gathering became-PL (Jahani et al 2022: 288)

(1) と後の例文 (3) では、1 つめの動詞の複数標示は省略されている。(1) は「来る」と「集まる」という 2 つの動作の連続を表すというより、「集合する」という 1 つの動作を叙述している。これは Giusti et al. (2022: 9–10) が提示する擬似等位接続構造の特徴 4 つのうち、①2 動詞の順序を逆にできない ②語彙的動詞が表す動作のみを否定できない ③2 動詞が共通の主語をもつ の 3 つを満たしている。残り 1 つはバローチー語の疑問文の語順が英語と異なるためテストが困難である。

本発表では、主にバローチー語の南部方言の特色を示すパキスタンの出版物を調査対象としてバローチー語の擬似等位接続構造を収集し、観察される特徴を類型論的な研究を参照しながら記述する。

＜結論＞バローチー語には擬似等位接続構造が存在し、移動に関する意味の付加、2 動詞の時制が共通、接続辞の省略可能など、他言語と共通する特徴を持つ。一方、語彙的動詞が接続詞の前後いずれに位置するかに交替がある点は、他言語の擬似等位接続にあまり見られない特徴である。

＜本質的に重要なデータ＞バローチー語の擬似等位接続が付加する意味は、前掲の (1) では「筆者のほうへ来る」という移動の方向である。次例 (2) では、「ボディビルをする」という目的である。

- (2) *ā šot o bādii aḍḍ kort* ‘he went and did body-building’
 he went and body building did (Jahani et al. 2022: 273)

次の例文 (3) は (1)(2) と異なり、実質的意味を表す動詞のほうが前置されている。語彙的動詞が前後どちらにも位置できるという特色は、他言語の擬似等位接続構造ではあまり指摘されていない。

- (3) *neštagēn janēn sajjahēn jest o šot-ant.* ‘all the women sitting there ran away.’
 sitting women all fled and went-PL (Jahani&Baloch. 2016: 17)

(1) ～ (3) のように、擬似等位接続には移動動詞である「来る」「行く」の 2 動詞が主に用いられる。

＜セールスポイント＞擬似等位接続構造という分析手法をバローチー語に適用する試みは独自である。

< 参照文献 >

- Jahani, Carina and Aziz Baloch (2016) *Chokkán Gón Pásé*. Uppsala: Department of Linguistics and Philology Uppsala University.
- Giusti, Giuliana, Vincenzo Nicolò Di Caro and Daniel Ross (2022) Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions, An overview. in: Giusti, Giuliana, Vincenzo Nicolò Di Caro and Daniel Ross (eds.) *Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Jahani, Carina, Nagoman Baloch and Taj Baloch (eds.) (2022) *Unheard Voices. Twenty-one short stories in Balochi with English translations*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.



[34]

チェコ語における他動性の度合いを決定する要因について

松山芳瑛 (東京外国語大学大学院博士課程)

hana.ceskarepublika@gmail.com

チェコ語において他動性が最も高い動詞、即ち二項述語階層 (角田 2009) の 1A 類に相当する動詞 (直接影響・対象変化) は基本的に対格名詞句をとる (松山 2021)。一方、1A 類よりやや他動性が低いとされる 1B 類の動詞 (直接影響・対象無変化) の目的語には、対格名詞句と前置詞句の両方が観察される。本発表が問題とするのは、**1B 類の動詞における対格目的語と前置詞句目的語の境界**である。1B 類相当の動詞に関して、Pitřha (1992) は目的語が有生物の場合は対格名詞句、無生物の場合は前置詞句で標示するものが存在すること (①**有生性**) を指摘している。松山 (2024a, b) は動作の対象が有生物である場合に関して、全体は対格名詞句で、部分は前置詞句で標示されやすいこと (②**受影性**) を指摘した。Hopper and Thompson (1980) は、通言語的に、対象全体が影響を受ける場合は部分的に影響を受ける場合よりも他動性の度合いが高くなると述べている。本発表では、チェコ語における 1B 類動詞の目的語の形態を決定する要因をさらに精緻化し、目的語の形態には③**対象の移動の有無**も関係していることを明らかにする。まず、チェコ語動詞結合価辞書 VALLEX と標準チェコ語辞書 SSC が示す結合価と例文を参考に、Pitřha (1992: 109-110) 及び金指 (1998) から、目的語として対格名詞句と前置詞句の両方をとる 11 個の 1B 類相当の動詞を抜き出した。次に、チェコ語国立コーパス研究所が公開する書き言葉共時参照コーパス SYN2020 (約 1 億語を収録) を用いて、これら 11 個の動詞が対格名詞句及び前置詞句をとる用例を合計 1000 例以上抽出した (表 1、一部のデータのみ掲載)。

表 1: 1B 類動詞の目的語の形態別用例数 (△は用例が 10 例未満、×はないことを表す)

動詞 (不完了体 / 完了体)	対格名詞句		前置詞句		
	有生名詞	無生名詞	前置詞と格	有生名詞	無生名詞
strkat / strčit 「押す」	○ (39 例)	○ (360 例)	do “into”+生格	○ (27 例)	○ (13 例)
kopat / kopnout 「蹴る」	○ (52 例)	○ (34 例)	do “into”+生格	△ (7 例)	○ (172 例)
chytat / chytit 「つかむ」	○ (431 例)	○ (290 例)	za “by”+ 対格	× (0 例)	○ (130 例)
kousat / kousnout 「噛む」	○ (21 例)	○ (61 例)	do “into”+生格	× (0 例)	○ (293 例)

用例分析の結果、1) **有生・無生名詞ともに対格をとるが、有生名詞は無生名詞に比べて前置詞句をとりづらい傾向がある**ことを示し (表 1)、有生性による目的語の形態の違いに関する Pitřha (1992) の指摘を定量的に実証した。次に、それら具体例の網羅的な観察から、2) **動作対象が有生物である場合、対象全体が対格で、部分が前置詞句で標示されやすい傾向がある**こと (ex. ヒトを(全体:対格)肩において(部分:前置詞句)つかむ)、反対に**対象が無生物である場合は生格による限定所有表現が用いられやすくなる**こと (ex. 腕時計の(全体:生格)文字盤を(部分:対格)つかむ) も明らかにした。さらに、3) **対象の移動に焦点を当てる場合は対格を、そうでない場合は前置詞句をとる傾向がある**ことを明らかにした。例えば、表 1「蹴る」の目的語が míč「ボール」である場合を観察すると、対格の用例 15 例全てが方向・距離を表す状況語を伴っていたのに対し (1a 波線部)、前置詞句の用例 35 例にそのような状況語は見られなかった (1b)。同様の傾向は、表 1「押す」の有生物・無生物目的語にも見られた。

- (1) a. kopl míč k němu
蹴った ボール.対格 toward 彼.与格 (SYN2020; Fotbaloví divoši; フィクション)
- b. nešikovně kopla do míče
不器用に 蹴った into ボール.生格 (SYN2020; Návrat Pařížana; フィクション)

本発表では、チェコ語において他動性の度合いを決定する条件として、Hopper and Thompson (1980) が通言語的観点から指摘する受影性に加え、有生性と移動の有無も重要であることを明らかにした。本発表は、このような点で通スラヴ語的・類型的な他動性に関する研究データに貢献するものである。



<参考文献・調査資料>

- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』改訂版. 東京: くろしお出版.
- 松山芳瑛 (2021) 「他動性: チェコ語 (特集「他動性」)」『語学研究所論集』26: 183-194.
- 松山芳瑛 (2024a) 「チェコ語における外部的所有構造—所有の与格／対格に着目して—」日本言語学会第169回大会口頭発表C会場-4. 北海道大学, 2024年11月10日.
- 松山芳瑛 (2024b) 「チェコ語における所有の与格と対格の使い分けについて」『スラヴ文化研究』22: 78-98.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56 (2): 251-299.
- Pit'ha, Petr (1992) *Posesivní vztah v češtině*. Praha: Aved.
- 金指久美子 (1998) 『チェコ語基礎 1500 語』東京: 大学書林.
- Český národní korpus (チェコ語国立コーパス). Ústav Českého národního korpusu FF UK, Praha. <https://www.korpus.cz/> [2025年3月19日アクセス].
- SSČ: Filipec, Josef et al. (eds.) (2018) *Slovník spisovné češtiny pro školu a veřejnost*. Fourth edition. Praha: Academia.
- VALLEX: Lopatková, Markéta, Zdeněk Žabokrtský and Václava Kettnerová (2008) *Valenční slovník českých sloves*. Praha: Karolinum.



[35] 南琉球宮古語伊良部島方言における再帰代名詞を用いた「物語の1人称」用法 下地理則 (smz@kyudai.jp)

本発表では、南琉球宮古語伊良部島方言における再帰代名詞 nara 「自分」が、物語談話において特別な用法を持つことを記述する。それは、(1)に示すように、登場人物のセリフにおける「私」に代わって用いられる用法であり、本発表ではこれを仮に「物語の1人称」用法と呼ぶ。

- (1) agai, vva=ga ukagi=du nara=a ninginnasiuiiba. arigatoo! ukka=u=mai turadjaan=ti.
ああ 2SG=の おかげ=ぞ RFL=は 人間であるよ ありがとう 借金=を=も 取るまい=と
「ああ、お前のおかげで私_iは人心を保てるよ。ありがとう！もう借金など取るまい」と(借金取り_iが言った)
(グロスの RFL は再帰代名詞。i は照応関係を示す。以下の例文も同じ)

nara およびその同根形式は、伊良部島方言を含むこれまでの宮古語研究において再帰代名詞と呼ばれ(王 2021)、tarooja [nara]ga jaandu ur 「太郎_iは[自分_i]の家にいる」のように同一節の主語と照応する例が考察の中心であった(Shimoji 2008, Pellard 2009, Jarosz 2024, 王 2021, 王 2022 他多数)。

これに対して(1)における nara はそれ自体が主語位置に生起し、また照応先が文構造に顕在しない。直感的には、発話を直接話法のように引用し、セリフを喋る人物の1人称として訳した方がわかりやすい。

物語の1人称用法は、管見の限り宮古語・琉球語研究で報告がないが、少なくとも伊良部島方言の物語談話に頻出し、決して周辺的な現象ではない。そこで本発表では、発表者自身の収集した談話資料をもとに、物語の1人称用法の構造的・談話的特徴について帰納的な一般化を行うことを目的とする。その結果、この用法が、従来知られてきた再帰代名詞 nara の機能から説明のつく現象であることを述べる。

まず、物語の1人称用法には、以下の3つの目立った特徴があることがわかった。

- (2) 引用発話(セリフ)内の nara を、通常の1人称代名詞 ban 「私(=話し手)」に置き換え不可。
- (3) 引用発話を閉じる発話マーカー(伝聞助詞=ca 「だとさ」、引用標識=ti 「と」)は必須だが、「(〜と)言った」などの埋め込み発話述語は省略が可能。
- (4) 物語の1人称として nara を使えるのは、物語の中でも主人公のみである傾向が非常に強い。

上記の特徴を踏まえ、物語の1人称用法がいかにして再帰代名詞と関連づけられるかを述べる。上で述べたように、再帰代名詞は**その節における主語**と照応する例が典型的とされてきたが、(5)のような発話述語文に関しては、**その発話者**と照応できる(Hagège 1974 に倣えば「ロゴフォリック」である)。

- (5) ziroo=ja taroo=ga nara=ga jaa=n=du ur=ti astar.
次郎=は 太郎=が RFL=の 家=に=ぞ いる=と 言った
「次郎_iは、太郎が自分_iの家にいると言った」(nara の属する節の主語は太郎；発話者は次郎)

物語文では引用発話に対する発話マーカーの接続が必須だが((3)参照)、これらのマーカーは発話述語と同様にロゴフォリックな解釈を喚起すると考えられ、これによって nara が、物語における発話者を照応先とすることが可能になる((1)の照応関係を参照)。これが物語の1人称である。

元々(5)のような再帰代名詞を出発点にしていることから、(2)のように(日本語の感覚で「私」と訳出できるからと言って)1人称代名詞 ban に置き換えられないことは納得できる。nara が物語の1人称用法を獲得し、物語文に多用されていく過程で(3)が生じ、また(4)の機能が新たに備わっていったと考えられる。物語ではさまざまな登場人物の引用発話を語り手が一手に引き受けることになるが、その際、(4)は合理的な発話者同定手段(reference-tracking device)となる。

ここで宮古語以外に目を転じると、アイヌ語において、物語の1人称に使われるとされてきた代名詞(田村 1972)が、ロゴフォリシティの観点で分析できるとの研究がある(Bugaeva 2008)。宮古語でも、再帰代名詞に関して同様の現象が見られるというのが本発表の結論である。このように、本発表は琉球諸語の研究史において初めて、再帰代名詞に物語の1人称用法があることを明らかにした点に加え、ロゴフォリシティおよびその談話機能の研究一般に琉球語の実証データを提供する点で新規性がある。



参照文献

- Bugaeva, Anna (2008) “Reported discourse and logophoricity in Southern Hokkaido dialects of Ainu,” *Gengo Kenkyu* 133: 31-75.
- Hagège, Claude (1974) Les pronoms logophoriques, *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 69: 287-310.
- Jarosz, Aleksandra (2024) *Descriptive Grammar and Diachrony of Kurima*. Brill.
- 王丹凝 (2021) 「南琉球宮古語新城方言における再帰代名詞」『日本語の研究』17 (2): 1-18.
- 王丹凝 (2022) 「南琉球宮古語城辺新城方言の文法」博士論文, 九州大学.
- Pellard, Thomas (2009) “Ogami: Éléments de description d’un parler du Sud des Ryūkyū,” Ph.D. dissertation, Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS).
- Shimoji, Michinori (2008) “A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language,” Ph.D. dissertation, Australian National University.
- 田村すず子(1972) 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』61 : 17-39.



[36] Intonational Avoidance in Chokri: How a Five-Tone Language Preserves Lexical Tone

Amalesh Gope, Tulika Gogoi and Sekholu Tetseo
amaleshtezu@gmail.com

The organization and functions of intonation in tonal languages have been an area of contesting opinions for researchers. The interaction between lexical tone and post-lexical pitch variation has gained attention in recent years and yet remains critically underexplored in Tibeto-Burman tonal languages of India, particularly those with a rich tonal inventory (Gogoi et al., 2024). This paper investigates intonational cues in Chokri, a low-resource Tibeto-Burman language spoken in Nagaland, India, with a five-way tonal contrast (viz., extra high, high, mid, low, and mid-rising, Gope et al., 2024). Specifically, this paper examines prosodic structure and sentence-type marking to understand how intonation coexists with lexical tone in the language.

A production experiment was conducted with five native speakers (aged between 18 and 30 years) from the Thipuzu village of the Phek district in Nagaland, India, to investigate the prosodic structure and cues that indicate sentence type in Chokri. The stimuli set included 25 declaratives, 10 polar questions, 10 wh-questions, 4 alternative questions, 8 imperatives, 3 list utterances, 5 compound sentences, and 5 complex sentences, ensuring diverse tonal configurations. Each speaker repeated the full set five times, producing 1,750 utterances for analysis (Gogoi, 2024).

The results reveal that Chokri preserves lexical tones by utilizing limited post-lexical pitch modification, primarily register variation and declination for intonational functions. The findings confirm the primacy of lexical tones over intonational ones, showing that Chokri does not use phrasal tones to mark prosodic boundary marking or sentence type differentiation. Instead, the language primarily relies on non-pitch features such as duration and pause to indicate prosodic units, while register variation is key in distinguishing questions from statements. Additionally, the study highlights the non-correspondence between grammatical words and prosodic words, as tones are lexically assigned not only to roots but also to prefixes and suffixes, both of which function as non-cohering affixes forming independent prosodic domains. These insights contribute to a broader understanding of intonation in highly tonal languages and reveal the strategies Chokri employs to balance lexical and post-lexical prosody.

Gogoi, T. (2024). *The Phonetics and Phonology of Tone-Intonation Interaction with reference to Sylheti and Chokri* (Doctoral dissertation, Tezpur University).

Gogoi, T., Tetseo, S., & Gope, A. (2024). A Mathematical and Statistical Approach to Explore the Downtrend Properties in Chokri. *Forum for Linguistic Studies*, 6(5), 664–677.

Gope, A., Pal, A., Tetseo, S., Gogoi, T., & Borah, D. (2024). Multi-class identification of tonal contrasts in Chokri using supervised machine learning algorithms. *Humanities and Social Sciences Communications*, 11(1), 1-13.



【問題の所在】 生成文法では、「語形成が文法のどのレベルで行われるか」という問いに対して様々な提案がされてきた。その1つが Halle & Marantz (1993) の「分散形態論 (DM)」で、「語形成は全て統語部門で行われる」と主張する理論である。ただし、その主張には問題となる「日本語の分析」が存在する。それは「V-V 複合動詞」に対して影山 (1993) が提案したタイプ分けである。影山は、そのタイプとして統語部門で作る「統語的 V-V」に加え、レキシコンで作る「語彙的 V-V」もあると述べ、その根拠として語彙的 V_1 の位置には表1の「1~3」が置けないことを示した。

表1: 「V-V 複合動詞」の「タイプ分け」

V_1 の位置に入る要素	統語的 V-V (e.g. V_1 -始める)	語彙的 V-V (e.g. V_1 -取る)
(1) 動詞+受動接辞	ok 切られ始めた	* 切られ取った
(2) 照応表現+する	ok そうし始めた	* そうし取った
(3) 動的名詞+する	ok 切断し始めた	* 切断し取った

この違いは、「1~3」を「統語部門で作る句」と考えれば「レキシコンで作る V-V の一部には使えない」という形で説明できる。よって、この説明が妥当なら、レキシコンでも語形成を認める「モジュール形態論 (MM)」という影山の理論を支持すべきだろう。しかし、MM が完璧かと言うとそうではない。1つの問題は「連濁」についてで、例えば、語彙的 V_2 になれる「付ける」は N や A (形容詞) と結合できるが、表2のように V-V の場合のみ連濁を起こさない。

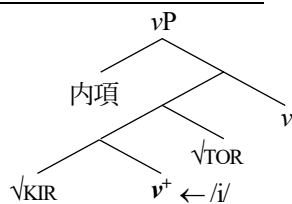
表2: 「X-V 複合動詞」の「連濁の有無」

X-V 複合動詞の種類	実際の事例	V_2 の連濁の有無
(4) V-V 複合動詞	塗り付ける /nur-i-tuke-ru/	無し
(5) N-V 複合動詞	名付ける /na-duke-ru/	有り
(6) A-V 複合動詞	近付ける /tika-duke-ru/	有り

この違いは一般化可能で、他の事例群でも見られる (e.g., 差し引く・値引く・長引く、立ち返る・裏返る・若返る)。重要なことに、[4~6] の複合動詞はそれぞれ「*そうし付ける」「*それ付ける」「*そう付ける」と言い換えできないという点で「語彙的複合動詞」だが、それらの連濁の有無の違いを MM でどう説明するかは定かではない。この点を踏まえ、本発表では「表1・表2の違いを同時に捉えられる分析とはどのようなものか」という問題に取り組む。

【提案の主旨】 本発表では、DM を採用した田中 (2024) に基づく分析を提案する。まず、Harley (2014) に従って、統語部門の入力要素となる形態素を「品詞未指定の語根 ($\sqrt{\quad}$)」と「語根を動詞化する範疇子 v 」などに分け、各形態素が意味を持つには「各々に指定された意味挿入の構造条件」を満たす必要があると仮定する。これを前提に、田中 (2024) は「語彙的 V-V」を作るには「語根を意味的に合成する動詞化要素 v^+ 」が必要と考え、以下の提案を行っている。

(1) 「切り取る」の統語構造

(2) v^+ に挿入される意味内容

$\lambda P_1 \lambda P_2 \lambda e. [P_1(e) \& P_2(e)]$

※これは「事象 e に成り立つ事象述語 P_1 と P_2 を等位接続する」ということを意味する

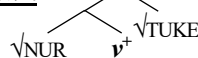
(3) v^+ の意味挿入の構造条件

$v^+ \leftarrow (2) / [[\sqrt{\quad}] \sqrt{\quad}]$

※これは「 v^+ は下線部の位置に出た場合のみ (2) の意味を持つ」ということを意味する

まず、特に重要なのは (3) で、これは要するに「 v^+ は2つの語根に挟まれないと意味が与えられず解釈できない」ということを表すため、表1の「語根ではない要素」が V_1 位置に置けないという事実を上手く捉えられる。ここで本発表が主張したいのは、(1) の「連用形態素 /i/ が v^+ に入る統語構造」が表2の「連濁の事実」を説明するという点である。具体的には、「塗り付ける」の「塗り」は連用形 /nur-i/ であるため、[4~6] の構造は以下のように異なると仮定できる。

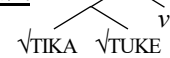
(4) V-V 複合動詞



(5) N-V 複合動詞



(6) A-V 複合動詞



つまり、(4) では語根間に v^+ が入っているため、V-V 複合動詞の場合のみ語根間の局所関係が崩れ、 $\sqrt{\text{TUKE}}$ に挿入される音形を濁音化できないという説明が得られる (e.g., Tatsumi 2016・2022、長谷川・大関 2020、Akimoto 2023、西山 2023)。以上のように、DM に基づく (1~3) の提案は表1・表2の事実を同時に導出可能である。重要なことに、そのような提案は (管見の限り) DM・MM どちらの先行研究でもされていないため、今後発展させる価値があると考えられる。

参考文献

- Akimoto, Takayuki (2023) “On the Domains of Japanese Verbal Compounds: *Su*-insertion, Sequential Voicing and Compound Ellipsis,” *Japanese/Korean Linguistics* 30, 353-362.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection,” *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 111-176, MIT Press, Cambridge, MA.
- Harley, Heidi (2014) “On the Identity of Roots,” *Theoretical Linguistics* 40, 225-276.
- 長谷川拓也・大関洋平 (2020) 「分散形態論と日本語の動詞由来複合語」『第 161 回日本言語学会大会予稿集』, 299-305.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房, 東京.
- 西山國雄 (2023) 「動詞由来複合語の統語・音韻・意味」『分散形態論の新展開』, 大関洋平・漆原朗子 (編), 136-159, 開拓社, 東京.
- 田中秀治 (2024) 「分散形態論と語彙的 V-V 複合語の意味構成」『レキシコン研究の新視点：統語・語用と語の意味の関わり』, 岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 (編), 292-316, 開拓社, 東京.
- Tatsumi, Yuta (2016) “Deverbal Compounds in Japanese: A Distributed Morphology Approach,” *Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics* 8, 177-187.
- Tatsumi, Yuta (2022) “Structural Restrictions on Sequential Voicing in Japanese N-V Compounds,” *Japanese/Korean Linguistics* 29, 99-112.



[P-1]

『枕草子』における非標準的係り結び

牧秀樹(岐阜大学)・池田真由子(岐阜大学)・井上結愛(岐阜大学)

1. はじめに: 日本語古語(以下、古語)には「係り結び」と呼ばれる依存現象がある。例えば、単文(1)では、述語は終止形である。一方、(2)における[参らせよと]に係助詞「ぞ」が付加されると、係り結び現象が現れる。(以下、A = Adnominal, C = Conditional, K = Kakarimusubi Particle, N = Nominative)

(1) 俊蔭 申す。‘俊蔭が言う。’ (2) 参らせよと ぞ、人への 申しつる ‘参らせよと人が言った。’((1)-(2)うつは物語)
係り結び現象とは、特定の助詞「ぞ、なむ、や、か」が、述語連体形と、また、「こそ」が、述語已然形と共起する現象のことを言う。Maki et al. (2024)は、係助詞「ぞ」が、述語連体形以外の活用形と共起することがあると指摘している。例えば、(3)においては、係助詞「ぞ」が、述語連体形ではなく、述語已然形と共起している。

(3) 詣らぬ人など ぞ ありけれ ば 詣らぬ人など-K いた.C-ので ‘詣でぬ人などがいたので’(栄花物語)
X (2024)は、このような不完全な依存関係の例を非標準的係り結びの例と呼び、「ぞ」係り結びの例に焦点を当て、非標準的係り結びの例が何を示唆しているか論じている。本稿では、『枕草子』を資料として、研究課題(4)に取り組む。

(4) a. 「ぞ」以外の係り結びにおいても、非標準的係り結びの例が存在するか？

b. もしそうであれば、そのような例は、古語の文法に関して、何を示唆しているか？

2. 背景: まず、古語には3つの格標識があった:「ø」(音声がない格)、「が」、「の」。裸主語(ø)は、単文に現れる。付加文では、主語はその種類に応じて「が」または「の」で標識される。次に、大野(1993)や Ikawa (1998)などの研究者が主張するように、係り結び現象には移動が関与している。

3. データ: 3.1 「ぞ」係り結び 典型的な「ぞ」係り結びにおいては、「ぞ」と連体形が呼応し、「ぞ」句が、主語の前に移動されるが、「ぞ」句は、已然形と共起し(5)、場所句「裳の上に」の右側に置かれ、文頭に移動していない(6)。

(5) 御廚子が車に ぞ ありけれ ば (6) 殿の上は、裳の上に 小桂を ぞ 着たまへる。

御廚子の車に-K あった.C-ので 殿の上は、裳の上に 小桂を-K 着て-いらつしやる.A

‘御廚子の車であつたので’(枕草子) ‘殿の奥方は、裳(も)の上にこうちぎだけ着ていらつしやる。’(枕草子)

3.2 「なむ」係り結び 典型的な「なむ」係り結びにおいては、「なむ」と連体形が呼応し、「なむ」句が、主語の前に移動されるが、「なむ」句は、已然形と共起し(7)、場所句「この池に」の右側に置かれ、文頭に移動していない(8)。

(7) ...と なむ、仰事-ø あれ ば ‘...と、手紙が(8) この池に 水といふもの なむ 無くなる。‘この池に水というものが...と-K 手紙-N ある.C-ので あつたので’(枕草子)この池に水といふもの-K 無くなる.A なくなる。’(枕草子)

3.3 「や」「か」係り結び まずは、「や」から。典型的な「や」係り結びにおいては、「や」と連体形が呼応し、「や」句が、主語の前に移動されるが、「や」句は、已然形と共起し(9)、場所句「ここに」の右側に置かれ、文頭に移動していない(10)。

(9) 業遠の朝臣の車のみ や、... いささかさること-ø なかりけれ。 (10) ここに、『草の庵』や ある

業遠の朝臣の車のみ-K 不愉快なこと-N なかつた.C ここに 『草の庵』-K ある.A

‘なりとおの朝臣の車だけが、...不愉快なことがなかった。’(枕草子) ‘ここに、『草の庵』があるか?’(枕草子)

続いて、「か」。典型的な「か」係り結びにおいては、「か」と連体形が呼応し、「か」句が、主語の前に移動されるが、(11)においては、「か」句が、文頭になく、目的語が、文頭に移動されている。

(11) 草の庵を 誰 か 尋ねむ (草の庵を 誰-K +訪ねてくるだろう.A) ‘この家を誰が訪ねてくるだろう’(枕草子)

3.4 「こそ」係り結び 典型的な「こそ」係り結びにおいては、「こそ」と已然形が呼応し、「こそ」句が、主語の前に移動されるが、「こそ」句は、連体形と共起し(12)、場所句「まろがもとに」の右側に置かれ、文頭に移動していない(13)。

(12) 放ちたる息など こそ、... しほたる に

放つ息など-K 涙がこぼれる.A-のに ‘放つ息など、...涙がこぼれるほどなのに’(枕草子)

(13) まろがもとに、いと をかしげなる 笙の 笛こそ あれ。 ‘私のところにととても素敵な

私のところに ととても 素敵な 笙の 笛-K ある.C 笙(しょう)の笛がある。’(枕草子)

4. 議論: 以上のデータは、(4)の研究課題に答えるのに役立つ。(4a)に対する回答は、肯定的である。「ぞ」以外の係り結びにおいても、非標準的係り結びの例が存在するからである。具体的には、「なむ」、「や」、「か」、「こそ」係り結びにおいても、呼応する活用形が標準的係り結びの場合と異なることがあり、また、係助詞を伴う句が、文頭に移動せず、基底生成された場所にいるままの例も存在する。(4b)に対する回答は、次のようになるであろう。実は、係り結び現象は、より一般的な現象の一つに過ぎないということである。つまり、係助詞を伴う句は、強調表現のように振る舞い、文頭に移動し、強調の機能を果たす傾向があるが、強調表現は、係助詞を伴うことだけでも、その機能が果たされている。したがって、係助詞を伴う句が、文頭に移動しない例が存在しても、まったく不思議ではない。さらに、多くの場合、一定の係助詞と述語活用形に一致が見られるが、それが無い例も存在し、これは、係助詞と活用形は、連動したものではないことを示唆している。このことから、非標準的係り結びの例は、係助詞を含む文はより一般的な強調表現の一部であり、文中に特定の係助詞が存在すること、述語が特定の活用形を取ることは、二つの独立した要素であるということを示している。



参照文献:

- Ikawa, Hajime (1998) “On Kakarimusubi in Old Japanese: A Possibility under Generative Grammatical Perspective,”
Journal of Japanese Linguistics 16, 1–38.
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』, 岩波書店, 東京.
- Maki, Hideki, Mayuko Ikeda and Yuina Inoue (2024) “What do Non-Standard Zo-Kakarimusubi Examples in Old Japanese Suggest?,” ms., Gifu University.



[P-2]

組み合わせ範疇文法を用いた英文の平均長の解析

鈴木岳人（高千穂大学）・水口毅（大阪公立大学）

言語を数学的・物理的に取り扱う研究は近年進められているが[1, 2]、自然言語の文法を考慮した取り扱いはまだほとんどなされていない。本研究では、各単語に統語範疇（品詞）を割り当て、かつそれらの文法的な組み合わせもまた範疇を構成すると解釈して文の成立を説明する組み合わせ範疇文法（Combinatory Categorical Grammar, CCG）[3]を用いたモデルにより、文長（文を構成する単語数） L の分布を調べた。CCGは名詞（N）、名詞句（NP）、及び文（S）という3つの基礎的な範疇、そして演算 $/$ と $\backslash$ の組み合わせのみですべての範疇を表現するものである。 A/B は後に範疇Bが来ると範疇Aになるものであり、 $A\backslash B$ は前に範疇Bが来ると範疇Aになるものである。例えば自動詞ならば前に名詞句が来れば文になるので $S\backslash NP$ と書ける。なお、以下では A/B のような演算で表現されたものも一つの範疇とみなす。そのため範疇の数はN, NP, Sの3つより多くなるが、自然な言語に対しては有限個数で十分である。

加えて、合成規則（連続する範疇が別の範疇へ変形される）と型繰り上げ規則（範疇を拡張して合成規則の適用範囲を広げる）を仮定する。文頭から文末までこれらの規則を適用して範疇Sへの変形が可能であれば、文法的な文が生成されたと考える。

本研究の重要な点は、 i を自然数として、「文頭から i 番目までの単語列をまとめた範疇」と、「文頭から $i+1$ 番目までの単語列をまとめた範疇」を数学的に結び付ける手法を見出したことである。具体的には、前者と後者をつなぐ量（以下 G と呼ぶ）及びそれらの間の計算規則を見出すことができたのである。ここで見出した計算規則を順次用いることにより、「文頭から任意の数までの単語列をまとめた範疇」を、文頭の範疇のみを用いて記述できた。かつ、文法的に可能なすべての範疇の並び方のパターンも網羅することに成功した。

CCGは多くの言語に適用可能であるが、本発表では英語に限定する。そして文頭は必ず冠詞であることを仮定した。そのため命令文などは扱えないが、まずは簡単な仮定から始める。上述の G を用いて、まず英語において文長 L を決めた時の範疇の並び方の全パターンを得た。また G を応用することで、文長が L となる確率も得られた。両結果から L の平均値、すなわち英語の一文の単語数の平均も得、およそ10という結果を得た。これは観察事実に近いものの、わずかに少ないようである[4]。この差は、命令文や並列表現など今回取り扱っていない範疇の並び方が若干存在していることによると考えられる。

4. 参考文献

- [1] T. Yamamoto *et al.* (2021), Eur. Phys. J. B, 94, <https://doi.org/10.1140/epjb/s10051-021-00210-y>
- [2] K. Nakaishi, and K. Hukushima (2022), Phys. Rev. Res., 4, 023156, <http://doi.org/10.1103/PhysRevResearch.4.023156>
- [3] Steedman, M. (2001), The Syntactic process
- [4] Dederick, T.他（2000）：北陸大学紀要、24, 193-203



[P-3]

フィジー語の二種の他動化した名詞抱合

岡本 進（東京外国語大学／国立民族学博物館）

フィジー語（オーストロネシア語族、マラヨ・ポリネシア語派、オセアニア諸語）の名詞抱合は、動詞と目的語が一つの複合語を形成する、自動詞化プロセスとして記述されてきた（Mithun 1984, Dixon 1988, Gerds 1998 など）。(1a) は名詞抱合、(1b) はそれに対応する他動詞文である（以下はすべてバトゥレ方言の例、名詞抱合内の動詞と名詞の境界を + で示す）。(1a) の名詞抱合において、動詞は他動詞接尾辞を欠いており、目的語名詞は冠詞と共に起していない。本研究の目的は、フィジー語には (1a) のような自動詞の名詞抱合に加えて、他動化した名詞抱合も存在することを示し、その諸特徴を記述することである (2), (3)。

- (1) a. *laga+here* b. *laga-ji-a* *na* *here*
 歌う+歌 歌う-他動詞-3 単 冠詞 歌
 「彼は歌歌いする」 「彼は歌を歌う」
- (2) *mahi+baji-ni-a* *na* *kwāhewa*
 磨く+歯-他動詞-3 単 冠詞 子ども
 「子どもの歯を磨いた (lit. 子どもを歯磨きした)」
- (3) *vā-kana+ika-ni-a* *na* *kwāhewa*
 使役-食べる+魚-他動詞-3 単 冠詞 子ども
 「子どもに魚を食べさせる (lit. 子どもに魚食べさせる)」

(2) と (3) はともに名詞抱合に他動詞接尾辞が付加され、抱合名詞とは別に新しい目的語を取っているという点で、他動化した名詞抱合といえる。しかしその一方で、両者は性質の異なるプロセスである。前者を「所有者昇格タイプ」、後者を「使役タイプ」と呼ぶ。

(2) の所有者昇格タイプでは、抱合される名詞は身体部位に限られ、新しい目的語はその所有者名詞に限られる。(2) では抱合名詞 *baji* 「歯」と新しい目的語 *kwāhewa* 「子ども」の間に所有関係がある。これは「子どもの歯」の所有者「子ども」を目的語に昇格させるプロセスであると分析できる。

使役タイプでは他動詞接尾辞だけでなく接頭辞 *vā-* が付く。新しい目的語は被使役者 (causee) に相当する。(3) は自動詞 *kana+ika* 「魚食べる」が「魚食べさせる」に使役化したもので、*kwāhewa* 「子ども」が「魚を食べる」という動作を行う。所有者昇格タイプとは異なり、抱合名詞と新しい目的語との間に所有関係は必ずしもあるとは限らない。

Mithun (1984) は、通時的に名詞抱合は自動詞的な複合語から、目的語を取る他動詞へと発展するという仮説を提示している。従来 (1) のような自動詞的な名詞抱合しか報告されていなかったフィジー語でも、(2) や (3) のような他動化した名詞抱合があることを本発表は指摘する。これは Mithun (1984) の仮説を裏づけるものであり、類型論的に価値がある。



参照文献

- Dixon, R. M. W. (1988) *A grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Gerdts, D. B. (1998) Incorporation. In: A. Spencer and M. A. Zwicky (eds.) *The handbook of morphology*, 84-100. Oxford: Blackwell.
- Mithun, M. (1984) The evolution of noun incorporation. *Language* 60, 847-895.



[P-4] 普遍的な音象徴パターンとしての「韻律の長さ」と「対象物の強さ」の相関関係 杜 乃岩（梅光学院大学） 平田 歩（梅光学院大学）

音と意味の恣意的な関係は、人間の言語の基本的な特性の一つであると、長い間考えられてきたが (Saussure, 1915)、さまざまな語族からの証明により、その反対、つまり非恣意性 (音象徴とも呼ばれる) も重要であるという結論に至った (Blasi et al., 2016; Shinohara & Kawahara, 2010; Ohala, 1994; 他)。しかし、人間の言語の基本的な特性の一つとして非恣意性を分類する場合は二つの課題に直面する。一つは普遍性の欠如、つまり、ある言語に見られるつながりが別の言語に適用できないことが殆どであるということである。もう一つは用例の少なさ、つまり単一言語の全ての語彙の数を考えると、発見された用例は比例的とても小さいということである。そこで我々は、言語横断的なコーパス研究に基づいて、「韻律の長さ」が「対象物の強さ」の意味と相関しているという、一つの普遍的な音象徴のパターンを提案したい。

音象徴パターンの証明 Shih と Rudin の研究 (2016) によると、アメリカ式英語 (Mainstream American English) にはこのような相関関係が存在しているという。この調査ではアメリカの野球リーグ、メジャーリーグベースボール (Major League Baseball; MLB) 選手の登録名を基に 1920 年から 2017 年の間、450 打席以上を記録したすべての打者の名前を線形回帰分析した。2557 の名前含むこの大規模コーパスを分析した結果、分節音数 (number of segment, 「韻律の長さ」の指標) が、インプレー打率 (Batting Average on Balls In Play; BABIP、選手の「強さ」の指標) と正の相関があることが示されている ($p=0.089$; $p<0.01$)。

杜ら (2024) の研究をさらに発展させた本研究では、日本語 (共通語) にもこのような相関関係が存在する結果が得られた。アニメ「遊戯王☆5D's」(以下、遊戯王) を研究対象にした理由としては、日本アニメの制作過程を追跡することができ、非言語的要因の影響の有無や方向性が明らかになる可能性があるからである。またもう一つの理由として「遊戯王」では各キャラクターに、攻撃力、防御力、およびいくつかの特殊効果が設定されており、戦力 (「強さ」) によってキャラクターのレベルが設定されていることをあげる。本研究では登場したすべてのキャラクターとその出現頻度を調査し、作り上げた大規模コーパスを分析した結果、モーラ数 (「韻律の長さ」の指標) とレベル (キャラクターの「強さ」の指標) の間に正の相関関係があることが裏付けられた。先行研究でも同様の方法を採用し、ポケモンなどのアニメを研究対象にした調査があるが (Kawahara et al., 2018; Nakamura et al., 2024; 他)、ポケモンにおけるこのような発見は、統計分析を行う際の独立性 (independence) の仮定に反している。つまり同一の起源から進化するキャラクターの場合、本質的にキャラクター同士につながりがあるという点を考慮する必要がある。このようなことから本研究ではキャラクターの独立性にも着眼点を置き、進化しないキャラクターが登場する「遊戯王」を用いた。

遊戯王による結果 分析した項目の総数は 1813。図 1 はキャラクターのレベルが韻律 (モーラ) の長さに与える影響を示している。線形回帰直線は相関が正であることを示しており、これは Non-Parametric Spearman Correlation Analysis によって有意であることが証明された ($\rho = 0.39$, $p < 0.01$)。「遊戯王」は 5 つの章に分かれており、各章の間でのレベル分けの矛盾がある恐れがある。そのため、今回の研究ではすべての章に対して同じ分析を実行した。結果は図 2 にまとめており、すべての相関関係は正であり、有意である (第 1 章: $\rho=0.30$, $p < 0.01$; 第 2 章: $\rho=0.38$, $p < 0.01$; 第 3 章: $\rho=0.39$, $p < 0.01$; 第 4 章: $\rho=0.40$, $p < 0.01$; 第 5 章: $\rho=0.38$, $p < 0.01$)。

結論 アメリカ式英語と日本語 (共通語) からの言語横断的な発見は、「韻律の長さ」と「対象物の強さ」の相関関係が音声の象徴のパターンであることを裏付けている。

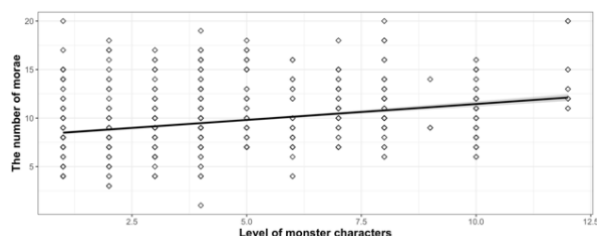


図1: 線形回帰直線による「モーラの数」と「レベル」の分布

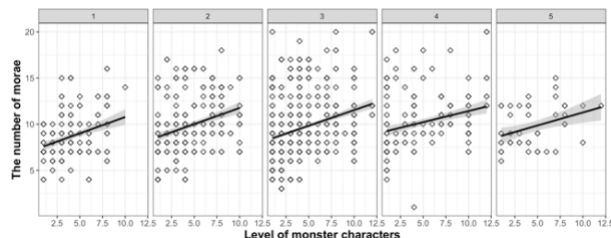


図2: 章別線形回帰直線による「モーラの数」と「レベル」の分布

参考文献

- Blasi, D. E., Wichmann, S., Hammarström, H., Stadler, P. F., & Christiansen, M. H. (2016). Sound–meaning association biases evidenced across thousands of languages. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 113(39), 10818–10823.
- De Saussure, F. (1915). *Course in general linguistics*. New York: McGraw Hill.
- Kawahara, S., Noto, A., & Kumagai, G. (2018). Sound symbolic patterns in Pokémon names. *Phonetica*, 75(3), 219–244.
- Nakamura, T., Gennami, Y., & Yoshikane, A. (2024). Analysis of Sound Symbolism Appears In JoJo's Bizarre Adventure. *2024 Joint 13th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 25th International Symposium on Advanced Intelligent Systems (SCIS&ISIS)*, 1–4.
- Ohala, J. J. (1994). The frequency code underlies the sound-symbolic use of voice pitch. *Sound Symbolism*, 2, 325–347.
- Shih, S. S., & Rudin, D. (2021). On sound symbolism in baseball player names. *Names*, 69(1), 1–18.
- Shinohara, K., & Kawahara, S. (2010). A cross-linguistic study of sound symbolism: The images of size. *Proceedings of Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 36(1), 396–410.
- 杜 乃岩、平田 歩、張 士毅. (2024). 遊戯王のネーミングにおける音象徴のパターン — モンスターの名前とレベルの相関関係について — 日本言語学会第169回大会要旨集.



[P-5]

日本語諸方言におけるアクセント核の無声化生起率への影響

邊姫京（国際教養大学）

背景 東京方言で無声子音に挟まれた狭母音/i, u/は通常無声化する。『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016、解説編 22 頁）では上記の環境であっても後続拍が摩擦音と狭母音の場合や、無声化拍にアクセント核（＝ア核）が置かれた場合は無声化が起こりにくいとしている。ア核の無声化生起率への影響について平山は『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』の解説（1966 初出、1998 改稿）で、無声化は共通語化により全国的に増加傾向にあるが（138 頁）、首都圏の若い世代では無声化拍にア核を置く発話が増えており、そのため無声化が少なくなる傾向がある（148 頁）とした。一方、東京方言とはアクセント体系が異なる近畿方言では、東京と同じ語でも無声化拍にア核が置かれることがあるため無声化が起こりにくく、同方言においてア核は無声化を阻止する一因になっている（杉藤 1966、1969）。ただし、ア核による無声化への影響については、東京方言だけでなく（前川 1983、Nagano-Madsen 1994）、近畿方言においても反論があり（藤本 2004、邊 2011）、議論の余地がある。

検討内容 本研究は、アクセント核の無声化生起率への影響を検討したものである。具体的には、①典型的な無声化の環境（無声子音に挟まれた語中の狭母音）、②無声化拍にア核が置かれる環境における無声化生起率、③ア核の移動率、④ア核のままの発話と⑤ア核をずらした発話における無声化生起率を、20-30 代の東北方言（8 名）、関東方言（7 名）、近畿方言（6 名）話者を対象に分析した。これらの方言はそれぞれ共通語化が急速に進んだ地域、伝統的な無声化の地域、ア核の影響が大きいとされる地域の代表として取り上げた。

研究方法 調査語は、①と②を別々に用意した。①はアクセント体系が異なる近畿方言においてもア核の影響を受けない語から構成されている。先行子音と後続子音に破裂音、摩擦音、摩擦音、無声化母音に/i, u/、後続母音に狭母音、広母音を組み合わせた 36 語である。②は前後子音が摩擦音の場合を除く 32 語である。近畿方言では、共通語が期待される場面と地元語が期待される場面とで無声化の使い分けが行われていることが報告されている（邊 2017、2025）。そのため「全国」（NHK に出演して全国の人向けに話す）と「地元」（家族や地元の親しい友人に話す）の二つの場面を設定して発話してもらった。無声化の有無は音響分析（第 1 フォルマントの有無）により判定し、アクセント核の位置は筆者の聴覚判定に依った。結果は次の通りである。

無声化生起率	①無声化の環境		②ア核の環境		③ア核の移動率		④ア核のまま無声化した割合		⑤ア核をずらして無声化した割合	
	全国	地元	全国	地元	全国	地元	全国	地元	全国	地元
東北	91%	89%	66%	68%	19%	20%	59%	62%	94%	92%
関東	83%	80%	54%	51%	13%	14%	48%	44%	93%	94%
近畿	69%	57%	47%	36%	20%	15%	41%	32%	74%	57%

結果 目安として無声化生起率 8 割以上を無声化がほぼ規則的に起こる、6 割以上を無声化が目立つという印象を与える境界線とする（邊 2009）。①で東北と関東が 8 割を超え、近畿に場面による違いが見られるのは先行研究と同様の結果である。②はどの地域も①より無声化生起率が低く、ア核の影響が窺える。③は②環境におけるア核の移動率で、100%から引けばア核の保持率になる。④はア核を保持した語、⑤はア核をずらした語を分母にした場合の無声化生起率で、地域を問わず⑤よりも無声化生起率がかなり低く、ア核の影響が認められる。関東の場合、約 20 年前の吉田（2002）の研究で④に相当するア核のまま無声化する割合が 1 割程度であったことを考えると、本研究の 48%（吉田の方法で計算し直すと 4 割）は非常に高く、冒頭で述べた平山の無声化拍にア核があるために無声化が少なくなる傾向があるとした見解とは異なり、ア核のまま無声化する現状が示された。



参考文献

- NHK 放送文化研究所編 (2016) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』 NHK 出版.
- 杉藤美代子 (1966) 「無声母音とアクセント」『音声学会会報』 123, 4-7.
- 杉藤美代子 (1969) 「東京方言における無声母音について」『音声の研究』 14, 249-264.
- Nagano-Madsen, Y. (1994) Influence of accent and tone on the realization of vowel devoicing in Japanese: Analysis of a sentence database. Working papers 43, 104-107. Department of linguistics and phonetics, Lund University.
- 邊姫京 (2009) 「41 府県に見る狭母音無声化の世代差と地域差」『東京大学言語学論集』 28, 13-46.
- 邊姫京 (2011) 「京阪神における狭母音の無声化」『音声研究』 15-2, 23-37.
- 邊姫京 (2017) 「近畿方言話者における母音の無声化一言語意識と言語選択」『第 31 回日本音声学会全国大会予稿集』 96-101.
- 邊姫京 (2025) 「共通語と地域語の知覚における母音の無声化の役割—東北・関東・近畿の比較—」『国立国語研究所論集』 28, 127-149.
- 平山輝男 (1966) 「全日本の発音とアクセント」『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』 日本放送出版協会.
- 藤本雅子 (2004) 「母音長と母音の無声化の関係—東京方言話者と大阪方言話者の比較—」『国語学』 55(1), 2-15.
- 前川喜久雄 (1983) 「共通語における母音の無声化の確率について」『言語の世界』 1(2), 68-81.
- 吉田夏也 (2002) 「音声環境が母音の無声化に与える影響について」『国語学』 53(2), 34-47.



[P-6] Phonological Complexity of *Otsu-rui* i (-wi) in Old Japanese: from a Corpus-Based Approach

Chihkai Lin

National Taiwan University of Science and Technology

linchihkai@gmail.com

Introduction: This study investigates the phonological complexity of *otsu-rui* i (-wi) in Old Japanese by examining transcriptional patterns across five syllables: pwi, bwi, mwi, kwi, and gwi. Old Japanese exhibits eight distinct vowels, categorized into those without contrast /a, u/ and those with contrast: *kō-rui* 甲類 vowels /i₁, e₁, o₁/ and *otsu-rui* 乙類 vowels /i₂, e₂, o₂/. While *kō-rui* vowels demonstrate consistent reconstructions as /i, e, o/, *otsu-rui* vowels show substantial variation in proposed phonetic realizations across scholarly reconstructions.

Methodology: This study adopts a corpus approach by investigating phonograms for -wi rhymes in The Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ). The research examines 606 tokens of phonographically-transcribed -wi syllables according to their Middle Chinese 攝 *shè* ‘main rhyme category’ and specific rhyming patterns. For analytical purposes, only phonographically-transcribed instances (marked as PHON) are retained, while logographically-transcribed occurrences (marked as LOG) are methodologically excluded. Following selection, the phonograms undergo further analytical categorization to determine whether there exist overlapping or discrete rhyme distributions across the five target syllables: pwi, bwi, mwi, kwi, and gwi.

Results: Results reveal distinct distributional patterns across the 606 tokens analyzed. Labial-initial syllables (pwi, bwi, mwi) predominantly associate with 微 *wéi* rhyme (69% for pwi, 3% for bwi, 100% for mwi) and 脂 *zhī* rhyme (27% for pwi, 97% for bwi), while velar-initial syllables (kwi, gwi) primarily associate with 支 *zhī* rhyme (58% for kwi, 14% for gwi) and 之 *zhī* rhyme (38% for kwi, 86% for gwi).

Discussion: When correlating these distributional patterns with reconstructions by Li (1956), Pan (2000), and Baxter (1992), evidence suggests that *otsu-rui* -wi had allophonic variations conditioned by the preceding consonant. After labial consonants, it manifested as /i_j/ or /əi/ (more complex, potentially diphthongized realization), corresponding to the 微 and 脂 rhymes reconstructed variously as /əi/, /ij/, /i/, and /ij/ by the three scholars. After velar consonants, it appeared as /i/ or /ji/ (more centralized high vowel realization), aligning with the 支 and 之 rhymes reconstructed as /iə/, /ji/, /je/, /i/, and /i/. If a single unified reconstruction is required, /i/ with conditional allophonic variations would be the most plausible.

Conclusion: This study contributes to our understanding of Old Japanese phonology by demonstrating that phonological context significantly influenced the realization of *otsu-rui* vowels, providing a more nuanced framework for interpreting historical Japanese phonology.



References

- Li, Rong. 1956. *Qièyùn Yīnxì* [The Phonological System of *Qieyun*]. Beijing: Kexue Chubanshe.
- Pan, Wuyun. 2000. *Hànyǔ Lìshǐ Yīnyùnxué* [Chinese Historical Phonology]. Shanghai: Shanghai Jiaoyu Chubanshe.
- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Mouton de Gruyter.



In this paper, I investigate an interpretive restriction first noted by Polinsky et al. (2024) on free exceptive sluicing/FES in Japanese, as shown in (1). The *why*-sluice here, indicated by Δ , allows Reading 1, but not Reading 2. The question I address here is why Reading 2 – the *exceptive reading* (ER) – is blocked, as indicated in (1a, b).

- (1) Nagisa-igai-wa kinoo-no korokiamu-ni daremo konakatta-nda-kedo, boku-ni-wa naze Δ ka
 Nagisa-except-TOP yesterday-GEN colloquium-to no.one didn't.come-COP-but I-DAT-TOP why Q
 mattaku wakaranai-yo.
 at.all don't.know-SFP
 'Except Nagisa, no one came to the colloquium yesterday, but I don't know at all why Δ .'
 OK **Reading 1: ...but I don't know why no one came except Nagisa.**
 a. Taiteino insei-wa hobo maisyuu tyanto kuru-ndakedo-naa.
 most graduate.student-TOP almost every.week regularly come-though-SFP
 'Most graduate students regularly participate in colloquia every week.'
 * **Reading 2: ... but I don't know why Nagisa came.**
 b. Hudanwa kanozyo korokiamu-ni-wa mattaku konai-nda-kara.
 normally she colloquium-to-TOP at.all won't.come-COP-because
 'Normally, she doesn't come to colloquia at all.'

Note that the ER is available when the intended meaning is expressed verbally, as in (2), which indicates that the reading is rendered impossible by some syntactic constraint. This point is also independently supported by the fact that FES in English readily allows the ER, as in (3) (Merchant 2001; Rudin 2019; Stockwell and Wong 2020).

- (2) Nagisa-igai-wa kinoo-no korokiamu-ni daremo konakatta-nda-kedo, boku-ni-wa
 Nagisa-except-TOP yesterday-GEN colloquium-to no.one didn't.come-COP-but I-DAT-TOP
 naze [Nagisa-ga kita-no-ka] mattaku wakaranai-yo.
 why Nagisa-NOM came-Q-Q at.all don't.know-SFP
 'Except Nagisa, no one came to the colloquium yesterday, but I don't know why Nagisa came to the colloquium.'
 (3) Nobody liked the movie, except John, but I don't know why.
Reading 1: ...I don't know why nobody liked the movie, except John. (People usually like trashy movies.)
Reading 2: ...I don't know why John liked the movie. (He usually likes George Clooney.) (Stockwell and Wong 2020:169)

Developing the suggestion hinted at by Polinsky et al. (2024), I propose that the interpretive contrast above follows from the different syntaxes underlying *exception*; the structure involving the exceptive head is realized through coordination in English, but through subordination in Japanese. It is well documented that FES in English has a full-fledged TP, as in (4), which represents coordinating conjunction coordinating the main clause and the exceptive clause. The ER reading is derived when the hidden TP in the exceptive clause serves as the antecedent for the *why*-sluice. I propose that FES in Japanese can also have the same clausal base, but is shielded by the covert NP layer, as in (5), which syntactically creates subordinating conjunction for the exceptive clause.

- (4) Nobody liked the movie, except [_{FocP} John [_{Foc'} Foc [_{TP} ~~John liked the movie~~]], but I don't know why [_{TP} ~~John liked the movie~~].
 (5) [_{NP} $\emptyset_N$ [_{FocP} Nagisa [_{Foc'} [_{TP} ~~pro korokiamu ni kita~~]] [_{Foc}]]] igai-wa kinoo-no korokiamu-ni-wa daremo konakatta-nda-kedo, ...

Independent evidence for the NP layer comes from (6–7). (6) shows that the adjectival inflection within the complement of *igai* 'except' selects the attributive *na*, not the conclusive *da*, suggesting the presence of the nominal layer. Similarly, (7) shows that the genitive subject may occur within the complement of the exceptive head, a further indication for the nominal structure. Given this independent assumption, the impossibility of the ER in FES in Japanese, as shown in (1), follows from the independent generalization that a subordinate clause cannot antecede sluicing, as illustrated in (8).

- (6) Kono hoteru [kyakusitu-ga kirei-{***da/na**}] -igai-wa taisitatokorowanai-yo-ne.
 this hotel guest.room-NOM beautiful-PRES/ADNOM-except-TOP nothing.in.particular-SFP-SFP
 'Except that the guest rooms are beautiful, this hotel does not have much to expect.'
 (7) Kentee-wa tokuni sadame-{**ga/no**} aru-igai-wa gozen kuzi kaisi-desu.
 qualification.test-TOP specifically specification-NOM/GEN be-except-TOP am 9 start-COP.HON
 'Unless otherwise specified, our qualification test starts at 9am.'
 (8) # [Riko-ga daizina kaigi-ni okureta-kara], Kota-wa okotteiru-noda-ga, boku-ni-wa naze Δ ka wakaranai.
 Riko-NOM important meeting-to late-because Kota-TOP angry-COP-but I-DAT-TOP why Q don't.know
 'Kota is angry because Riko was late for the important meeting, but I don't know why Δ (=she was late for the meeting).'

I end this paper by exploring cross-linguistic implications of my coordination vs. subordination parameter analysis for the syntax of FES in Malagasy, Mandarin, Indonesian, Italian, Javanese, and Poshkart Chuvash.



References

- Merchant, J. 2001. *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- Polinsky, M., H. Kurokami, & E. Potsdam. 2024. Exceptive constructions in Japanese. In M. Koizumi (ed.), *Issues in Japanese psycholinguistics from comparative perspectives, Vol. 2: Interaction between linguistic and nonlinguistic factors*, 275–310. Berlin: Walter de Gruyter.
- Rudin, D. 2019. Head-based syntactic identity in sluicing. *Linguistic Inquiry* 50: 253–283.
- Stockwell, R., and D. J.M. Wong. 2020. Sprouting and the structure of *except*-phrases. In M. Asatryan, Y. Song, and A. Whitmal (eds.), *NELS 50, vol. 3*, 169–182. Amherst, MA: GLSA.



[P-8]

準体句の派生と主名詞につく助詞「の」の分類について

黒崎まひろ（南山大学大学院博士前期課程）

古代日本語には、(1) 下線部のように、用言の連体形を名詞句のように用いる準体句という構文がある。

- (1) 手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし (源氏・夕顔)

準体句には意味が異なる4種類があるが、形態的特徴に基づく分類を試みた石垣(1955)や近藤(2000)では、準体句の意味についての議論が不十分である。本研究は、4種類の準体句の派生を示し、形態的な区別が難しい準体句についても意味の違いを明確にする。

石垣(1955)は、準体句を、事象を表す作用性名詞句と、モノ・ヒトを表す形状性名詞句の2種類に分類し、作用性名詞句の場合、準体句内部の連体部分は動作動詞(石垣の用語では作用性用言)だと指摘する。近藤(2000)はさらに形状性名詞句を消去型・追加型・残存型の3種類に分類した。消去型には主名詞が存在せず、追加型では主名詞が属格助詞「の」を伴って現れ、準体句末尾に主名詞を再出させて解釈する。残存型では主名詞が元の格形を保って現れる。

しかし近藤の分析では、ノ格を持つ要素が準体句中で主語として振る舞う場合、「の」がその準体句中の主格を保ったものなのか、同格を表す属格助詞として現れたものなのか曖昧になると予測される。しかし、この形を取る(2)は追加型の解釈しかできない。これは、近藤が提案する形態的特徴だけでは完全な分類ができないことを示している。

- (2) 女君のいとうつくしげなる生まれたまへり (源氏・橋姫)

本研究では、顕在的な主名詞が「の」を伴って現れ得る形状性名詞句の残存型と追加型、および作用性名詞句の3つの分類について、発生時期の違い、現代語との対応、似た意味を持つ他の古代語の構文との対応に着目して考察する。

まず残存型について、この準体句のみ中古以降に発生した(近藤2000)。同時期にwh疑問文におけるwh移動の消失という言語変化が起きているが、Watanabe(1992、2002、2005)は、上代と中古でCの素性が変化したため、中古以降は現代日本語と同様にwh演算子の移動が義務的ではなくなったことが原因で、同構文が発生したと主張した。このことから、残存型は、同時期に起こった義務的なwh移動の消失に伴い、主要部内在型関係節が認可されたことで出現したと考え、主要部内在型関係節の派生と並行的な以下の派生と構造をもつと提案する。

- (3) 残存型は主要部内在型関係節の一種であり、主節動詞から選択される内在主辞NPと同一指標の空演算子opがTP内部からCP指定部に非顕在的に移動し、その空演算子opとCとの一致が起こることで認可される。

- (4) $[_{NP} [_{CP} op_i [_{C'} [_{TP} NP_i [_{T'} [_{VP} \dots t_i \dots] T]] C]] n]$

次に作用性名詞句について、青木(2005)は、「太郎は飛行機がふもとに墜落するの／*ことを見た。(橋本(1990: 112))」のような、現代語において文の名詞化が含まれるノ専用文と作用性名詞句が一致すると指摘する。作用性名詞句は上代から存在するため、残存型のようなTP内部からの要素の移動を伴わない次のような構造を持つと考えられる。

- (5) 音形を持たない名詞化辞nによってCPが名詞化される。

- (6) $[_{NP} [_{CP} [_{TP} NP_i [_{T'} [_{VP} \dots t_i \dots] T]] C] n]$

最後に追加型について、鈴木(2008)は追加型を同格構文の一種であると分析し、その中でも「の」の後項が前項に規定的意味をかさねる、(7)のような累加属格を伴う構文の一種であると主張している。

- (7) 契り深くて語らふ人の、末までなかよき人かたし (枕草子)

これらの鈴木(2008)の観察を元に、追加型は次のような構造をもつと考える。(9)で、埋め込みのNPは消去型にあたる。

- (8) 主名詞と、主名詞と同一指標の代名詞proを持つ消去型準体句が繋がれ、全体でひとつの名詞句を構成する。

- (9) $[_{NP} NP_{i-GEN} [_{NP} [_{TP} \dots t_i \dots] pro_i]]$

以上、本研究では、準体句に現れる「の」の網羅的な分類を行うとともに、先行研究では明示されていなかった各構文の具体的な派生を、形態的、意味的、歴史的特徴に基づき提案した。



参考文献

- 青木博史 (2005) 「複文における名詞節の歴史」、『日本語の研究』 第 1 巻 3 号、pp.47-60
- 橋本修 (1990) 「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」、『国語学』 163 集、pp.101-112
- 石垣謙二 (1955) 「作用性用言反撥の法則」、『助詞の歴史的研究』、岩波書店、pp.215-238
- 近藤泰弘 (2000) 「中古語の準体構造について」、『日本語記述文法の理論』、ひつじ書房、pp.329-354
- 鈴木浩 (2008) 「『同格』考：『太刀のをかしき』型名詞連結体の文法論的的定位」、『実践女子短期大学紀要』 第 29 号、pp.81-93
- Watanabe, Akira (1992) “Subjacency and S-Structure Movement of Wh-in-Situ”, Journal of East Asian Linguistics, Vol. 1, No. 3, pp.255-291
- Watanabe, Akira (2002) “Loss of Overt Wh-Movement in Old Japanese”, David W. Lightfoot ed. Syntactic Effects of Morphological Change, pp.179-195
- 渡辺明 (2005) 「古代日本語の WH 移動」、『ミニマリストプログラム序説—生成文法のあらたな挑戦—』、大修館書店、pp.67-88

参考資料

コーパス検索アプリケーション『中納言』、日本語歴史コーパス CHJ



聞き手に対して呼びかける表現である呼称は、様々な言語で研究されてきた。現代中国語の呼称を扱う研究は、中国語学やアジア言語のイン/ポライトネス研究および社会言語学の分野においてなされてきた（大河内 1958, Kádár and Pan 2011, 丁 2016, 薛 2024）が、その多くは対人配慮表現としての慣習的な用法の記述に重点を置くものであり、発話の中での位置に注目した上で、実際の用法を大量かつ詳細に調べたものではない。唯一の例外は劉（2016）で、テレビ番組の会話に現れる呼称の位置と機能について会話分析的観点を用いて分析しているものの、順番交替に関わる要素以外への言及は十分でない。また、通言語的に適用可能な理論的枠組みを用いて詳細に分析する試みは少ない。中国語の呼称は、主に発話の始めと終わりに現れるため、Beeching and Detges (2014) の提唱した周辺部研究の枠組みを用いて分析できる。そこで、本研究ではこの枠組みを用いて、以下の2点を明らかにすることを目指す：①中国語の呼称は発話内のどの位置に現れるのか、②中国語の会話において呼称はどのような機能を持つのか。

本研究のデータには中国語のミステリードラマの合計10話分を用いた。データから収集された537例の呼称を対象に、2種類の調査をした。まず発話における位置を調査した結果、表1の通り、左周辺部（発話の始め）に326例、右周辺部（発話の終わり）に39例、それ以外の位置（呼称が2つ以上の発話と関わる「中間部」と呼称が単独で用いられる「単独」、そして「その他」）に172例が現れた。次に前述の調査で左周辺部もしくは右周辺部に現れた365例を対象に、共起する発話の機能を調べた。機能の分類には、合計20の分類カテゴリを用いた。カテゴリ作成には、会話分析で用いられる概念である隣接ペア（Schegloff and Sacks 1973, Schegloff 2007）を援用した。分類の主要な結果は2点ある。1点目は、呼称の位置を問わず、隣接ペアの第一部分に属する機能（例えば、「申し出」）が、第二部分に属する機能（例えば、前述の「申し出」と対になる「承諾」や「拒絶」）よりも用例数が多かったことである。2点目は、特に用例数が多い機能として「提案・要求・忠告」と「情報の要求」が挙げられ、呼称の位置を問わず同様の結果となったことである。これらは共に行為指示型（directive）と呼ばれ、「人に何かをさせる」機能を持つ。以下の(1)と(2)は、実際の発話の例である。(1)の普普は右周辺部、(2)の朝陽は左周辺部に位置する呼称で、前後の発話がそれぞれ「提案・要求・忠告」と「情報の要求」に分類された。

表1 呼称の位置の分類カテゴリと分類結果

- (1) 吃 吧 普普。
食べる 語気助詞 普普
「食べろよ、普普。」
- (2) 朝阳 你 家里 有 相机 吗？
朝陽 2 家 中 ある カメラ 語気助詞
「朝陽、お前の家にカメラはあるか。」

位置	合計
左周辺部	326
右周辺部	39
中間部	51
単独	118
その他	3
合計	537

分析の結果、中国語の呼称は発話の左周辺部と右周辺部のいずれにも現れることが実際のデータでも確認された。また、用例数の面で左周辺部は右周辺部を大幅に上回った。さらに、共起する発話は呼称の位置に関わらず、隣接ペアの第一部分に属し「人に何かをさせる」機能を持つものが多いことがわかった。

本研究は、先行研究における説明に周辺部研究という理論的枠組みを用いて裏付けを与え、同時に周辺部研究においてもまだあまり研究されていない中国語の呼称を扱う点で新奇性が高い。また、調査にあたって実際の例を大量かつ詳細に分析しており、その過程で会話分析的な観点も加えてデータを検討している。

参照文献

- Beeching, Kate and Ulrich Detges (2014) Introduction. In: Kate Beeching and Ulrich Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, 1-23. Leiden: Brill.
- Kádár, Z. Daniel and Yuling Pan (2011) Politeness in China. In Daniel Z. Kádár and Sara Mills (eds.) *Politeness in East Asia*, 125-146. New York: Cambridge University Press.
- 刘运同 (2016)「称呼语的位置与功能」『互动语言学与汉语研究』2016(1): 326-339. [劉運同 (2016)「呼称語の位置と機能」『互動語言学与漢語研究』2016(1): 326-339.]
- 大河内康憲 (1958)「中国語における呼語の性格」『中国語学』1958(81): 3-11.
- Schegloff, A. Emanuel (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, A. Emanuel and Harvey Sacks (1973) Opening Up Closings. *Semiotica* 8(4):289-327.
- 薛鳴 (2024)『「関係」の呼称の言語学：日中対照研究からのアプローチ』東京：ひつじ書房.
- 丁尚虎 (2016)「呼称語の機能と対人関係による使用制限：日中対照の視点から」『国際文化研究』22: 113-125.



[P-10] フィンランド語の話し言葉における「受動形」を使用した用法の再分析

小林真緒 (東京外国語大学大学院 博士前期課程)

mao.lehikko.03@gmail.com

0. はじめに

本発表ではフィンランド語の話し言葉における「受動形現在」(諸異形態の代表形は -TAV_n とし、以下「受動形」と呼ぶ)の用法をコーパスを用いて分析する。フィンランド語の「受動形」には多様な機能があるが、これまで能動用法とされてきたいくつかの機能はむしろ不定人称 (agent-defocusing) の用法であることを示す。

1. 先行研究

フィンランド語の話し言葉における「受動形」の用法は、A) 不定人称用法、B) 能動態 1 人称複数用法、C) 勧誘用法の 3 つに分類される (VISK § 1313, 1326, 1654)。B として用いる場合には、主格の 1 人称複数代名詞と共に起るのがふつうである (VISK § 1272)。しかし、この代名詞の主語が常に繰り返されるわけではなく、主語のない文でも「受動形」の動作主を特定可能な 1 人称複数であると解釈できる場合もある (VISK § 1326)。一方、C の場合、主語を示す人称代名詞はふつう現れない (VISK § 1654)。先行研究においては、B, C の用法では空主語として動作主である主格の 1 人称複数代名詞を補うことができるので能動態であり、受動態である不定人称用法には属さない (VISK § 1315, 1331; Shore 1988) とされてきた。

2. 調査方法

The Helsinki Korp Version of Samples of Spoken Finnish (以下 SKN とする) において、検索式を用いて品詞分類において動詞であり、形態分析では「受動形」(直説法・受動態・現在時制)であるトークンを検索する。検索された 2811 例のうちランダムに取り出した 300 例から否定動詞を伴う例等 68 例を取り除いた 232 例を調査対象として分析を行った。

3. 調査結果

- (1) *me takaisin vie-dään mutta kotona (?me) se syö-dään.*
 PRO.1PL.NOM back take-PASS.PRS but at.home (?PRO.1PL.NOM) it.NOM eat-PASS.PRS

「私たちは持ち帰って、家でそれを食べる」(SKN15b_Rautu/Kaakkoismurteet/1982, 発表者一部改変)

① 先行研究では(1)の後半部分において、主格の *se* が存在するものの、意味上の動作主である 1 人称複数空主語として補うことができるとしていた。しかし実際には意味上の動作主が 1 人称複数ではなく、統語的にも先行する主語 ((2)では 3 人称単数)を受け継いでいるとみられる例が見いだされる。

- (2) *kun lääkäri rupes-i, kun (*se) verenpaine ote-taan*
 when doctor.NOM begin-PST.3SG when (*PRO.3SG.NOM) blood.pressure.NOM take-PASS.PRS

「医者が始めるとき、血圧をとるとき…」(SKN27a_Velkua/Lounaismurteet/1986, 発表者一部改変)

② 次に、「受動形」の動作主が明示的な 1 人称複数代名詞の主語で示されていないが、意味上の動作主は明らかに定の 1 人称複数である例も見いだされた。

③ さらに勧誘用法であるのに、1 人称複数でない先行する主語 ((3)では 3 人称単数 (あるいは複数))を統語的に受け継いでいる例が見いだされた。ここでも統語的な空主語として 1 人称複数代名詞を補うことはできない。

- (3) *poika puhu-i että (*me/se/ne) polte-taan se.*
 boy.NOM speak-PST.3SG that (*PRO.1PL.NOM/PRO.3SG.NOM/PRO.3PL.NOM) fire-PASS.PRS it.NOM

「少年はそれを燃やそうと話した。」(SKN50b_Eurajoki/Lounaismurteet/2000, 発表者一部改変)

4. 結論

本発表ではコーパスにより得た例を前後の文脈も含めて深く検討し、主語のない「受動形」の文について意味上の主語を丁寧に分析した。さらに 1 人称複数代名詞以外の主格項が出現する文の存在も指摘し、先行研究の仮定する「1 人称複数代名詞の空主語」が成立しない条件を明らかにした。これによって本発表では統語的観点からみた「受動形」の不定人称用法と能動用法の正しい境界を次の位置に修正することができた。

	先行研究	本発表
人称活用	能動用法	能動用法
同一節中に主格の 1 人称複数代名詞を伴う受動形 (動詞の前方に他の項を持たない)	能動用法 (空主語)	不定人称用法 (agent-defocusing)
同一節中に主格の 1 人称複数代名詞を伴う受動形 (動詞の前方に他の項を持つ)		
1 人称複数代名詞を伴わない受動形		
勧誘用法		
不定人称用法	不定人称用法	

参考文献

Shore, Susanna (1988) On the so-called Finnish passive. *Word* 39(3): 151-176.

VISK = Vilkuna, Maria (eds.) (2008) *Iso suomen kielioppi verkkoversio*. Helsinki: Kotimaisten kielten tutkimuskeskus.
<https://kaino.kotus.fi/visk/etusivu.php>. [accessed: 2025/03/13].

調査資料

SKN = Institute for the Languages of Finland (2014) The Helsinki Korp Version of Samples of Spoken Finnish [data set].
Kielipankki. <http://urn.fi/urn:nbn:fi:lb-2016042702> [accessed: 2025/03/13]



[P-11]

日本語におけるメタファーに基づく合成語の分類：

「方向音痴」「看板娘」の位置付けをめぐって

角出 凱紀

語は伝統的に単純語と合成語に分類され、後者は更に派生語と複合語に分類されてきた (e.g. 日本記述文法研究会 2010: 133-134)。本研究の目的は、日本語におけるメタファーに基づく合成語の分類を通して、この単純な二分法を破棄し、派生語と複合語が連続的であるという見方を提示することにある。本研究で扱う合成語は、「マドンナの」「水っぽい」「方向音痴」「看板娘」「投資バイブル」の5例である。このうち「マドンナの」及び「水っぽい」は、これらを構成する形態素である「-的な」と「-っぽい」が拘束形態素である (e.g. Sugioka and Ito 2016) ことから、派生語に分類される。

次に「方向音痴」については、一見すると「方向」と「音痴」という2つの自由形態素から構成されている。しかし、ここでの「音痴」は<〜が苦手である>といった比喩的な意味を表している。竝木 (2009a, 2009b) は、「音痴」がそのような意味を持つのは合成語の右側要素として使用されたときのみであると指摘している。実際、(1b) のように件の比喩的な「音痴」を自由形態素として使用した場合は非文となる。

(1) a. あいつに地図を持たせても方向音痴だから意味ないよ。

b. * あいつに地図を持たせても φ 音痴だから意味ないよ。

これと同じことが「看板」についても言える。つまり、「看板」が<人々の注意や関心と呼ぶ>といった比喩的な意味を持つのは合成語の左側要素として使用されたときのみである。

(2) a. 桃子はうちの看板娘です。

b. * 桃子はうちの看板 φ です。

その一方で、「バイブル」が<ある分野において権威ある書籍>という比喩的な意味を持つのは合成語の構成要素として使用されたときに限らない。(3b) のように、自由形態素として使用されたとしても、問題なく比喩的な解釈が可能である (cf. 角出 2024)。

(3) a. 株で成功するための秘訣がつまった投資バイブルが間もなく発売！

b. 株で成功するための秘訣がつまった φ バイブルが間もなく発売！

以上の観察から、「投資バイブル」における「バイブル」とは異なり、「方向音痴」における「音痴」及び「看板娘」における「看板」は純粋な自由形態素とは認められない。「音痴」や「看板」に見られる上記の特徴は、擬似接辞 (affixoid) のそれと類似している (e.g. Booij and Hüning 2014; Hüning and Booij 2014; Stevens 2005)。また、これらを擬似接辞と見なすことは、根源領域の要素が目標領域の要素に比べて概念的に依存するという言語的メタファーの制約 (Croft 1993; Sullivan 2013) とも整合するものである。したがって、「方向音痴」や「看板娘」は、派生語 (e.g. マドンナの、水っぽい) と複合語 (e.g. 投資バイブル) を両端に備えた連続体の中間に位置づける必要があると結論づけたい。

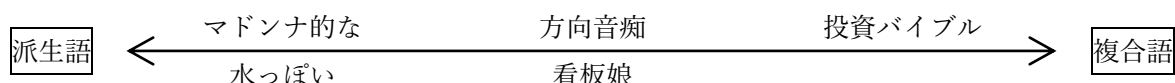


図. メタファーに基づく合成語の連続体

参考文献

- Booij, Geert, and Matthias Hüning. 2014. Affixoids and constructional idioms. In Ronny Boogaart, Timothy Coleman and Gijsbert Rutten (eds.), *Extending the Scope of Construction Grammar*, 77-105. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335-370.
- Hüning, Matthias, and Geert Booij. 2014. From compounding to derivation: The emergence of derivational affixes through “constructionalization”. *Folia Linguistica* 48(2): 579-604.
- 竝木崇康. 2009a. 「複合語の意味解釈における「意味要素の稀薄化」」, 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 139-158. 東京: くろしお出版.
- 竝木崇康. 2009b. 『単語の構造の秘密: 日英語の造語法を探る』 東京: 開拓社.
- 日本記述文法研究会. 2010. 『現代日本語文法 1: 第 1 部総論 第 2 部形態論』 東京: くろしお出版.
- Stevens, Christopher M. 2005. Revisiting the affixoid debate: On the grammaticalization of the word. In Torsten Leuschner, Tanja Mortelmans and Sarah De Groodt (eds.), *Grammatikalisierung im Deutschen*, 71-83. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Sugioka, Yoko, and Takane Ito. 2016. Derivational affixation in the lexicon and syntax. In Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*, 347-386. Boston/Berlin: Walter de Gruyter.
- 角出凱紀. 2024. 「名詞メタファーにおける関係名詞への転換の可能性—「バイブル」を対象としたコーパス調査を通して—」『言語科学論集』 (30): 143-158.
- Sullivan, Karen. 2013. *Frames and Constructions in Metaphoric Language*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.



[P-12]

「文の包摂」の対照研究に向けた予備調査 —日本語・英語・韓国語を比べよう！キャンペーン—

泉大輔（立教大学）daisuke.izumi7@gmail.com 細谷諒太（慶應義塾大学大学院）ryotahosoya@keio.jp

1. 目的と背景

本発表では、「幻のポケモンをもらおうキャンペーン」、「“Don't Text and Drive” campaign」、「끓고, 줄이고, 운동하자' 캠페인（「やめて、減らして、運動しよう」キャンペーン）など、「文の包摂」と呼ばれる言語現象のうち、特に名詞「キャンペーン（campaign, 캠페인）」を主要部とする日本語・英語・韓国語の例を考察の対象とする。通常、日本語と韓国語の名詞修飾構造では修飾要素は連体形で名詞に接続し、英語では文相当の要素は関係詞などを介して名詞を後置修飾するはずだが、上記の用例はその規則に反する。このような言語現象は「文の包摂」と呼ばれ（泉 2024）、その類例は古典語や諸言語でも広く観察される（泉 2025）。このような特異な「文の包摂」現象の記述研究は個別の蓄積はあるものの（細谷 2022、金 2020 など）、類型論的な研究はまだ進んでいない。本発表は、名詞「キャンペーン」を被修飾要素とする「文の包摂」現象が種々の言語で観察されることに着目し、まずは日本語、英語、韓国語の記述を行うことで、堀江（2021）をはじめとする名詞修飾構造の類型論的研究に資することを目指す。

2. 調査データと記述

『jaTenTen11』『enTenTen15』『koTenTen18』などのコーパスおよびウェブ上のテキストから日本語約 2,000 件、英語約 5,000 件、韓国語約 100 件の用例を収集した。以下、日本語・英語・韓国語のそれぞれに見られた「文の包摂」の修飾要素の特徴を記述する。

日本語

- ・動詞意志形を述語とする勧誘を表す文相当の要素が目立つ。例：朝食を食べようキャンペーン
- ・述語がなく、スローガンで用いられる希求を表すパターン（「A を B へ」「A に B を」など）が見られる。
例：「クレタ島を太陽光発電の島へ」キャンペーン
- ・感嘆符、疑問符、棒線（一）や波線（～）、音符（♪）や星（☆）などの記号が末尾に用いられ、表記的なバリエーションが豊かである。例：「ニッポンの食、がんばれ！」キャンペーン

英語

- ・平叙文や命令文の単文が多いが、一方で引用符内がカンマ（,）ダッシュ（-）コロン（:）などで前半と後半に分かれる構造を持つものも目立つ。
“Know Your Farmer, Know Your Food” campaign; “End the Drug War- No more Violence” campaign
“buy one, get one free” campaign; “Family Violence, it's Not OK” campaign
“Where's Baby – Look Before You Lock” campaign
- ・ハッシュタグ、空白、主節の省略などで、読み手の参加や連帯を促すものがある。
“I shop at Waitrose because _____. #WaitroseReasons” campaign; “If I Had Glass” campaign
- ・押韻や言葉遊びでキャッチーさを生んでいるものがある。
“iWorry: Say No to Ivory” campaign; “Business is GREAT Britain” campaign

韓国語

- ・日本語、英語に比べて収集できた用例数は少ないものの、前項の末尾には指定詞（“비상구는 생명의 문입니다” 캠페인）、命令形（“나도 잡아가라” 캠페인）、勧誘を表す形（끓고, 줄이고, 운동하자' 캠페인）などバリエーションがある。

3. 今後の課題・展望

本発表では「キャンペーン」を主要部とする日本語・英語・韓国語の「文の包摂」について上記の特徴があることが明らかとなった。今後は、日本語・英語・韓国語を含めて類例が観察される諸言語とも対照させながら考察を進めることで、名詞修飾構造の類型論的研究に貢献することを目指す。



参考文献

- 泉大輔（2024）『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』、ひつじ書房.
- 泉大輔（2025 予定）「日本語の語構成における逸脱—「文の包摂」を対象に—」『日本語用論学会第 27 回大会
発表論文集 第 20 号』.
- 金廷珉（2020）「韓国語の直接引用修飾節に関する一考察」、プラシヤント パルデシ・堀江薫（編）『日本語
と世界の言語の名詞修飾表現』、77-96.
- 細谷諒太（2022）「あるある的表現としての英語の句複合語」、東京大学言語学論集、44、39-59.
- 堀江薫（2021）「従属と非従属の類型論—語用論と構文の関係を中心に—」、堀江薫・秋田喜美・北野浩章『言
語類型論』、69-142、開拓社.



1. 日本語形容詞の意味研究の背景と課題

本研究はこれまでの日本語形容詞の意味研究における方法論を批判的に考察し、整理することを目的とする。分類に主眼を置いてきたこれまでの日本語形容詞研究における分類指標・意味要素に関し、各指標が実際に何を分類する指標（あるいは意味要素）であるかを整理した論考は少ない。その上で、本研究では、形容詞の語彙・構文レベルで観察可能な意味要素を特定し、それらに求められる操作的定義を再確認する。

2. 先行研究：意味分類を中心とした日本語形容詞研究

日本語形容詞の意味研究は西尾（1972）を端緒とし、属性形容詞と感情形容詞の分類が議論の中心にある。西尾は共起要素を分類指標に用い「客観的な性質・状態の表現をなすもの」（西尾, 1972: 21）である属性形容詞と「主観的な感覚・感情の表現をなすもの」（西尾, 1972: 21）である感情形容詞に分類した。西尾の分類を発展させた研究には荒（1989）、奥田（1996）、樋口（1996, 2001）、八亀（2003, 2008）がある。特に、一連の研究を取り入れた八亀（2008）の研究は、**時間的限定性の有無と評価のレベル（主観・客観性のどちらが優位か）**を指標として用いている。他にも Paradis（2001）、篠原（2002, 2008）、本多（2005）などの重要な論考も本研究で扱うが本要旨内では西尾と八亀に絞り議論を進める。

3-1. 分類指標 1：統辞関係に基づいた分類の操作的定義

西尾（1972）は属性・感情の分類指標として「～がる」との共起の可否、一人称主語を取ることができるかなど、形容詞と共起要素の統辞関係（syntagmatic relation）に基づいた分類である。これは言語テストの結果が分類結果と同値であるため、分類における操作的定義が与えられていると換言される。この場合、研究者による分類の揺らぎは少なく、再現性の高い分類が可能であり、言語学における分類に対する批判的考察を行った守田（2013）によるところの「科学的分類」とみなされる。

3-2. 分類指標 2：主観性・客観性、時間的限定性に基づく分類

八亀（2008）の研究は形容詞を動詞や名詞との連続相の中で捉えるべく（cf. Givón（2001））時間的限定性を形容詞の意味の分類軸に取り入れた重要な研究である。また、評価のレベル（主観性・客観性）をも一つの分類軸として導入している。八亀（2008）の評価レベルに基づいた分類では「悲しい」は主観的な性質が強い語、「かたい」は客観性（評価性）が高い語であるとし、それぞれを異なるタイプの形容詞と分類する。言語直感的には妥当に感じられるが、分類における十分な操作的定義が与えられているかという点では検討の余地がある。

4. 構文レベルの意味要素としての主観性・客観性と操作的定義

評価のレベル（主観性・客観性）は文・構文レベルでの変動が大きいことを次の例にて示す。

(1) a. ダイヤモンドは硬い。/ b. 硬っ！何、このパン？

上記、(1a) は総称文であり、ダイヤモンドの恒常的な性質を表しており客観性の高い文と言える。一方、(1b) は今野（2012）が示したイ落ち構文（形容詞語幹用法）であり、私的表現性が高く主観性の高い文と言える。このように、八亀（2008）にて客観性の高いとされる「かたい」は共起する文により、評価のレベルが異なる。この場合、評価性の違いは語彙レベルの分類指標としては適切に機能せず、生起する構文の種類を操作的定義として捉える方が、より適切であると考えられる。

5. 形容詞の意味研究における意味要素の整理と操作的定義の検討：本研究の意義

本要旨では紙幅の都合上、分類の操作的定義および主観性・客観性に関する議論に焦点を当てたが、スケール性のタイプ（cf. Paradis 2001）の分類、観察点の公共性（cf. 本多 2005）などの意味要素にも触れつつその操作的定義の可能性を検討する。

主要参考文献（日本語）

- 荒 正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』東京：むぎ書房, 147-162
- 奥田靖雄 (1996) 「発行にあたって」『ことばの科学 7』東京：むぎ書房, 1-20
- 今野弘章 (2012) 「落ち: 形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141, 5-31.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究: 国立国語研究所報告: 44』東京：秀英出版.
- 八亀裕美 (2003) 「形容詞の評価的意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15, 13-40.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から』東京：ひつじ書房
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の分類 状態形容詞と質形容詞」『ことばの科学 7』むぎ書房, 39-60.
- 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学 10』東京：むぎ書房, 43-66.
- 本多 啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版会
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」『言語研究』144, 29-53.

主要参考文献（英語）

- Dixon, R. M. (1977) Where have all the adjectives gone?. Walter de Gruyter.
- Givón, T. (2001). *Syntax: an introduction. Volume II*. John Benjamins.
- Paradis, C. (2001) “Adjectives and boundedness” *Cognitive linguistics* 12-1, 47-65



[P-14]

ビルマ語の助動詞 =lai? の用法

萬年 容（東京大学大学院修士課程）

背景 ビルマ語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属する言語である（Eberhard et al. 2022）。一部の動詞は助動詞として本動詞に後接する。lai? は動詞として「ついていく」という意味を持ち（加藤 2019）、助動詞として使われると多様な意味を持つ。それを反映して、これまで =lai? についての様々な分析がなされてきた。澤田（1999）は思い切り「～てしまう、～てやる」という意味を表すと述べている。同様の分析を大野（1983）、加藤（2019）も示している。

- (1) pwĩnbwĩnlĩnlĩn pyó=lai?=pà=dε` (澤田 1999: 12)

clearly tell=*laʔ*=polite=VSM:REAL

「はっきり言ってしまった。」

(1) では、本動詞 pyó「言う」と =lai? が共起し、思い切りの意味を加えている。他方で、岡野（2007）は =lai? は適切「最も効果を発揮するタイミングで」という意味を表すと述べている。

- (2) cǎn` ʔálóun ʔǎhmàn-dáin=bε` pyó=pyá=lai?=pà=dε` (岡野 2007: 96)

1SG all truth-as=EMP explain=demonstrate=*laʔ*=polite=VSM:REAL

「私は全て正直にきちんと説明しました。」

(2) では =lai? が「きちんと」という意味を加えている。このように助動詞 lai? には大きく思い切り分析と適切分析がある。

問い 本発表では =lai? がどのような用法で用いられているのかを再検討する。

方法 ビルマ語で書かれた 2 冊の小説中（léhnĩn ʔǎtù : Ludu U Hla 著、twé : Journal Kyaw Ma Ma Lay 著）で =lai? が助動詞として用いられている文を観察した。また、その文をインフォーマントに提示し、その文での =lai? と同じ用法の =lai? を用いた別の文を作成してもらった。

結果 先行研究の通り、思い切りを表す場合も見られた。しかし、以下の 3 点の思い切りの用法への反証も確認された。

①無意志動詞と共起する点。②無生物名詞が主語となる点。③不注意「(ついつい) ～てしまう」・無意識「(ふと) ～てしまう」を表す助動詞 =mĩ と共起する点。①～③において動作主に意志がないにもかかわらず、動詞の表す動作に思い切りという意志のある意味を付与することは適当ではない。

分析 そこで、助動詞 =lai? の意味として、岡野（2007）の指摘する適切「最も効果を発揮するタイミングで」が =lai? の中心の意味であり、その具体的な意味の現れとして (a) 思い切り、(b) 文脈との関連性の用法を位置づけることを提案する。(a) 思い切りは澤田（1999）らが指摘するものと同様である。しかし、この用法を中心にする上記の問題が生じるため、(b) 文脈との関連性を設定する。(b) 文脈との関連性とは、特に因果関係が成立している文に =lai? が見られることを指す。

- (3) tu ʔi pauʔ=lai?=lò taʔ-khán-lóun nǎn=twá=dε` (コンサルタントによる作例)

3SG fart explode=*laʔ*=because one-room-CLF smell=*go*=VSM:REAL

「彼がおならをしやがったので、部屋中がくさくなった。」

(3) では、おならをしたことと部屋中臭うこととの間に因果関係が成立しているので、=lai? が使われている。文脈との関連性を設けることにより、思い切りの用法では捉えることができない上記の 3 点の問題も解決できる。実際、①無意志動詞と共起する文、②無生物名詞が主語になる文、③不注意「(ついつい) ～てしまう」・無意識「(ふと) ～てしまう」を表す助動詞 =mĩ と =lai? が共起する文が確認された。これらの文は前後の文との因果関係が成立している。そのため、文脈との関連性を設けることにより、上記の問題を解決できる。

このように適切「最も効果を発揮するタイミングで」を中心義とし、話し手が決断を必要とするタイミングにおいて (a) 思い切りの用法が、文脈との関連性を示す必要があるタイミングにおいて (b) 文脈との関連性が使われる。

結論 本研究では、適切を中心として、適切の下位区分を示すことにより、本発表では =lai? の用法を体系的に整理した。=lai? は意志性のみならず、文脈との関連性を表すことを示した。本研究はチベット・ビルマ諸語の研究に貢献する。

略語一覧 VSM:動詞文標識、REAL:現実法、1:1人称、3:3人称、SG:単数、EMP:強調、CLF:類別詞

参考文献

- Eberhard, David M., Gary F. Simons & Charles D. Fenning (eds.) (2022) *Ethnologue: Languages of Asia*. 25th edition, Dallas, Texas: SIL International.
- 大野徹 (1983) 『現代ビルマ語入門』東京：泰流社
- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』東京：国際語学社.
- 加藤昌彦 (2019) 『ニューエクスプレスプラス ビルマ語 (CD 付) 』東京：白水社
- 澤田英夫 (1999) 『ビルマ語文法 1 年次』ms. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram1.pdf> [2025 年 3 月アクセス] .



[P-15] 命令的意味を表すシヨウについての一考察：「代行的コミットメント」という観点から

金子真（大阪大学招へい研究員） kanekomakoto06@gmail.com

日本語の勧誘を表すシヨウは命令的意味を表すことがある (e.g. (1a-b))。宮崎他 (2002: 30)はシヨウのこの用法について「はっきりした「意志」を示せない聞き手に視点を同一化する」と述べている。ただ「視点の同一化」は何を意味するのか明確化する必要がある。例えば「視点」を事態を眺める基準点と解釈するなら、(1b)で「来る」という話者を基準とする直示表現が用いられていることからすると、話者が対話者の視点に立っているとは考え難い。

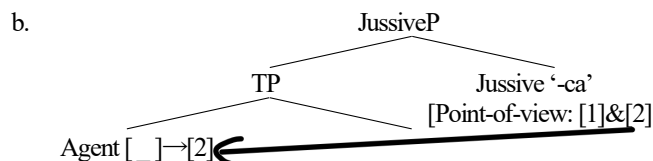
ところで韓国語の勧誘形 *ca* も 2 人称単数主語を取り命令的意味を表すことができる (e.g.(2a))。この例に対し、Seo & Hoe (2015)は Zanuttini 他 (2012)に基づき興味深い分析を提案している。Zanuttini 他によると、勧誘文と命令文はそれぞれ一致を要求する 1 人称複数と 2 人称の素性をもった主要部 Jussive を含み、それが T と融合することで Jussive-T となる。1 つの主要部において人称素性は 1 つしか許されず、この素性が Jussive-T から探査を行い構造上最も近い主語と一致するため、主語は 1 人称複数もしくは 2 人称に限られる。更に主語に束縛される代名詞は Jussive 主要部と同じ人称素性を持たなければならない。この制約により英語の命令文 *Everyone wash yourself!* の *yourself* の生起可能性が説明される。Seo & Hoe はさらに Jussive の人称素性は「視点 (point of view)」を表し、Jussive と T が融合せず Jussive の素性は T の素性に対し部分的な探査 (subset probing)を行うことも可能であると提案し、(2a)はまさにこうした部分的な探査(2b)を具現化したものと主張している。但しこの分析を日本語に適用すると問題が生じる。(1a)では Jussive は 1 人称複数の素性を帯びているのだから、主語に束縛される「君の」は共起不可能なはずである。本稿では Seo & Hoe の分析をそのまま日本語には適用しないが、彼らの「視点」を Stegovec (2019)の *perspectival PRO* と同じものとして再解釈することを提案する。Stegovec は命令文のモーダル分析を採用した上で MoodP の指定部に *perspectival PRO* が存在し、これは主節では *committor* である話者と同一指示であると主張する (e.g. (3))。本稿では意志文、命令文、勧誘文を話者の対話者に対するコミットメントとして捉える Condoravdi & Lauer (2012)と Geurts (2019)の分析に従い、またこれらの文と *subject control*, *object control*, *split control* との類似性を指摘する Matsuda (2021)の分析に示唆を得て、コミットメントをある種の遂行動詞と考え、それぞれの文の意味を(4a-c)のように表すことを提案する。そして(1a-b)のような勧誘文の意味は(5)で表されると主張する。この分析によれば、上位者である話者は対話者の行為についてコミットメントを行うのと同時に、「対話者のコミットメントには介入できない」(Malamud & Stephenson 2015: 285)という原則に反し、下位者である対話者のコミットメントを代行することになる。また「私達 (私と君)」は、通常の勧誘文の場合のように行為者ではなく、*committors* にあたる。(1a-b)のような勧誘文は、命令文と (代行される) 意志文が融合したものであるという分析は、例えば(1b)に対し肯定文で返答する場合、i)「私の所に来なさい」という命令文に対するのと同じ「はい、行きます」という返答も、ii)「(私が代行する) 君は私の所に来ようか (と考えている)」という (代行される) 意志の独話的疑問文に呼応する「はい、行きましょう」という応答も可能であることから裏付けられる。

(1)a. 君のベストを尽くそう。(https://plaza.rakuten.co.jp/mikamijuku/diary/200702250000/?scid=wi_blg_amp_diary_next)

b. ちょっと私の所に来ようか。(https://www.pixiv.net/tags/ちょっと私の所に来ようか/illustrations)

(2)a. Ney-ka cemsim-ul sa-ca. (Seo & Hoe 2015: 3)

you-NOM lunch-ACC buy-EXHORTATIVE 'Lit. Let's you buy lunch / intended. (I wish) you will buy lunch under our agreement)'



(3) COMMIT (Sp_k) [CP C [MoodP PRO_k [Mood' OP_{Directive} [TP pro_i [vP t_i v...]]]]] (Stegovec 2019: 60(に基づく))

(4)a. Sp_j commits to Ad_k [PRO_j to VP]. (Sp=the speaker; Ad=the addressee) [意志文：主語コントロール]

b. Sp_j commits to Ad_k [PRO_k to VP]. [命令文：目的語コントロール]

c. Sp_j commits to Ad_k [PRO_{j+k} to VP]. [勧誘文：分離コントロール]

(5) Sp_j+Ad_k commit to each other [PRO_k to VP] = Sp_j commits to Ad_k [PRO_k to VP] & Ad_k commits to Sp_j [PRO_k to VP]

[参照文献]

- Condoravdi, Cleo & Sven Lauer. 2012. Imperatives: meaning and illocutionary force. In: Christopher Piñón (ed.) *Empirical Issues in Syntax and Semantics* 9: 37–58.
- Geurts, Bart. 2019. Communication as commitment sharing: speech acts, implicatures, common ground. *Theoretical Linguistics* 45.1-2: 1-30.
- Malamud, Sophia & Tamina Stephenson. 2015. Three ways to avoid commitments: declarative force modifiers in the conversational scoreboard. *Journal of Semantics* 32:275–311.
- Matsuda, Asako. 2021. Control from Inside: Evidence from Japanese. In: Anne Mucha, Jutta M. Hartmann and Beata Trawiński (eds.). *Non-canonical Control in a Cross-linguistic Perspective*. 137-165. Amsterdam: John Benjamins
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 2002 『モダリティ 新日本語文法選書4』 くろしお出版
- Stegovec, Adrian. 2019. Perspectival Control and Obviation in Directive Clauses. *Natural Language Semantics* 27:47–94.
- Seo, Saetbyol & Hoe, Semoon. 2015. Agreement of Point-of-Viewer and a Jussive Subject. *Studies in Generative Grammar* 25:1-34.
- Zanuttini, Rafaella, Pak, Miok & Portner, Paul. 2012. A syntactic analysis of interpretive restrictions on imperative, promissive, and exhortative subjects. *Natural Language & Linguistic Theory* 30(4): 1231–1274.



[P-16] 日本語の文処理における促進性干渉効果について—遊離数量詞を含む文を用いて

胡 春霞 中野 陽子

文処理の研究では、非文だが誤って正文と判断しまう現象「文法性錯覚」が報告されている (Bock & Miller, 1991; Wagers et al., 2009)。キュー呼び出しモデル (the cue-based retrieval model) によると、ひとが文を聞いたり読んだりして処理する際、構成素が作業記憶に保存されると共に、ヘッ드의素性が項を検索するためのキューと呼ばれる情報として生成され、キューと一致する素性を持つ構成素 (ターゲット) が作業記憶から呼び出される。その際、キューと類似する素性を持つ構成素 (アトラクター) も誤って作業記憶から呼び出されてヘッドと結びつき、ヘッドと項の結びつきに干渉し、文法性錯覚が起こるとされる。また、このような干渉では、容認度が高くなり、反応時間が短くなる効果が見られ、促進性干渉効果と呼ばれている (Lewis & Vasishth., 2005)。促進性干渉効果はキュー呼び出しモデルの証明ともなる。このモデルの日本語への適用性が研究されているが、刺激文の種類が限られており、モデルの適用性は定かではない。また遊離数量詞について調べた研究が見当たらない。そこで本研究は、(1)のような日本語の遊離数量詞を含む文を刺激として時間制限のある容認性判断課題 (実験 I) と自己ペース読文課題 (実験 II) を実施し、促進性干渉効果の有無を調べ、このモデルの日本語への適用性を検討した。

参加者は日本語母語話者 (実験 I: 41 名、実験 II: 41 名) であった。刺激文は受身文 (1) で、主語名詞句はターゲット (ツバメ・こども)、名詞 (カラス・ドローン) + 「に」 (実験 I) または「によって」 (実験 II) はアトラクター、遊離数量詞 (2 羽) の助数詞 (羽) はヘッドとした。自己ペース読文課題は、文節毎に区切って提示し、その領域 (region, R) の読み時間を計測した。また文末で容認性判断をしてもらった。実験 I も II も容認性の判断には「はい」または「いいえ」を選択して答えてもらった。結果を図 1～図 3 に示す。線型混合回帰分析と最小二乗法による分析の結果、実験 I は「はい」の回答率が非文の(1c)の方が非文の(1d)より有意に高くなり、促進性干渉効果が見られた。実験 II は読み時間については R3 も R4 も条件間に有意な差が見られなかった。「はい」の回答率は、アトラクターの主効果が有意傾向であり、(1c)の方が(1d)より高かったが有意傾向で、促進性干渉効果は見られなかった。実験 I と実験 II の容認性判断課題の結果の違いは、刺激文の構造や実験課題の違いによると考えられる。

結論は、時間制限のある容認性判断課題の結果から日本語の遊離数量詞を含む文についても促進性干渉効果が見られることが分かった。また、それにより、日本語の遊離数量詞を含む文の処理にもキュー呼び出しモデルが適用できる可能性が示唆された。

- (1) a. ツバメが R1 カラスに (よって) R2 2 羽 R3 しつこく R4 追いかけている。R5
 b. ツバメが R1 ドローンに (よって) R2 2 羽 R3 しつこく R4 追いかけている。R5
 c. こどもが R1 カラスに (よって) R2 2 羽 R3 しつこく R4 追いかけている。R5
 d. こどもが R1 ドローンに (よって) R2 2 羽 R3 しつこく R4 追いかけている。R5

※ () : 実験 II で提示した。

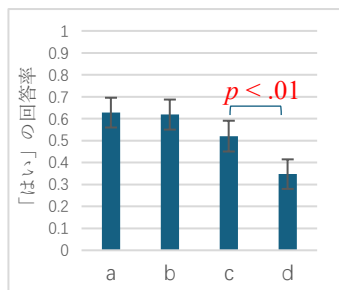


図 1 実験 I の結果

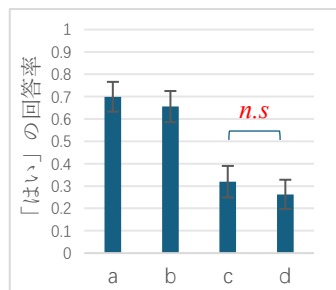


図 2 実験 II の容認判断の結果

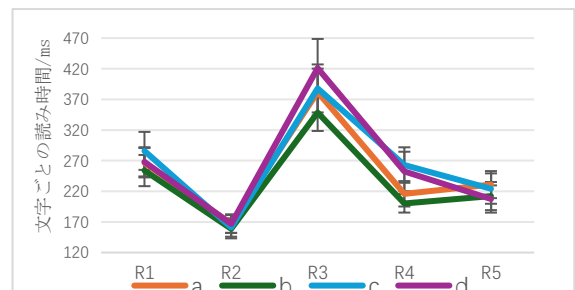


図 3 実験 II の読み時間 (ms)

参照文献

- Bock, J. K., & Miller, C. A. (1991). Broken agreement. *Cognitive Psychology*, 23, 45-93.
- Lewis, R. L., & Vasishth, S. (2005). An activation-based model of sentence processing as skilled memory retrieval. *Cognitive Science*, 29(3), 375-419.
- Wagers, M. W, Lau, E. F., & Phillips, C. (2009). Agreement attraction in comprehension: Representations and processes. *Journal of Memory and Language* 61(2), 206-237.



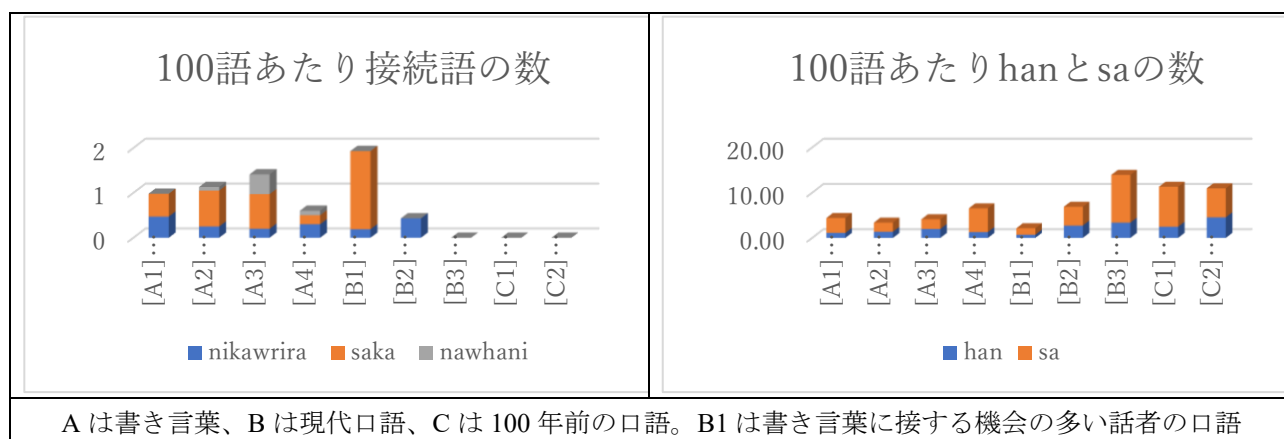
[P-17]

アミ語における書き言葉文体の成立

今西一太（株式会社エス・アイ）

本発表では台湾原住民語の 1 つでありオーストロネシア語族に属し、危機言語であるアミ語について書き言葉と話し言葉の談話を比較し、アミ語に書き言葉の文体が生じていることを指摘する。アミ語が初めて書き言葉として記録されたのは 20 世紀前半で、1950 年代からは聖書翻訳を通じて書き言葉としてのアミ語が発展し、一般のアミ人も聖書を通じてわずかではあるが書き言葉に触れる機会を得るようになった。

本研究では、近年出版・公開された書き言葉の談話 4 種類、3 名の現代の話者の口頭談話、そして約 100 年前（書き言葉が作られる以前）の話者の 2 種類の口頭の談話を文字起こしたテキストを用い、nikawrira/kirami「しかし」、saka/orasaka「だから、そのため」、nawhani「なぜなら」など接続を表す語の頻度に注目して比較を行った。その結果、書籍の談話ではこれらの頻度が高く、口頭の談話では頻度が低いことがわかった。一方で、ta「そして」、ano-「～するとき（未来）」、yo-「～したとき（過去）」などの語・接辞では、書き言葉と話し言葉の間に顕著な頻度差は見られなかった。また、han「～されるように言った」と sa「～らしい、～と言った、～して」の 2 つは話し言葉で頻度が高いことが判明した。さらに、書き言葉に接する機会が多い話者の談話の話し言葉（下の B1）は書き言葉に近い特徴が見られた。この結果から、アミ語には書き言葉特有の文体が存在し、それは接続語や han/sa の使用頻度によって特徴づけられると言える。



A は書き言葉、B は現代口語、C は 100 年前の口語。B1 は書き言葉に接する機会が多い話者の口語

このような短期間での書き言葉文体の成立には翻訳が影響している可能性がある。アミ語聖書は日本語からの翻訳作業を経て作成されたものであることが確認されている（参考：李 2013: 89）。その結果、日本語に豊富にある接続語の頻度が高くなり、逆に日本語に存在しない sa/han の数が減ったのではないだろうか。このような「聖典の翻訳によって書き言葉がなかった言語に書き言葉の文体が生じる」という現象はティディム・チン語、チベット語などの言語でも観察されている（Henderson 1965, San Martín 2025）。

また、上のグラフの B1 の話者が書き言葉に近い口語を話すのは、接続語が書き言葉を通じて発達し、それが話し言葉に逆輸入されたことが理由かもしれない。日本語や英語、中国語といった言語でも接続詞が二次的に発達した例が多く、日本語では漢文の訓読を通じて接続表現が発達したと述べる研究もある（楊 2014）。

以上により、アミ語においても経典（アミ語の場合は聖書）の翻訳を経てわずか数十年のうちに書き言葉の文体が成立した可能性が示唆される。アミ語のような危機言語の書き言葉についての研究は数が少なく、本研究はアミ語における書き言葉と話し言葉の関係を明らかにする出発点になるとともに、書き言葉の歴史が浅い危機言語における話し言葉と書き言葉の関連の理解についても貢献することを目指すものである。



参考文献

Henderson, A. Eugénie (1965) *Tiddim Chin: A descriptive analysis of two texts*. London: Oxford University Press.

李台元 (2013) <<台灣原住民族語言的書面化的歷程>> 國立政治大學博士論文.

San Martín, Joel (2025) 「神聖レジスターと『文法の拡張』」 Manuscript.

楊瓊 (2014) 『古代日本語の因果関係を表す接続表現——漢文訓読の影響を中心に——』 同志社大学博士論文.



[P-18] モンゴル語ウジムチン方言における方向格 —形式と使い分けについて—

福田真理子（東京外国語大学大学院博士前期課程／fukuda.mariko.u0@tufs.ac.jp）

1. はじめに 本研究の目的は、独特な方向格形-d₃U: (-d₃u: ~ -d₃u:) を有するモンゴル語のウジムチン方言の方向格について、使用される形式と使い分けの有無を明らかにすることである。ウジムチン方言とは主に中国の内モンゴル自治区シリントグ盟東ウジムチン旗・西ウジムチン旗で話されるモンゴル語の一方言であり、東西両旗に合せて8万人以上の話者がいる (kökebars ba čimeg 1997:1-2)。なお、方向格とは日本語の「～へ」や「～に」にあたる意味を表す形式である。Janhunen (2012:110) はウジムチン方言のみで使用される方向格として「jug (dzug)」（「方向」）という語に由来する「-jUU」（筆者のいう-d₃U:に該当）を挙げている。

2. 先行研究 kökebars ba čimeg (1997:5) によれば、ウジムチン方言では方向格として -ru: ~ -ru: (-rU:), -lu: ~ -lu: (-IU:), -u:d ~ -u:d (-U:d), -d₃u: ~ -d₃u: (-d₃U:) という形が用いられる。このうち -ru: ~ -ru:, -lu: ~ -lu: は oru: 「下へ」、-u:d ~ -u:d は o:d 「上へ」に由来し (kökebars ba čimeg 1997:67)、-d₃u: ~ -d₃u: は dzug 「方向」に由来する (kökebars ba čimeg 1997:68)。一方で go joriytu (2017:40) はウジムチン方言の方向格として -ru: ~ -ru:, -d₃u: ~ -d₃u:, および方向を表す語として dzug, o:d, oru: が用いられるとしている。念のため研究資料が豊富なモンゴル国のハルハ方言を参照すると、方向格として -RU: (-ru: ~ -ru: ~ -lu: ~ -lu:) が用いられる (向井 2006) ほか、o:d 「上へ」に由来する -A:d (-a:d ~ -a:d ~ -o:d ~ -o:d) が用いられるという記述もある (Kullmann and Tserenpil 2008:100)。

3. 先行研究の問題点 上記の多くの形式について、それらの形式の詳細や使用頻度の差、使い分けや意味の違いの有無が明らかにされていない。特に、-u:d ~ -u:d (-U:d) と同じく o:d 「上へ」に由来する -A:d がウジムチン方言でも使用されるかどうかは先行研究で全く検討されていない。

4. 予備調査 大人数への調査を実施する前に、東ウジムチン旗出身の話者1名（調査協力者A）に依頼して予備調査を実施した。対象とした方向格類は、oru:, -rU:, -IU:, o:d, -U:d, -A:d, dzug, -d₃U: の8つである。予備調査ではこれら8つの方向格類と筆者が作成した例文（方向格が入る場所を___で示した枠文）との組み合わせを「1.不自然」「2.どちらかといえば不自然」「3.どちらかといえば自然」「4.自然」で判断してもらった。その結果、格接尾辞でない oru:, o:d, dzug はほぼ全て「1.不自然」とされたため、以降の調査では除外した。また音声事実に基づき -rU: と -IU: も同一の形態素 (-RU:) としてまとめた。以上より、次の調査1,2で扱う方向格は -RU:, -U:d, -A:d, -d₃U: のみとなった。

5. 調査1 調査1ではウェブ上で東西ウジムチン旗出身者・在住者へのアンケート調査を実施した。①uxru:d xodag___ tšəwdʒi:n. 「牛たちが井戸の方に一列になって歩いている。」②gol___ jawj. 「川の方に行こう。」③tər ə:dʒ___ ə:ŋ guilə:. 「彼はお母さんの方に走った。」④tʃi: notag___ aa:ŋ xədzə: bytʃax ji? 「君は故郷にいつ戻るの?」のそれぞれの下線部に方向格 -RU:, -U:d, -A:d, -d₃U: を入れた文の音声を聞いてもらい、「自然である」「自分が同じように話す」と感じた場合チェックを入れてもらった（複数選択可）。その結果、①～④の全てにおいて -d₃U: > -RU: > -U:d > -A:d の順に多く選択された。なお選ばれた回数は -d₃U: が突出して多く、-RU: と -U:d はやや近い値であった。また2つの方向格の組み合わせ（6通り）ごとに結果を見ると、どの組み合わせにおいても「両方の方向格を選んだ人数」と「片方の方向格だけを選んだ人数」は例文ごとに変動しておらず、名詞の有生性の違いによって4つの方向格が使い分けられている可能性は低いと考えた。

6. 調査2 調査2では東ウジムチン旗出身者5名に、調査1で検討した使い分けについて補足的なインタビュー調査を行った。「お父さん{の方を見る／に電話をかける／の方を指差す／の方に行く／の方に物を送る}」「{馬／街／家}{の方を見る／の方を指差す／の方に行く}」という意味のモンゴル語の文について「-d₃U: と -RU: ならどちらを選ぶか」「-U:d と -A:d ならどちらを選ぶか」と質問した（-U:d と -A:d は -d₃U: と -RU: に比べて選ばれにくいと調査1で判明しているため）。また、随時調査協力者のコメントを書き留めた。結果として、「お父さん（人）／馬（動物）／街・家（物）」という名詞の有生性および「見る／電話をかける／指差す／行く／物を送る」という動詞の違いによって選ばれる方向格が変わることはなかった。

7. 結論 本研究では、先行研究で列挙されるのみであったモンゴル語ウジムチン方言の方向格について、使用頻度が高い順に -d₃U:, -RU:, -U:d, -A:d という4つの方向格形が存在し、-d₃U: が圧倒的によく使用されること、およびこの順番は前後の名詞や動詞に関係なく一定であることを明らかにした。また、この調査の範囲内では名詞の有生性や動詞の違いに応じた使い分けはないことがわかった。



参照文献

【モンゴル語文献】※縦書きモンゴル文字の文献はラテン文字に転写して掲載
go joriytu (2017) *öbür mongγul-un mongγul kelen-ü nutuγ-un ayalγun-u yaǰar-un jiruγ-un bayičayalta-yin matêriyal-un čubural. sil-yin γoul ayimay-un üjümüčin-ü boti*. kökeqota: öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoyiy_a.
kökebars ba čimeg (1997) *üjümčin aman ayalγu*. kökeqota: öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriy_a.

【英語文献】

Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
Kullmann, R., D. Tserenpil (2015) *Mongolian Grammar* (5th revised edition). Bern (Aeschi/Spiez): Kullnom Verlag.

【日本語文献】

向井晋一 (2006) 「方向格」『東京外国語大学言語モジュール』ウェブサイト (Top>モンゴル語>文法モジュール>ステップ名から探す>方向格>解説)
<https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/026.html> (最終閲覧日：2025/03/13)



本発表の目的

柴田 (1995) は東京語の観察を通じて、若年層の話し方ではピッチが平坦化している可能性を指摘した。Takano & Ota (2017) は、この現象が東京に局所的なものかそれとも全国的な言語変化かを探るために、北海道の札幌市と地方都市、鹿児島市で 6 コマ漫画の即興描写タスクによる自然発話の産出データを収集・分析し、以下のことを示した。

- (1) 出身方言のアクセントの相違にかかわらず、若年層の発話は平坦なピッチを特徴とし、一貫した文全体の急激なピッチ下降 (steeper declination) を伴う。
- (2) 年齢に関連する違いは、アクセント句 (AP) の構成にも見られ、文ピッチの平坦化と密接に関係している。

本発表では、Takano & Ota (2017) で欠落していた東京語話者の発話データの分析から、これらの結果が全国的な現象であることを確認し、その背景にある制約条件を考察する。

分析データと方法

本発表では、Takano & Ota (2017) と同一のタスクで、20 名の東京語話者 (若年男女各 5 名、老年男女各 5 名) の音声データを採取した。イントネーション句 (IP) 内の 2 つの AP の連続部分を基本単位とし、平板か否かの範疇的区別 (全 2017) ではなく、ピッチ昇降の度合いと連動するアクセント句の区切り方のゆれを「ピッチの谷」として連続量で捉えた。2 つの連続する AP の境界ピッチの谷の深さを目的変数とし、複合 AP のアクセント型の組合わせ (有核+有核など)、複合 AP のモーラ長、発話速度 (モーラ/秒)、話者年齢、性別を説明変数として、線形混合効果モデルによる解析を行った。

分析結果

1) 境界ピッチの谷は”無核+有核”>”無核+無核”の順で浅く (すなわち dephrasing に近い)、”有核+無核”>”有核+有核”の順で深い、2) 長い発話ほど谷は深くなる、3) 若年世代の谷は老年世代より浅い、4) 男性の谷は女性より浅い、5) 発話速度は境界ピッチの谷の深さとは無関係である、などが確認された。1) 2) 3) は全 (2017) の結果とほぼ合致するが、4) 5) は全 (2017) の結果を支持するものにはならなかった。

結論と本発表の主張

全 (2017) は dephrasing 率 (つまり、境界ピッチの谷の浅さ) の年齢差に発話速度が関わっていると主張するが、今回のデータにおいては発話速度と年齢に相関は見られず、年齢のみがピッチの谷の浅さを規定する要因であった。この結果は、進行中の言語変化を反映している可能性が高いと考えられる。平坦な音調が発話速度によるものでないならば、どのような要因によって生じるのかを解明することが、今後の研究の課題となる。

音調句の区切り方に関する研究は、文章読み上げ音声に基づくものがほとんどであり、CSJ (『日本語話し言葉コーパス』) を用いた全 (2017) や本研究のような自発的な発話の分析は例外的である。ここで留意すべきは、読み上げスタイルに基づく一般化が他の発話スタイルにも当てはまるかどうかは必ずしも明らかではない点である (Umeda 1982, Ladd 1996, 郡 2007)。本発表のような自然発話に近いスタイルの音調を分析の射程に入れることにより、先行研究で示された成果がさらに補強されると考えられる。

参考文献

- 郡史郎. 2007. 「東京方言の自然会話に見られるアクセント弱化の実態」第 21 回日本音声学会（於名古屋大学）.
- 柴田武. 1995. 『日本語はおもしろい』. 岩波書店.
- 全美炷. 2017. 『東京語におけるアクセント句の形成 —実験及びコーパスによる dephrasing の分析』. くろしお出版.
- Ladd, D. Robert. 1996. *Intonational phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takano, Shoji and Ichiro Ota. 2017. A sociophonetic approach to variation in Japanese pitch realizations: Region, age, gender and stylistic parameters. *Asia-Pacific Language Variation* 3 (1): 5-40.
- Umeda, Noriko. 1982. “F0 declination” is situation dependent. *Journal of Phonetics* 10: 279-290.



[P-20]

与那国方言の非自発的完了表現

梁 為棟

沖縄県八重山郡与那国町で話されている南琉球与那国方言では、非自発的完了に関わる表現が三つ存在する。本発表ではそれらの三つの文法化形式の分布上の傾向および時制との相互作用について説明を試みる。

日本語共通語が「～てしまう」という補助動詞構文で表すような「非自発的完了」を本発表では1) 出来事全体または動詞語幹に完了アスペクトを付与し、2) 出来事が生じなければよかったというモーダル的な態度を持つという二つの条件で定義づける。与那国方言で以上の条件を満たす文法化形式は三つ観察されており、それぞれ「minun(無い)」「bunkan(放る)」「kkatirun(捨てる)」を語彙資源としている(例1-例3)。

(例1) ujantu=ø bui=minu-n
ネズミ=NOM 居る=RGR1-IND
「ネズミが居てしまった」

(例2) ndi=bunkas-i
言う=RGR2-MED
「言ってしまった」

(例3) kkai=kkat-ja-n
使う=RGR3-PST2-IND
「使い切ってしまった」

この三つのうち=minun、いわゆる「ない」を語彙資源とする文法化形式は南琉球諸語では広く記述されている(下地 2018 など)が、そのほかの二つの表現は周辺方言ではまだ観察されておらず、また与那国方言のこれまでの記述においてもこれらの存在こそ言及されているものの詳しい考察はされていない。

本発表では分布上の傾向について以下の二点を提示する。まず、共起する動詞の他動性によって分布が異なることが考えられる。=minun と=bunkasi は動詞の他動性に関わらず幅広く使用できるのに対し、=kkatirun は他動性の強い動詞としか共起できないという特徴が観察される。与那国方言は、動詞の他動性によって動作主の格標示が選択されるという分裂自動詞性を持つ(下地 2016)と言われており、この分布と関連づけることで動詞の意味的分類を裏付けることが可能である。次に、これらの表現は前接する動詞の意味的タイプにも制約の強弱がある。=minun のみ存在動詞と共起可能(例1)なほか、=kkatirun は「kjan(消す)」「kurun(殺す)」など消失動詞に後接する傾向が強いと言える(表1)。

次に、これらの表現と時制との相互作用について考察する。与那国方言では基本的なテンスとして過去(-ita-

	弱他動性動詞	存在動詞	時制接辞	時制区分
=minun	可	可	PST/NPST	PST
=bunkasi	可	不可	なし(連用終止)	PST
=kkatirun	不可	不可	PST/NPST	PST/NPST

表1 分布上の傾向及び時制との相互作用

/-ja-)と非過去(-u-)が認められ、また「連用終止形」(例4)と呼ばれるテンス標示が明示されない特殊な形式も存在する(Pellard 2012 など)。本発表の考察対象となる非自発的完了形式は、基本的に完了アスペクトを持つと定義づけられているが、それぞれ異なる形で時制の区分が中和されるため、これらの形式自体にもテンスを含意する蓋然性を3点提示する(表1)。

(例4) buru ha-i cidim-i [全部 食べる-MED 片付ける-MED] 「みんな食べ尽くした」

まず、=minun の語彙的資源となる「ない」を意味する「minun」には過去接辞を接続した「minutan」が存在する。しかし、非自発的完了を意味する補助動詞として現れる時は形態論的な区別こそ存在するものの、必ず過去時制となることが観察される。次に、=bunkasi に関しては必ず先ほど言及された連用終止形の形態で出現し、意味的にも過去時制になる。この現象は与那国方言のテンス体系の解明に寄与できる可能性が高い。なぜなら、過去時制のように振る舞う連用終止形は非過去テンスとしての使用も容認されるなど未だに機能が不明な部分が多いためである。最後に、=kkatirun のみ形態・意味的に時制の区別を持つのみならず、文タイプの命令文で用いられることもあり、通時的にこの形式の文法化度合いが浅いことが示唆される。



参考文献

- 下地理則. 2016. 「南琉球与那国語の格配列について」田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語』東京：くろしお出版.
- 下地理則. 2018. 『南琉球宮古語伊良部島方言』シリーズ記述文法 1. 東京：くろしお出版. URL: <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB25917570>.
- 山田真寛・Pellard, Thomas. 2013. 「ドゥナン語(与那国語)の言語使用」田窪行則（編）『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』93-107. 東京：くろしお出版.
- 与那国町教育委員会. 2021. 『どうなんむぬい辞典 第2版』. 与那国町教育委員会.
- Pellard, Thomas. 2012. “Converbs and their desubordination in Ōgami Ryukyuan.” *Gengo Kenkyu* 142: 95-118.



[P-21]

ベトナム語形容詞における重複表現と意味クラスの関係

佐藤詠子 (東京大学大学院 人文社会系研究科)

【背景】ベトナム語において頻繁に使われる新しい語形成の方法の一つに重複がある。特に形容詞を語基とする重複形式は主に弱化 (attenuative) をあらわす (Thompson 1987:150-154, 211-221)。

- (1) Hôm nay trời nong nóng.
today weather RED hot
「今日はやや暑い。」

(田原 2023; 129)

形容詞の重複においては、語基の意味によって重複が頻繁に用いられる語とそうでない語があると予想される。形容詞に関しては、通言語的な意味クラス分類、およびそのクラスを一定の指標に基づいて評価した尺度を提唱した研究として、典型性に基づいた Dixon (2010)、名詞 / 動詞性に基づいた Croft (2022) などがあり、これらの意味クラス分類をベトナム語形容詞の分析に利用できるのではないかと予想した。

【問い】重複形式が用いられる頻度は形容詞の意味クラス、およびその尺度と関連しているか？仮説として、「形容詞の重複形式が用いられる頻度は、意味クラスによって異なる」「意味クラスを利用した Dixon、Croft それぞれの尺度について、重複形式の用いられる頻度と意味クラスのランキングが関係している」ことが予測される。

表 1. Dixon の尺度に基づく整理

意味クラス		重複合計 (%)
最も中心的	Dimension	0.10
	Age	0.02
	Value	0.08
	Color	0.19
小計		0.09
中間	Physical property	0.24
	Human propensity	0.27
	Speed	0.42
小計		0.28
周縁的	Difficulty	0.15
	Similarity	0.02
	Qualification	0.16
	Quantification	0.05
	Position	0.16
	Cardinal numbers	調査対象外
小計		0.09

【方法】形容詞の単音節語に限定して辞書で語を収集した。また、それぞれの語について、コーパスを用いて語基の出現回数、重複形式の出現回数を調査し、[重複形式の出現回数] / [語基の出現回数] × 100 の計算式で重複形式の用いられる割合を算出した。コーパスは Vietnamese Web 2017 (viTenTen17) を用いた。

【結果】Dixon (2010), Croft (2022) が挙げている意味クラスのうち、13 クラスの計 90 語について調査を行った。最も重複形式の出現割合が高いのは [Shape] クラス、最も重複形式が用いられにくいのは [Similarity] クラスだった。

Dixon の典型性に基づく尺度を用いて分析すると、最も典型的な意味クラスのグループと最も周縁的な意味クラスのグループの中間に位置するグループにおいて、重複形式が最もよく用いられることがわかった (表 1)。一方、Croft の尺度に関しては明確な傾向が読み取れなかった。

【議論】中間的なグループに含まれ、重複形式の出現割合が高かった意味クラスは [Physical property]、[Human propensity]、[Speed] の 3 つである。これらのクラスについて、重複形式の出現割合が高い理由として共通して考えられるのは、重複によって弱化を表すとき、単にその性質が十全ではないことを表すだけでなく、ベースに特定の対義語があることを示唆する点である。

本研究ではベトナム語形容詞の意味クラスが、特に典型性の尺度に関して重複と関連していることを示した。



参考文献

- Croft, William. 2022. Morphosyntax: Constructions of the World's Languages. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, Robert M. W. 2010. Grammatical topics: Basic Linguistic Theory vol.2: Oxford University Press.
- Thompson, Laurence C. 1987. A Vietnamese Reference Grammar: University of Hawaii Press.

コーパス

Vietnamese Web 2017 (viTenTen17). in Sketch Engine.

https://app.sketchengine.eu/#dashboard?corpname=preloaded%2Fvitenten17_vnc1



鎌野慈人

ストーニーブルック大学

shig.kamano@gmail.com

日本語の諸方言はさまざまな語彙レベル・文節レベルの音韻パターンを示している。本研究はその二つの間に位置付けられるであろう単語レベルの音韻に焦点を当て、不必要な音調の指定を取り除くべく、大阪方言の語頭・語末音調について二つのアプローチをもって分析を試みる。一つ目はポストレキシカルな境界音調（%L、H%）を自律分節韻律理論（AM 理論）の枠組みで提案するものである。二つ目は、これらの音調は最適性理論（OT）の制約の順位によって表層にあらわれるという分析である。

大阪方言には二種類の語彙レベルの音韻の指定が必要である。まず、その単語の中にピッチ下降が存在するかによって有核か無核かに分けられる。次に、それぞれの単語は高音調あるいは低音調で始まる（高起、低起）。(1)には高起の有核（例：なみのり）、高起の無核（例：のりもの）、低起の有核（例：おにぎり）、低起の無核（例：おみやげ）という四種類の可能な音韻パターンをまとめる。特筆すべきは、低起無核の単語の語末に高音調が観察されることである（太字で記載）。

(1) 大阪方言における語彙レベルの音調パターン

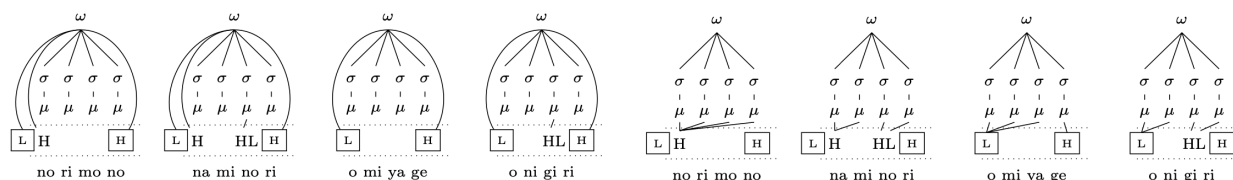
	有核	無核
高起	HHHL なみのり	HHHH のりもの
低起	LLHL おにぎり	LLLH おみやげ

Igarashi (2007) は三種類の語彙レベルの音調指定を大阪方言に想定している。それぞれ、(i)単語が有核か無核か、(ii)単語が高起か低起か、そして(iii)単語が高音調で終わるか低音調で終わるか。Igarashi (2007) が $2^3 = 8$ 通りの音韻パターンを予測するのに対し、実際には(1)に示される四種類しか大阪方言には存在しない。例えば、大阪方言には(i)有核で(ii)高起で(iii)高音調で終わるような単語が存在しない。語末の音調は他の二種類の指定から常に予測可能であるため、語彙レベルで指定される必要がないと考えられる。

本研究が提案する一つ目の分析では、(2)に示されるようなポストレキシカルな二種類の語末音調を想定する。これらの音調は大阪方言のすべての韻律語にあてがわれると考えられるが、語彙レベルの音調指定よりも「弱く」、例えば単語が有核あるいは高起の場合には語末の高音調（H%）は実現しないとみなす。この提案は、東京方言の句音調が常に指定されるが音声的に実現するとは限らないという Igarashi (2015) の分析と並列に考えることができる。本分析は語末の低音調を含まないため、音韻パターンを過剰に生成する（overgeneration）という Igarashi (2007) の問題を避けることができる。

(2) 大阪方言の境界音調の提案

(a) ポストレキシカルな境界音調（四角内に図示） (b) 音調拡張後



二つ目の提案として、語頭・語末の境界音調は最適性理論における制約の順位をもとに出現するとみなす分析が挙げられる。Angeles (2023) は関西方言の語末の高音調に関して、高音調を語末に要求する *Final-H*、そして二つ以上のピークを禁じる *Culminativity* という二種類の制約を提案する。本研究は **H* (Yip, 2002) という制約を加えることで、大阪方言の語彙における指定から語頭の低音調も取り除くことを可能にする。最後に、本研究にて提案した二つのアプローチを比較する。このような語彙レベルでの指定の最小化を目指す研究は、韻律類型論、特に韻律語よりも小さい単位における分析に貢献するだろうと考えられる。

参考文献

- Angeles, Andrew. 2023. *Endangered Compound Prosody in Kansai Japanese: Implications for the Syntax-Prosody Interface*. BRILL.
- Igarashi, Yosuke. 2007. Typology of prosodic phrasing in Japanese dialects. In Workshop on Intonational Phonology: Understudied or Fieldwork Languages, ICPhS 2007 Satellite Meeting, Saarland University, Saarbrücken, Germany.
- Igarashi, Yosuke. 2015. 13 Intonation. In Haruo Kubozono (ed.), *Handbook of Japanese phonetics and phonology*, 525–568. DE GRUYTER.
- Yip, Moira. 2002. *Tone*. 1st edn. Cambridge University Press.



[P-23] 口語インドネシア語における *apa* の使用：選言接続詞か、疑問標識か？

高橋 翼（東京大学大学院・修士課程）takahashi.yap@gmail.com

【背景】 口語インドネシア語では (1) のように選言接続詞 *atau* が用いられる所で *apa* が用いられる。このような *apa* は従来 *atau* と同じ選言接続詞 (Sneddon 2006: 86) や選択疑問の疑問標識 (Poedjosoedarmo 1982: 123) と見なされてきた。しかし (2) のような文で容認度が下がる点で通常の選言接続詞 *atau* とは振る舞いが異なる。さらに、疑問を含まない文で用いられうることを考慮すると *apa* は疑問標識とは言えない。

- (1) *Mau ke kiri OKatau/OKapa ke kanan?* (2) *Geser barang=nya ke kiri OKatau/?apa ke kanan.*
 want to left or to right move thing=DEF to left or to right
 「右と左どちらに行きたい？」 「左か右に荷物を動かせ」

【問題】 選択疑問専用の選言接続詞 (interrogative disjunction) を持つ言語が世界中で報告されている (Haspelmath 2007)。本研究では、この *apa* は interrogative disjunction の機能をプロトタイプとする多義語であり、これに加えて非選択疑問の選言接続という周縁的な機能を持っているという仮説を立てる。

【調査方法】 実際の用例での *atau* と *apa* の選択疑問/非選択疑問での頻度を調査することで上記の仮説を検証する。本研究では Sketch Engine (Kilgarrieff et al. 2014) のウェブコーパス Indonesian Web 2024 を用いる。口語の用例を集めるため、標準的な形式 *atau* ではなく口語形式 *ato* を使用した。*apa* は口語でのみ用いられるが、同綴語（疑問詞 ‘what’ と節初頭の疑問標識）を排除するため *ato/apa* の前後に同一カテゴリの語が生起するようなデータを収集した。収集対象は 1. *cewek* 「女」と *cowok* 「男」 2. *kanan* 「右」と *kiri* 「左」 3. 1 から 10 の数詞 4. 色彩語彙の 4 カテゴリである。各カテゴリから *ato* と *apa* の例をそれぞれ最大 50 件ずつ収集し、選択疑問であるか否かをアノテートした。解釈が曖昧な例は不明とした。

【結果】 表 1 に示す通り *apa* が非選択疑問で用いられる割合はすべてのカテゴリで *ato* よりも低い。なお選択疑問以外でも *apa* の用例は見られるが、例えば前後に数詞が生起するとき非選択疑問の割合は 24/50 にとどまり、同じ条件の *ato* では 48/50 であることから、*apa* は選択疑問での使用が優勢である。

	<i>ato</i>				<i>apa</i>			
	選択疑問	非選択疑問	不明	合計	選択疑問	非選択疑問	不明	合計
<i>cewek, cowok</i> 「女、男」	35 (70%)	15 (30%)	0	50	50 (100%)	0 (0%)	0	50
<i>kiri, kanan</i> 「左、右」	20 (43%)	27 (57%)	3	50	43 (96%)	2 (4%)	5	50
数詞	2 (4%)	48 (96%)	0	50	22 (48%)	24 (52%)	4	50
色彩語彙	13 (27%)	36 (73%)	1	50	29 (88%)	4 (12%)	0	33

表 1. 選択疑問と非選択疑問における *ato* と *apa* の頻度（括弧内は「不明」を除いたときの百分率）

【結論】 以上の経験的なデータから *apa* が選択疑問で顕著に用いられる一方、非選択疑問でも一定の用例が確認された。このことから本研究では *apa* が選択疑問の疑問標識や単なる選言接続詞ではなく選択疑問専用の選言接続詞としての機能を中心とし、周縁的な機能として非選択疑問の選言接続の機能を持つことを主張する。さらに本研究では口語インドネシア語研究におけるウェブコーパスの有用性も示した。



【参考文献】

- Haspelmath, Martin. 2007. Coordination. In *Language Typology and Syntactic Description*, 2nd ed., T. Shopen (ed). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kilgarriiff, A., V. Baisa, J. Bušta, M. Jakubíček, V. Kovář, J. Michelfeit, P. Rychlý & V. Suchomel. 2014. The Sketch Engine: Ten years on. *Lexicography*. 1: 7–36. <https://doi.org/10.1007/s40607-014-0009-9>.
- Poedjosoedarmo, S. (1982). *Javanese Influence on Indonesian*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Sneddon, J. N. 2006. *Colloquial Jakartan Indonesian*. Canberra: Pacific Linguistics.



[W-1]

チュルク諸語における多回接辞と複数行為性

企画者：日高晋介 (筑波大学)、司会者：菱山湧人 (新潟大学)

発表者：菱山湧人、江畑冬生 (新潟大学)、アクマタリエワ・ジャクシルク (東京大学附属図書館アジア研究図書館 U-PARL)、日高晋介

コメンテーター：菅沼健太郎 (金沢大学)

企画趣旨

複数行為性 (pluractionality) とは、事象の複数性を表す文法的カテゴリーであり、これは動詞における様々な形態的手段によってコード化される。複数行為性は、Newman (1980) によって提案され、近年では言語類型論で注目されている (Mattiola 2019, 2020)。これは、複数行為性が様々な手段によって表されることのみならず、場所や参加者の複数性など様々な意味を表し得るからである。チュルク諸語に属する各言語においても、複数行為性を標示する多回接辞が広く見られる (Johanson 2021: 582-583)。ただし、各言語における当該接辞の生産性や意味のバリエーションについては検討の余地が多く残されており、複数行為性を表す他の手段についての検討も行う必要がある。

本ワークショップでは、3 組の発表者がユーラシアに広く分布するチュルク諸語における複数行為性に注目し、多回接辞の地理的分布・生産性・意味拡張の方向性あるいは複数行為性を多回接辞以外で表す手段を記述する。これにより、言語接触・言語類型論に関する問題に新たな視点を与える。

ワークショップの構成

導入：言語類型論における複数行為性と各発表の概略 (日高晋介) 5 分

各発表 25 分

発表 1：タタール語・バシキール語の多回接辞の諸機能について (菱山湧人)

発表 2：サハ語・トゥバ語・シオル語・アルタイ語・キルギス語の多回接辞の対照

(江畑冬生、アクマタリエワ・ジャクシルク)

発表 3：トルクメン語・ウズベク語・キルギス語における複数行為性 (日高晋介)

コメンテーターからのコメント (菅沼健太郎) 10 分

会場からの質疑応答 20 分

導入及び各発表の題目と要旨

導入：言語類型論における複数行為性と各発表の概略 (日高)：本導入では、複数行為性の通言語的定義を参照し、複数行為性の様々な意味とそれらを表す形態論的手段を整理し、各発表における対象言語の地理的分類と注目している点について概略を述べる。

発表 1：タタール語・バシキール語の多回接辞の諸機能について (菱山)：タタール語・バシキール語（北西語群）は多回接辞 -GAIA（バシキール語 -GEIA）と -(E)štEr を持つ（主に前者は子音終わりの動詞語幹に、後者は母音終わりの動詞語幹に付加する）。先行研究はこれらが主に動作の（頻繁な～稀な）繰り返しや不完全性を表すと記述しているが、他にも様々な含意があるように見える。また、通言語的に見て両言語の特徴的な点は何であるかは示されていない。

発表者は、複数行為性に関する通言語的研究 Mattiola (2019) の枠組み・記述をもとに、コーパスから



抽出した例文における多回接辞の機能を調査し、特徴的な点を探った。調査の結果、動作の複数性のみならず、場所や参与者の複数性も含意されうることが分かった。通言語的に特徴的な点は、動作の稀な繰り返しや不完全性を表しうる点、二種の多回接辞の共起と交互繰り返しによって動作がさらに稀または不完全であることを表しうる点である。前者は近隣言語の多回接辞も同様であるが、後者は同系・近隣言語の中でもタタール語・バシキール語でのみ見られる現象である。

発表 2：サハ語・トゥバ語・シオル語・アルタイ語・キルギス語の多回接辞の対照 (江畑・アクマタリエワ)：本発表ではチュルク系 5 言語の多回接辞の用法を対照し、言語ごとにその表しうる範囲と生産性が大きく異なることを示す。発表者らは聞き取り調査、文献調査、母語話者としての内省から、同系言語で起源を共通とする接辞の機能の違いをまとめた。まずトゥバ語とシオル語（北東語群）の多回接辞は、行為の複数性に加えて動作主の複数性と動作対象の複数性を主に表す。サハ語（北東語群）の多回接辞は、これらに加わる含意として、大きな全体の中の各部分、動作対象の網羅性、動作対象への影響度、複数事態の一括などの特徴的な用法を持ち幅広い領域をカバーする。これに対してキルギス語（北西語群）では、行為の複数性よりはむしろ動作主の複数性を表すのに用いられる頻度が極めて高く、しかも複数人の聞き手に対する丁寧な命令を含意する機能に特化している。アルタイ語南方言（北西語群）でも、もっぱら 2 人称や 3 人称の動作主の複数性を表す。先行研究ではキルギス語の場合とは異なり軽蔑のニュアンスを持つとされるが、本発表ではこの点の検証も行う。

発表 3：トルクメン語・ウズベク語・キルギス語における複数行為性 (日高)：本発表では、中央アジアで話されるチュルク諸語である、トルクメン語 (南西語群)、ウズベク語 (南東語群)、キルギス語 (北西語群) の三言語を扱う。トルクメン語とキルギス語の先行研究においては、行為の複数性あるいは継続性を表す多回接辞 Trk. -(A)lA ~ -GIlA ~ -mAIA ~ -AkIA ~ -j(A)kIA ~ -ja(la)/-(je)le, -(I)šDIr- と、Kr. -GIlA ~ -(A)lA, -(I)štIr- について記述がある。一方、ウズベク語の先行研究において、多回接辞の記述は特に見当たらないが、辞書には多回接辞 -Gila を含む動詞がいくつか見られる。これらの言語では、多回接辞以外にも、副動詞の重複や補助動詞によって複数行為性が表される。

本発表では、上記三言語において、複数行為性が多回接辞によって表されるのか、それ以外の手段で表されるのかについて明らかにする。まず翻訳調査で Mattioli (2019) によって記述された複数行為性の中核的意味を表す文を母語話者に訳してもらい、その後の聞き取り調査で複数行為性が翻訳調査で現れた手段以外で表されることはないか尋ねた。その結果、翻訳調査では、どの言語でも多回接辞は出現しないことから、多回接辞は生産性が低いこと、聞き取り調査では、これら三言語では専ら他の手段によって複数行為性が表されることが明らかとなった。

参考文献

- Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mattioli, Simone. (2019) *Typology of Pluractional Constructions in the Languages of the World*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Mattioli, Simone. (2020) Pluractionality: A cross-linguistic perspective. *Language and Linguistics Compass*. 14(3): e12366.
- Newman, Paul. (1980) *The classification of Chadic within Afroasiatic: Rede*. Leiden: Universitaire Pers Leiden.



[W-2]

一致を導き出す統語メカニズムを探る

企画者・司会: 宗像 孝 (横浜国立大学)

1. 趣旨

本ワークショップでは、各発表にて一致 (agreement) に由来する諸言語の多岐にわたる言語事象を概観し、関与する要因を洗い出した上で、一致関係を作り出す操作・概念を探求する。例えば、英語等の場合、時制辞 (屈折辞) が名詞句 (N/D 主要部) の格認可に関与したり、日本語等の場合、wh 疑問詞と「か」などの助詞 (C 主要部) が相互に関係を持ち作用域を決定づけたりする一致関係が観察される。生成文法理論において、このような語彙要素同士の一致関係は様々な変遷を経た後、素性の値を基にした一致関係を想定する動きが主流となった (Chomsky 2000, 2001)。ただし、一致関係が影響を及ぼす範囲や具体的な操作は昨今の研究 (cf. Chomsky 1995, 2001, 2021/GK, 2024/MC, Legate 2014, Preminger 2014) を見ても定まっていなくても、素性値について統一的な見方がある訳ではない。又、MC に基づくと、一致関係を確立する操作をたてずに、各語彙項目が有する素性のコピー形成にて一致関係を確立する方向性もありえるように思われる (cf. Blümel 2023, 大宗・小町 2024, Manzini & Roussou 2024)。このような方向性を含め、本ワークショップでは各発表者が一致関係及び一致関係を含む言語現象に関して提案し、一致関係を構築する統語メカニズムを模索する。

2. 背景

従来、主格・対格に代表される格付与と数・人称・性から構成される ϕ (phi) 素性の一致現象が注目を浴び、Chomsky (1995) を中心に、時制・屈折を反映する T/INFL が主語に相当する主格名詞句との間で一致関係を持つと仮定されてきた。Chomsky (1995) では、主格を認可する T/INFL が意味解釈に関与しない解釈不可能な ϕ 素性を有し、構造的に一番近い名詞句の解釈可能な ϕ 素性と一致関係を結び、この一致関係を基に名詞句が持つ解釈不可能な格素性を照合/認可する分析が提案された。T/INFL と主格名詞句が双方向かつ二重の一致関係を結ぶという想定は、Chomsky (2000, 2001) が提案する一致操作 Agree にも受け継がれ、(1) の活性化条件に置き換えられる。

(1) 活性化条件 (Activation Condition) (Chomsky 2000, 2001)

- Agree が適用される探査子 (Probe) と目標 (Goal) は、活性化している主要部に限られる。
- 主要部 H が解釈不可能な素性を有する場合、活性化している。

以下では、Chomsky (1995) と Chomsky (2000, 2001) の分析を概観する。

(2) John runs every day.

- $\{T/INFL_{[\phi, \text{Tense}]}, \{vP \text{ John}_{[D, \phi 3sm, \text{ucase}], v, run ...}\}\}$

- $\{T/INFL_{[\phi 3sm, \text{Tense}]}, \{\text{John}_{[D, \phi 3sm, \text{主格}], v, run ...}\}\}$
- $\{\text{John}_{1i}[D, \phi 3sm, \text{主格}], T/INFL_{[\phi 3sm, \text{Tense}]}, \{\text{John}_{2i}[D, \phi 3sm, \text{CASE}], v, run ...}\}\}$
- $\{\{T_{[D, \phi 3sm, \text{主格}]1i}, T/INFL_{[\phi 3sm, \text{Tense}]}\}, \{\text{John}_{[D, \phi 3sm, \text{主格}]2i}, v, run ... \}\}$

まず、Chomsky (1995) の分析を概観する。T/INFL の ϕ 素性と vP 指定部にある John の ϕ 素性との間で素性照合が行われた結果、John は主格を得る。意味解釈に関与しない T/INFL の ϕ 素性と John の格素性が LF (論理形式/Logical Form) に存在すると破綻を招くという想定の下では、それらは LF に入る前に顕在統語部門 (overt syntax) にて削除される必要がある。そこで (2c) のように John が T/INFL 指定部に移動し、素性照合後に ϕ 素性と格素性の一致情報が PF (音声形式/Phonological Form) に送られ、T/INFL の ϕ 素性と John の格素性は統語部門から削除される。T/INFL の ϕ 素性と John の格素性が LF に存在しても影響がない場合、(2d) のように LF にて John の ϕ 素性と格素性だけが移動し、(2d) のように John が基底位置にて発音される。

次に、Chomsky (2000, 2001) の分析を概観する。T/INFL の ϕ 素性と John の格素性には値が無く解釈不可能 (cf. Chomsky 2001, 2004) であると仮定される。よって、LF/PF に解釈不可能素性が送られる前に統語部門にて義務的に Agree が行われる。(2b)では、探査子 T/INFL が目標 John の解釈可能な ϕ 素性 (三人称・単数・男性) を発見する。双方とも値がない素性を有するため、活性化しており Agree に参画する。結果として、移動を伴わない素性共有 (与値 (Valuation)) が行われ、T/INFL にある ϕ 素性は値を得て ϕ 素性の一致の反映として John の格素性は主格の値を受け取り、PF のみにその情報が送られる (スペルアウト/Spell-Out)。

ここで以下の疑問が生じる。第一に、(1) の活性化条件が示すように一致関係を結ぶ双方の主要部に解釈不可能な素性を有することが必要な条件か不明である。例えば、(3) の wh 疑問文で C が疑問を示す素性を必要



とする、または Q 素性に値がないため解釈不可能だと見なされる (Chomsky 2013) が、what にある Q/wh 素性を解釈不可能と見なすかどうかは議論が分かれる。さらに、Legate (2014) などが示すように目標に解釈不可能素性がない言語事象も観察されているだけでなく、探査子に解釈不可能な素性がない場合も想定しうる。

- (3) a. What_i did John buy t_i?
b. {C_[uQ/Q], ... what_[Q/wh]}?

第二に素性照合/一致の結果、双方の主要部に存在する解釈不可能素性に適切な値が与えられはるが、Preminger (2014) などが指摘するように、片方の素性の値にデフォルト値が表出することがある。第三に素性共有を行う具体的なメカニズムに Chomsky (1995) のように移動が必要なのか、もしくは Agree のように素性移動を含めて移動は不要で目標となる主要部が基底位置のまま存在して良いのかという問題である。第四に、素性共有が具体的にどのように行われるか不明である点である。素性共有を基にラベル付与を行う Chomsky (2013, 2015) の分析に関連付けて Epstein, Kitahara & Seely (2021) のように PF での素性共有 (与値) を仮定する研究もあるが、具体的な提案は皆無に等しい。

3. 構成

趣旨・概要 (10 分程度)

本ワークショップでは、各発表にて 1 節と 2 節で取り上げた疑問点に関係する言語事象を取り上げ、分析を打ち出すことで各疑問に一定の示唆を与え、全体討論などを通して一致を作り出す要因とメカニズムを明らかにし、生成文法理論における一致について今後の研究の方向性を打ち出すことにある。

発表 1: 森竹 希望 (福岡大学) [一致再考: デフォルト格の観点から] (20 分)

言語一般的に観察されるデフォルト格の観点から一致についての考察を与えることを目標とする。Chomsky (2000) 以降の一致操作の想定に立脚すると、名詞句には義務的に格が統語的に与えられることになるが、通言語的な事実の観察を行うと、必ずしも名詞句が統語的に格を与えられず、発音の際にデフォルト格を伴う場合があることを捉えることができない。そこで、本発表では英語と日本語の事実に着目しつつ、一致はそもそも随意的に適用されるものであると提案し、義務的に適用されなければならない場合は、他の条件から導かれると述べる。

発表 2: 大宗 純 (関西外国語大学)・小町 将之 (静岡大学) [MC における一致関係] (20 分)

MC の枠組みで、 $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルに代表されるラベル付けの下での素性共有 (指定部・主要部一致) (Chomsky 2013, 2015, Epstein, Kitahara & Seely 2021) と、長距離一致 (探査子・目標一致) (Chomsky 2000, 2001) の両方が理論的に成立し得ると主張する。さらに、その二種類の一致関係を用い、英語や日本語の (虚辞) 存在文等の統一的な説明を試みる。

発表 3: 宗像 孝 [pro 主語を作り出す一致関係] (20 分)

発表 2 の提案を基にロマンス諸語の空主語である pro や分詞構文における主語省略現象を扱い、 ϕ 素性の集まりが pro だと仮定し、空主語現象が pro に存在する ϕ 素性と INFL の phi 素性の長距離一致とコピー形成を通じて導出できると主張する。

発表 4: 林 慎将 (南山大学) [MC における wh 演算子のアクセス] (20 分)

wh 移動に関するパラメーターや移動の非対称性を概観した後で、MC の枠組みに基づき、統一的な統語システムを仮定しつつ、外在化に関するパラメーター、レキシコンにおける違い、経済性から、wh 演算子と C との一致や、wh 演算子の移動現象がどのように捉えられるかを議論する。

全体討論 (25 分)

参考文献 (抜粋)

- Blümel. 2023. Ideas on Form Copy. ms.
Chomsky. 2000. Minimalist inquiries: The framework. in *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*. Martin et al. eds. MIT Press.
Chomsky. 2001. Derivation by Phase. Kenstowicz. eds. *Ken Hale: A Life in Language*. MIT Press.
Chomsky. 2021. Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go? *Gengo Kenkyu* 160.
Chomsky. 2024. The Miracle Creed and SMT. in *A Cartesian dream: A geometrical account of syntax. In honor of Andrea Moro*. Greco et al. eds. Lingbuzz Press.
Epstein, Kitahara & Seely. 2021. *A Minimalist Theory of Simplest Merge*. Routledge.
Manzini & Roussou. 2024. The Copy Theory of Control, Finite control and Non-Obligatory Control. ms.
大宗・小町. 2024. 「ボックス理論での一致と束縛」後藤ほか (編集) 『極小主義の挑戦 ―最適最小性が導く併合とコピー演算―』開拓社。



[W-3]

言語に現れる離散と連続：一般性と個別性の調和を目指して

企画・司会：田中太一（東京農工大学） コメンテーター：西村義樹（東京大学）

発表者：浅岡健志朗（東京農工大学）、石塚政行（東京農工大学）、鄭宇鎮（帝京大学）、
松田俊介（東京大学）、田中太一

[1]趣旨説明：司会者による趣旨説明

[2]研究発表

[3]コメント：コメンテーターによるコメント

[4]全体討論：会場からの質疑応答・総括

機能主義の伝統においては、言語知識はヒトの心やコミュニケーションの様式に動機づけられて成立すると考えられる。そのことの反映として、それぞれの個別言語を大まかに捉えた場合には、広く当てはまる一般的な性質が見出される。一方で、個別言語が有するカテゴリーは個別具体的なものである。たとえば、品詞に関する言語普遍性の発見は、〈物体・属性・動作・場所〉や〈指示・修飾・叙述〉といった普遍的と考えられる概念を比較基準とする手法によって可能になった（cf. Croft 2001, Haspelmath 2010）。これらの概念は焦点色のようにヒトの心の中に実在するが、それをどのようなカテゴリーにまとめ上げるかは言語ごとに異なり、しかもその異なり方には普遍的傾向がある。同様の構図はまた概念空間上の意味の広がりをつめるための道具立てである意味地図にも当てはまる。一般的な知識に由来する離散性と個別言語の慣習に根ざした連続性の両者を適切に位置づけなくてはならないのである（cf. Langacker 2006）。

研究発表要旨

■第1発表：意味の枚挙に伴う理想化と概念分析による基礎付け

「表現 X は意味 a, b, c を表す」という形の意味記述（例 チェコ語の叙述所有構文は所有権、全体部分関係、親族関係を表す）は、表現の意味が枚挙可能なものであり、枚挙された意味それぞれの内部が均質なものであるという理想化を暗に伴う。この理想化の下では、枚挙された意味それぞれの内的なバリエーションが不問となるだけでなく、枚挙された意味（a, b, c）の間の関係が問われることもなくなる。この種の理想化は意味記述の実践において不可欠ではある。しかし一方で問題となるのが、(1)境界事例（a と言えるか微妙である、a だが b と言えなくもない、等）の扱い、(2)典型事例と周辺事例（明確な a とそうでない a）の区別、(3)枚挙された複数の意味が単一の表現によって表されているという事実に対する説明である。(1-3)を可能にするためには、枚挙された意味をそれぞれ一群の性質を持つものとして記述する概念分析が必要である。この分析は、直観による記述と言語的・非言語的振る舞いの観察に基づく裏付けの間を行き来しつつなされることになる。記述された性質のうち、必要な性質、典型度に関わる性質、帰属性に関わる性質を特定することができれば(1-2)は可能であり、枚挙された意味のそれぞれに帰された性質の比較を通じて意味間に一定の（家族的）類似が示されれば、(3)も可能である。一定の理想化の下で直観に依拠してなされる意味記述の実践と、それを基礎付ける概念分析の営みは、排反的なものではなく、相補的な関係にある。

■第2発表：品詞・語類の連続性とは何か

品詞の普遍性を定式化するのに用いられる〈物体・属性・動作〉や〈指示・修飾・叙述〉といった比較概念は、離散的に捉えられている。一方で、これらの概念を基盤とすると考えられる個別言語の語類には、しばしば連続性が指摘される。本発表は、語類の連続性がどのような言語知識のあり方を反映しているのかを、認知文法の観点から明確にする。語類の連続性には少なくとも二つのタイプがある。一つ目は、異なる比較概念が一つの語類に統合される場合である。例えば、日本手話では一つの形式が〈指示〉と〈叙述〉の両方の役割を果たすという体系的な現象が見られる（「絵」と「絵を描く」が同じ形式で表されるなど）。認知文



法の立場からは、日本手話ではモノ（指示）とプロセス（叙述）の多義のパターンがスキーマとして定着し、生産的に使用可能になっていると考えられる。

語類の連続性の二つ目のタイプは、個別言語の中で区別される異なる語類の間に見られる。例えば、バスク語では動詞と形容詞をいくつかの構文への生起を基準として区別することができるが、中間的な振る舞いをする語も存在する（例 *bizi* 「生きる」が完了形では形容詞、未来形では動詞のように振る舞う）。バスク語における動詞・形容詞といった語類は、複数の構文にわたるスキーマ化（高次の一般化）として捉えられる。語の中間的な振る舞いは、知識のネットワークにおいて（サブスキーマを通じて）複数の高次一般化と結びつくことによって実現する。その基盤となるのは、各語類に含まれるそれぞれの語の意味的共通性である。

■第3発表：意味地図は文法形式の意味を枚挙できるのか：韓国語のヴォイス形式-eci-の事例

Haspelmath (1987 など) は、逆使役形式が多くの言語において持つ多機能性の分析を通じて、ヒトの知識には普遍的な概念空間 (conceptual space) が存在するという議論を展開している。意味地図とは、そのような概念空間上に個別言語の文法形式に実現する多義の広がりを描きこんだものであり、他言語の文法形式との異同を視覚的に明示できるという利点があるとされる。このような方針は、ヒトが有する概念空間は（かなりの程度）生得的なものであり、問題となるのは個別言語における概念同士の区切りだけであるという言葉観を反映したものであると考えられる。

意味地図によって文法形式の意味を枚挙することは可能なのだろうか。たとえば、韓国語のヴォイス形式-eci-には、意味地図上では区別される2つの意味機能（「反始動（逆使役）」と「状態変化」）を含む領域を表す用法が確立している。しかしながら、韓国語の実態を考えるならば、（想定される）意味地図上の区別を反映させるのではなく、主語の指示対象に生じる自然発生的な変化を表す1つの用法（主体変化用法）として位置づける必要がある。個別言語の文法形式と結びついた意味であっても、その基礎には普遍的な概念空間が存在し、そのことを反映して通常は（韓国語の-eci-と日本語のラレルのように）意味地図上の分布に一定の重なりが生じる。一方で、多義形式のそれぞれの意味は（かなりの程度）当該言語に固有のものであり、意味地図上に描き込まれる概念によって直接捉えることは困難である。意味地図は大まかな整理には有効であるが、精緻な意味分析によって常に補われる必要があると言えよう。

■第4発表：メタファーとしての言語理論

文法的な知識には、人間の認知や身体のある方に根ざす一般性の高いものと、共同体ごとに異なる慣習に基づいて成立する個別具体的なものとがある。両者は離散的なものではない。慣習もまた一般的な認知のある方に基づいて成立するものであるが故に、一般性の程度において様々である知識が両者の間に連続的に存在することになるためである。一方で、そのような連続的なあり方をした知識をそのままの形で把握することは人間にとって困難であり、それゆえ記述にあたってはまず一般性の高いカテゴリーを見出し、それにラベルを付すことで知識を離散的な対象からなる体系として理想化する必要がある。このような理想化は、できる限り言語の実態に即した形でなされなければならない。本発表では、言語知識を物体、物質、集積として捉えるメタファー (Langacker 2006) を適切に使い分けることによって理想と実態を架橋することを目指す。

参考文献 Croft, William (2001) *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*, Oxford: Oxford University Press. / Haspelmath, Martin (1987) Transitivity alternations of the anticausative type. *Arbeitspapiere*. 5: 1-50. Cologne: Institut für Sprachwissenschaft der Universität zu Köln. / Haspelmath, Martin (2010) Comparative concepts and descriptive categories in cross-linguistic studies, *Language* 86: 663-687. / Langacker, Ronald W. (2006) On the continuous debate about discreteness. *Cognitive Linguistics* 17: 107-151.



次回大会のお知らせ（2025年秋季大会：第171回大会）

場所： 岡山大学

日程： 11月22日(土) 口頭発表，ポスター発表，参加者交流会
11月23日(日) ワークショップ，公開シンポジウム

*プログラムの内容は変更されることがあります。

研究発表募集：

- ・ 応募要領は学会ホームページをご覧ください。
(応募は学会ホームページからとなります)
- ・ 応募締め切り 2025年 8月20日(水)
- ・ 採否通知 2025年 9月中旬

問い合わせ：

日本言語学会事務支局 〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
Tel: (075)415-3661, Fax: (075)415-3662, E-mail: lsj@nacos.com

【重要】

- ◆ 応募の際には、必ず学会ホームページで最新の規程と要項をご確認ください。
- ◆ 同一の応募者が同一の大会で筆頭発表者として応募できる件数の上限は、口頭発表・ポスター発表のいずれか1件とワークショップにおける発表1件の合計2件です。

< 第170回大会企画運営関係者 >

大会運営委員

小町将之（委員長），浅尾仁彦，小野智香子，甲斐ますみ，北田伸一，久保菫愛
田川拓海，中野陽子，平山真奈美，矢野雅貴，吉田健二，李林静

大会実行委員

嶋田珠巳（委員長），佐々木文彦，中川仁，中井延美，鍛冶広真，辰己雄太，
横山竜一郎

日本言語学会第170回大会 要旨集

期 日	2025年6月28日・29日
会 場	明海大学（浦安キャンパス）
発行日	2025年6月28日
編集・発行	日本言語学会
連絡先	〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷 学会フォーラム内 電話: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 E-mail: lsj@nacos.com